
Switch【モラトリアムを選ぶとすること】続・序章

作倉エリナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Switch【モラトリアムを選ぶと言つこと】 続・序章

【著者名】

作倉エリナ

【あらすじ】

地殻変動が起った世界は、大きく変化をしていた。中王という支配者が現れ、戦える者が力を持つ時代になっていた。オワリ国の中王と、その護衛部隊を中心に繰り広げられる恋、友情、絆。圧制下で支配者に逆らいながら、変化と成長をしていく少年達の物語。

Switch【モラトリアムを選ぶと言つこと】 続章です。

第1話 続・世界を見る

01

ティアスは、ケガをして運ばれてきた客室をそのまま借りて、オワリ国にいることになった。

サワダの父親がミハマの父親、つまりサワダ元老院議院がオワリの王に『自分が後見になる』といつて話を通したらしい。

「聞いた? アイハラのいた時代ではね、あのティアスって女は、実はオレの女で、アイハラはずっとあの女を狙つてたらしいんですよ、これが」

「ほー、なるほどね。だからあの態度か。いやあ、アイハラくん、判りやすいなあ。いやいや」

「……そう言つ話は人のいないところでしりょー関係ないつったの、お前らじやん!…」

城の屋上で、2人仲良く煙草を噴かしながら横に並んで床に座り、向かいに座るオレをからかう。

イズミのヤツ、サワダの前だと随分優しいんじゃないの?ちくしょうめ。

でも、じつしてると、学校の屋上で話してた時みたいだな。泉も沢田も、自信たっぷりつづーか、自信過剰つて言うか、こうやって人のことをすぐからかってきたから。オレがヤツらから見たらいじられキヤラだつただけかもしれないけど。まあ、泉は沢田ですらいじつてたからな。新島くらいか。あいつは妙に大人びてて、いじられたフリはしてたけど、何だかずるい印象があつたから。

そういうや、ティアスがここにいるってことは……」「イジマや、一緒にいたはずのセリ少佐はどうしてるんだろう。

彼女が危機の時に、確かに傍にサワダがいたから手が出せなかつたとはいえ、何もしなかつたんだろうか。それとも、別の所にいたつてことかな。

「……で、アイハラ的にどうなのぞ、彼女は」「だから、別人だつづーの！顔は一緒だけど、髪型とか違うし、あんなサワダみたいに戦つような子じゃないよ。フツーの子だった」

オレの知つてる彼女と、じつちの彼女の大きな違いは、髪型だつた。

腰まで伸びた長い髪に、違和感を覚えた。だけど、話してみたら、オレの知つてる彼女だった。

そして何よりオレは、彼女と秘密を共有している。

「でも、縁だの何だの言つてたけどさ、ただの偶然つてことだね」「偶然？何が？お前の言つことは良くわかんねえよ」「テツちゃん、吸いすぎじゃない？シユウジさんみたいになっちゃうよ？」

イズミにそう指摘され、サワダは苦笑いと共に、一本目の煙草をしました。

その様子に、妙な違和感のようなものを感じたのはオレだけだろうか。何だか、サワダらしくないって言つか……。

イズミに対しては、なんか一言くらい文句を言いそうなモンなんだけど。「お前だって吸つてんだろ！」とか、大したことじやないけど……。

シユウジさんみたいって言つのがきついのか？

「偶然つて？」

「だつて、彼女はアイハラのいた時代では、テツちゃんの女だつたんだろ？でも、テツちゃんと彼女がどうにかなるなんてあり得ないし、何よりミハマが興味を持つてるし」

「だよなあ。オレも別に、どうでも良いし」

「……ホントに？てか、なんでイズミも『あり得ない』とか言い切れる？」

……あ、やべ。睨まれた。

「シン、睨むなよ。」(えーぞ)

オレの表情が変わったのをみて、溜息をつきながらサワダがイズミをたしなめてくれた。

「でも、シンの言つとおつだよ。あり得ない」

サワダは……結局一本目の煙草に手をつけた。イズミはそれをとめなかつた。

氣味が悪いほど、イズミはサワダに氣を使つていた。いや、イズミだけじゃない。イツキ中尉も、ミナミさんも。もしかしたら、シユウジさんですら氣を使つてるかも知れない。

サワダは、常に何か重いものでも背負つてゐるような顔をしながら、時折笑顔を見せてくれる。

オレですり、彼の笑顔に疑問を感じる。

「あり得ないテツちゃんに質問ですけど？」

「なんだよ」

「何で彼女を助けたの？魔物と戦うのは良いけど、彼女を助ける必要はないね。共同戦線をはつたわけでもないし。ほっとけばいい」「薄情！女の子が一人で戦つてんのに、助けもしないのか、イズミは！？」

助けなかつたら、ティアスはどうなつてたんだよ……そこまで鬼か、この男は！！

「状況によるかな。でも、オレだったら、彼女は助けない」「なんで？！」
「そんなに田くじらいたてんなよ。かつこわるい」「かつこわるくない！当然のことと言つてるんだ、オレは…」「ああ、惚れた女を助けないで、どうするつてか？」「そうじやなくて！」

オレ一人で怒鳴つてて、なんか子供みたいだ。でも、イズミの言葉は納得できない。

「あの女は、怪しそうなよ。オワリにあんな技を使う女はいないし、あそこまで魔物と渡り合える人間なら、何かしら、どこかの国でよい扱いを受けてる。だからこそ、元傭兵の集まりだった連中が、現中王直属部隊として国を動かしてゐるわけだ。どこの国も、腕の立つ戦士を集めるのに必死だよ。表だって研究が出来ないから余計に。そう考えたら、彼女は怪しい。一体何者だ？どこかの国の腕の立つ戦士で、この国を探りに来たんじゃないかつてね。そう考えるよ」

溜息をつきながら説明するサワダの横で、イズミが苦笑いする。
おおかたサワダが親切に、オレみたいな何も出来ない平和なガキに説明しているのを、「お節介だな」とでも思つてゐんだろう。

「……どこの国に属する」とも由としない、流浪の旅人も知れないじゃないか」

「映画の見過ぎだ。実際、そんなんじゃ今の世の中生きてけない。中王軍によつて二ホン國中くまなく探されてるからな」

「……なんだよ、それ」

「やつ言つ世の中つてことだよ。オワリの国でも、城の中でもオレ達には自由がない。お前、とんでもない時代に来たんだよ、判つてる?」

「判つてるよ。でも、城の中でもつて……」

思わず、辺りを見渡した。

「平氣だよ、いじはね。オレに抜かりはない」

「やつと笑つたのはイズミだつた。

「城の中は……?」

「たまに、中王軍のスパイが入つてたりするね。隠密部隊つて言つの?」つそり各國の王宮に忍び込んで、中王にいじ報告してるらしいね

さらつとやつ言つサワダ。

おこおこ。それつて、とんでもない状況じゃない?・常に監視されてるつてことじやん。戦国時代かよ!（似たようなもんか）

「……オレに抜かりはないつてことは……」

「王子の護衛部隊近辺は、シンが片づけてるからな。大丈夫だよ。じゃなきや、オレ達、おちおち会話も出来ねえよ」

……簡単に言つけど、それつて相当すげくない?さすが怪獣。だ

てにあんな魔物と渡り合つてないし。いや、それ以上にすげくないか？

「でも、護衛部隊近辺だけなんだ」「他の所までいちいちやつてらんないよ」

悪びれずにそう言つイズミを、サワダが笑い飛ばした。ホントに、ここからの味方つて、護衛部隊だけなんだな。

だから、オレもまた、ここからは弾かれてしまうんだ。

02

「……なあ、中王は、何で各国にスパイとかいれてんの？だつて、大名行列までやらせて、しつかり支配してるのに」

「さあね、気が小さいんじゃないの？」

オレの質問に対してもう答えたイズミを睨み付けたら、笑い飛ばされた。

「てか、元傭兵の集まりつて言つてた、中王の周りの人は。なあ？」

「ああ、言つた言つた。オレらの年より上のヤツは知つてる。知つてるつて言つても、各国の支配階級くらいだけだけど。情報操作もされてるし」

わざわざ説明してくれたサワダに、イズミがからかいつつに「親切」なんて言つて笑つた。

「どうぞ」と、

イズミの方を見るのをやめた。

「テツちゃん。そんなヤツに説明したつてしょうがないでしょ？大体、そいつの話がホントなら、この時代のことなんか、コイツには関係ないんだし」

「関係ないからこそ、知つといた方がいいこともあるかもな。ミハマなら、多分そう言つさ。そのつもりでコイツを放し飼いにしてるんだろう？」

放し飼い……言い得て妙とでも言つべきか。

実際、王子の護衛部隊だつて、オレに対しては微妙な態度だ。オレが悪いのかも知れないけど。王子であるミハマが、オレに対してもフラットな見方をしてくれた。だからこそ、こいつらもそれに倣つている。それだけだ。

痛いほど、判つてきた。

「関係ないからこそ、知らなくても良いことだつてあるわ。ミハマなら、そうとも言つだろうね。だからこそ、オレ達も放し飼いだよ。オレの態度を見てもね」

サワダは溜息で返事をした。

イズミの言葉の意味も判る。

ミハマはオレを全面的に信用してゐるわけじゃない。出会つてからの時間を考えれば当然だ。

だからこそ、オレにも、オレを疑う者達にも、好き勝手にやらせている。

何より、オレはともかく、彼は彼の護衛部隊を、何より誰より信頼している。彼らがそれに応えるために動いているから、全幅の信

頼を寄せているのか、それとも、彼が信頼するから、彼らがより心えようとするのか。

「スペイ、いるんだね？」この国にも

「いるよ？」

「だから、オレが余計なこと言つたらまずいんじゃないの？」

睨むようにイズミを見つめるオレに、彼は苦笑いで応えた。

「何度も言つけどね、オレはそれなりの階級の軍人で、この国の世話になるなり、それなりの態度しろっての。しかも年上なんだしだつてお前、テツちゃんと同じ年なんだろ？あれ？今年18なら、テツちゃんのが上？」

「……誰が年上？」

「だから、オレ。君の時代のオレのやつらとは、世と同じ年かもしれないけど、オレは今19歳ですか？」

「……そうなの？学年一緒にとかじゃなく？」

「なくー！」

「うう言えば、一イジマも20歳とか言つてた気がする。なんか、ここまではくつつのに、年齢とか違うのって、逆に違和感あるんですけどーー」

「そんなに驚いた顔しなくても。意味が判らん」

「だつてーーこんなに似てるのに、つーかまんまなのにーー気持ち悪い
よ」

「気持ち悪い意味がわかんねえし」

「もう良いよ。良いから、説明して」

「図々しこよね、アイハラくん」

そう言つていたけど、イズミは何故か笑つていた。
だいぶ、態度が柔らかくなつた気がする。

「要するにだ。今から25年前、当時傭兵だった現中王は、仲間と共に中央に乗り込み、中王を殺し、赤子だった中王の娘を幽閉し、その座に自らが座つた。それだけのことだ」

「……クーデターみたいなこと？」

「それならまだマシじゃない？」

ホントに、支配者なんだ。今の中王は、

だから、逆らつた国は武力制圧され、『墓』だなんて呼ばれる。逃げ場はない。この世界は、もうこの狭い場所しかないのに。

「なあ、その中王の娘って……？」

幽閉したつてことは、殺されなかつたつてことだ。

なんでだろう。赤ちゃんを殺すのは忍びないつてことかな？多少なりとも、人間らしい心があるつてこと？

「行方不明だよ。5年前からね。まあ、前中王の娘が生きてるつてことを知つているのは、中王軍でも一部だけどね。統括部があれから、血眼になつて探してゐるし。行方不明になつたとき、中央に入りしてゐる各国のエライさん達は、彼女が死んだものだと思つてゐる。そう発表されたし」

「意味が判んないつて。何それ？何が真実で？誰が何を知つてゐるんだよ？」

「さあ？」

「何でイズミはそんなこと知つてゐるんだ？」

彼は笑顔で応えた。聞くだけ野暮なのかも知れない。コイツは何か底が知れない。

「中王が各国にスパイを派遣してるように、各国も対応してる。生き残り、のし上がり、支配から逃れようとしたり、うまく立ち回るためにね。情報がなかつたら、何も知らずにのたれ死んでくだけだから、この世界では」

サワダが補足してくれた。

これは、彼の優しさなのだろう。……たぶん。

「中王って、いつたい何なんだよ。世界の支配者？何がしたいんだよ。何で探してんの？前の中王の娘を」

「さあ。何がしたいかはよく判らない。だけど、中王の血を引くものを探すのには、何か理由があるらしい。こないだ、シュウジが何か言つてたな」

「言つてたね。まあでも、そんなこと、じつに話しても仕方ないでしょ？必要な。ただ、支配されてる側の正しい対応としては、どうやって支配されてるか理解した上で、NGワードを喋らないうて言つのがベターじゃないの？」

彼は、これ以上喋るつもりはなかつたのだろう。サワダの隣に座り、彼のマネをするように煙草を吸い始めた。

「支配されてるだけじゃ、納得いかないし、何とかしたいから、『それなりの対応つてヤツ』をしてるんだろう？」

「当然だろ？何もしないままのたれ死ぬのだけはいやだね

」やつと笑つたのはイズミだった。

「な？ テツちゃん」

「……だな」

その笑顔に、オレですら違和感を感じてしまつほど、彼は力無く微笑み返した。

03

オレ達の間には、しばらく沈黙と煙草の煙だけが流れていった。

サワダに似つかわしくない力無い微笑みが、オレからもイズミからも言葉を奪つた。そして、そのことは他の誰よりサワダ自身がよく理解しているようだつた。バツが悪そうに、また力無く微笑んだ。あの、無愛想で、口が悪くて、偉そうなサワダが。妙に優しいサワダは、オレの知つてゐる沢田とは似ても似つかなかつた。いや、あつちの沢田も、優しいところはあつたんだけど。こんなに氣弱というか、今にも消えてしまいそうな、儂さみたいなものとは縁遠かつたから。

「悪い、オレ、会議あつたの忘れてた」

そう言って、携帯ではなく、腕時計を確認して、サワダは立ち上がりつた。

「会議？ イズミ…… 中佐は？」

「今日は、おエライさんの会議。テツちゃんだけ。オレはテツちゃんと階級は一緒でも、生まれも育ちも違うからさ」

「何だよ、それ」

「文字通りの意味だよ。何で嫌そつとすんの、君が。君の常識にな

「いつことだらう？要するに、よつぱんじやんねえ」

「いや、一概にそづじやないけど……こんな世界があつたけど、でも、オレの周りでは……」

「こんな手の届く世界で、そんな辛いこと言われたって。

「みたいだな。じゃ、オレ行くから」

「うえ？！」

「つーか、イズミと2人にしないでくれー！…優しさ！…優しさプリーズ！」

「オレの願いもむなしく、サワダは階段室の扉を抜け、下階に降りてしまった。かといって、この場で逃げるのも……」

「西暦つたよな、たしか。2000年だっけ？アイハラの時代」「まあ、その辺り……」

「知ってるよ。一ホンには名田上、階級差つて言つのは存在しなかつた。まあ、あるところにはしつかりあつたんだけど。そういうの、気にもしてなかつたわけだろ？」

「…………うるさいな」

「君の感覚上、どう思おうと、この世界にしも、この国にしも、そしてこの城にも、きつちり階級社会つて言つのはあるわけよ。それも、あまりいい感じでなく、ね」

「なんだよ。不愉快そうなの、イズミじやんよ」

「…………無視かよ。オレの顔すら見ないし。」

「でも、軍人としては一緒にわけだろ？それに、中佐つて結構上だつて聞いたぞ？」

「そ、だから、この辺つまでが、今のミハマの力の限界なわけよ。」

彼の護衛部隊だけは、彼が選び、共に歩むことを選んだメンツ。だけど、彼がそれを望むにしろ望まないにしろ、何をどう頑張つても、この国の一一番エライ人の息子なんだ。だから、彼を守り、彼の傍にいるものはそれなりの階級の者じゃないといけない。でも、貴族じゃないオレ達は、元々彼の足下にすら近寄れない存在。だから、重要な会議なんか、でれるわけもない。階級ばかり偉そうでもね

「サワダは……」

「ミハマとは、王子と臣下の関係だけど、彼は王弟の息子だし、彼の従兄弟に当たる。相当偉い方の人だよ」

「そうだつたつけ?」

「まあ、あんまりそう見えないんだけどね。ちなみに、シユウジさんも王妃様の実弟だから、階級も扱いも相当上だよ」

「ウソ言つてない? それ

「まあ、嘘臭く聞こえるよねえ。シユウジさんだもんねえ」

「失礼ですよ、あんた達」

座り込んで話すオレ達の目の前に、いつの間にかシユウジさんが立っていた。もちろん、煙草をくわえたまま。

「だつてしょうがないじゃない、シユウジさんだもん。会議は良いの?」

恥びれず、笑顔を見せるイズミ。シユウジさんの煙草に火をつけるために、立ち上がった。ホストかお前は。

「今まで将官クラスだけでみっちりですよ。今は休憩中です。テツは一緒じゃなかつたんですか?」

彼はまるで山で空氣でも吸つよくな顔で、煙を灰にいれる。

「たった今、会議に向かったけど。すれ違わなかつた？」

「いいえ、残念ながら」

「あ、そう。何、中佐」ときじや交ざれないよつな、そんな会議なの?オレが呼ばれないのはいつものことだけど

「いても、いやな目に遭つだけですよ。判つてるでしょうが」

「だねえ。シユウジさん、将官会議あると、大抵いろいろしてゐるから」

なんか、どつちが大人か判らないな。茶化すようなしゃべり方のイズミだけど、端から見ると、シユウジさんの『機嫌をとつてる』ようにも見える。

「そもそも、元老院が軍部の会議にしゃしゃり出てくる意味が判んないんですね。てか、私は軍部の会議になんか出たくもないんですけど。時間の無駄ですよ」

「しょうがないじゃん、軍師なんだから、殿下付きの。でも、元老院も、『この若造が』って言つ思いを噛み殺しながら、シユウジさんには一畠置いてるんだしわ」

シユウジさんは溜息と一緒に煙を吐く。いらいらしてゐるのか、煙草を捨てるに力一杯踏みつける。見かねたイズミがもう一本勧めた。

「一畠置くつて?」

「この人、ただのオタクに見えるけど、いつも見てて、国で一番くらいに優秀な軍師でもあるわけよ」

「へえ……」

「驚くだろ?」

「驚くよ、そりゃ」

へラへラしながらバカにするイズミと、どうしてもシユウジさん

が優秀だつて言うのを信用してない顔のオレに、ショウジさんが嫌な顔をする。

「……あ、そういうば

怒ると思っていたショウジさんが、突然、イズミを指さした。

「何、突然。お説教なら聞かないよ？」

「説教は会議の後にします。そう言えば、忘れてたんですけど、ミハマが呼んでもましたよ。客室の部屋で。呼びに来たんでした」

忘れすぎだら!

「客人……？ ああ、噂の彼女ね。アイハラくんのお気に入り
「その話題は忘れろよ！」

へえ、といつた顔のショウジさんの視線が恥ずかしそう。
イズミは笑いながら急いで階段室に向かって、下に降りていった。

04

彼を見送りながら、ショウジさんはオレのことを見つめる。まるで親のように。

「大変でしょう？ 一人つて言うのは」

彼は箱から最後の煙草を取り出し、火をつけた。

「突然、何ですか？」

「いいえ。一人になつていなか、心配してたんですよ、それなりに。……あの子達は、何というか極端なんですよ。敵と味方の差がね。ミハマのことが全てだし、他は敵にしか見えていない。まあ、それなりの価値が、ミハマにはあるからなんですけど」「知つてます」

ミハマの価値だなんて、オレには判らないけれど。でも、彼らはオレのことを信用していない。それはよく判つてゐる。

「極端なりに、歩み寄りを見せてるじゃないですか。あの人見知りが」

「人見知り？ サワダのこと？」

人見知りつて言つたか、引きこもりの根暗だな。精神的引きこもり。普通にしてる分、タチが悪い。

「シンですよ。あれは、扱いにくいでしょう。普段にこやかな分、余計にね。まあ、ミハマやテツのフォローもあるかも知れませんが、随分態度が柔らかくなつてると思いますよ。何があつたか知らないんですけど。良い傾向です」

……あれ、柔らかいのかなあ。

「あれで、まあまあ、柔らかいんですよ」

見透かしたようにそう言つた。

「そう言えば、あの客人をお気に入りだとか言つてましたね」

「いや、その……ほら、綺麗な子だし」

「君のいた時代の話つてヤツを、テツから聞きましたよ。あの子は

笑い飛ばしてましたけどね「

「別人だよ」

「君の口からそんな言葉が出るなんて、意外ですね」

……意外？ なんで？

シユウジさんは、何でそんな……？？

「何で意外なんですか？」

「いえ……君は、あの時代に執着してるように見えましたから」

「当たり前ですよ。シユウジさんだつて……ミハマ達に」

「そうですね。誰しも、執着するモノはありますからね」

なんて言つたらいいんだろう。

シユウジさんは案外、人を見透かしたような発言をする。まるで、

大人みたいだ。

……大人か。

「まだ、元いた時代に戻りたいと思いますか？」

「何ですか。当たり前ですよ。……頼みますつて、シユウジさんしか判んないんでしょ？ 多分」

「私でも、確証はないんですけどねえ。……いつそ、この時代を満喫してみたらどうですか？」

「いやですよ。こんな戦争やら、派閥争いやら、魔物まで現れるような世界。オレ、闘えないのに。戦い方も教えてくれないし。こういう場合、違う世界から来たヤツはスーパーマンになれるもんだって、ドラ もんの時代から決まってるだろ？」

「そんな都合のいい」

シユウジさんに言われたくないかも。

「戦えないなら戦えないなりに、生き方つてモンがありますよ」「シユウジさんみたいに？」

「私だって、戦つてますよ。軍師ですから。あの怪獣達を基準にしないでくださいね。あの子達こそ『特別』ですから」「極端つてこと?」

「そうですね。中央内ですか、テツは特別扱いといつか、希有の目で見られていくといつか。シンは、表には出てこないのでそつでもないんですけど」「そうなんだ」「そうなんだ」

嫌がりそつだな、サワダの性格上。人前で平氣でピアノとか弾くくせに、意外とあがり性だし。騒がれるのか嫌がるし。

「じゃあ、私はこれで。もうそろそろ戻らないと五円蠅いんじ

煙草を消し、『十寧に携帯灰皿を取り出し、捨てる』と、オレに会釈をして階段室に向かう。

「戻る方法、お願いですからねー。シユウジさんだけが頼りなんだからー」「あまりあてにしないでくださいね」

オレの方へ振り向くことなく、軽く手を振りながら階段を下りていった。

「ホントにお前、タイムスリップとかしてたんだ。漫画か?」「…………うわーびっくりしたーーーーイジマ……大……尉?」

後ろに立っていたのは二イジマだった。でも、軍服は着ていなかつた。

「人の階級ぐらい覚えとけよ。まあ、制服着てないから無理もないけど」

制服着ても判らないよ。何か書いてあるのか？

それより、ここ、オワリ国なんですけど。良いのか、こんな所にいて？しかも、ここ、屋上だぞ？どうやって入り込んだんだ？

確かに中央の制服を着ても目立つけど、私服で歩いていても目立つぞ、ここは。

「何だよ、じろじろ見て。何か変か？」

「いや……ティアスのことが心配できたのか？もしかして」「心配……まあ、そんなとこかな」

「セリ少佐が、サワダ達に見られてたけど。一緒にいたのがティアスだとは思つてないみたいだけど」

そう言つたら、一イジマは人の悪い笑みを浮かべた。

「いいのか？そんなこと言つちやつて」

「だつて、ティアスにその話をするスキがないからさ。大抵、誰か一緒にいるし。……何かミハマが妙に気に入つちやつてるみたいだし」

腹を抱えて笑っていた。いくらなんでも笑いすぎだろ。

「姫、性格はあれだけど、見た目はいい女だしな。元々、あの王子様は楽師を氣に入つてたわけだし、当然といえば当然だな」「今、そんな話していないじゃんよ」

「お前、誰の味方なの？」

するい。急にまじめな顔すんなって。それは、オレの知ってる新島には無い行動パターンだな。

思わず後ずさりしてしまったが、すぐ後ろにあった柵にぶつかってしまった。

「もう一度聞こつか? 誰の味方?」

05

逃げられない。

オレの頭の中はそれだけだった。

逃げる必要なんか無いはずなのに、オレの視線は階段室の入口に注がれていた。

「そんな怯えた顔すんなよ」

オレのこと警しておいて、ニイジマは苦笑いをして見せた。

「オレがはじめてるみたいじゃんよ?」

「じめてんだよ。何だよなんだよ。どこつもコイツも、何でこんな……。

「誰の味方とか……そんなの、オレには判らないし」

「やう。それじゃ、お前が困ることになると思つたけど。そんなずるいこと言つてるとひどいや。うちのお姉さんよ、そんなヤツ、相手にもしないよ」

どうして、オレは『ティアスの味方』だと言わなかつたのか。

彼女に、一番心を傾けているのは確かなのに。

「トージー！こんな所にいた！」

「うわ！なんだお前、びっくりさせんなよ……姫の様子見てたんじやなかつたのか」

助かつた……のか？いや、状況が悪くなつたのか？

振り向き、怒鳴るニイジマの後ろにはセリ少佐が立つていた。彼もまた、デニムに黒のジャケットで、軍服と比べたら随分軽装だつた。

「姫の部屋には大抵誰かいて、なかなか近付けないよ。この国は、なかなか厳重だしね」

……この人の笑顔には邪心がないよ……

同じにこやかでも、斜に構えてて常に黒い腹がちらちら見える
イズミとは全然違う！ちょっと、ミハマと感じが似てるかも。
あれ？でもそれだとこの人も、ミハマみたいに食んだところがあ
るつてことに……。

「口ウタ、お前めつちや値踏みされてるぞ？」

「……なに言つてんだよ、ニイジマ！オレ、そんな風を見てないじゃ
ん」

「見てたよ。口開けたり閉めたり、目なんか泳いじゃつて。判りやす
い」

困つたような笑顔でそう言われてしまうと……何かホントに申し
訳ないつづーの。

イズミみたいに、嫌味たつぱりの方が気は楽かな……。後ろめた
いときは。

「え？ オレもあるよ？ 値踏みくらー」

「ああ、はいはい。お前は良いから喋るなって」

「てか、紹介してよ。姫の写真持つてた子だろ？」

「いいよ、もう。お前は有名人だし、コイツはもう知ってるみたいだから。なあ？」

「うん。」イジマも、セリ少佐も、雑誌で見た

サワダとちがって、この2人は雑誌じときでは騒ぎもしない。普通のこととして扱っていた。

「……オレ、そろそろ戻るよ」

今のスキに逃げてしまおう。何か一イジマもやっぱり怖い。オレの知ってる新島とは違うぞ。似てるけど……オレは「怪しきもの」扱いだ。

「ちょっと待った。まだ用は終わってないし。無駄話しに来たわけじゃないからや」

……やっぱり。なんか用があつたんだな。

猫の子を掴むように、軽々とオレの首根っこを掴む一イジマ。たったそれだけのことなのに、オレはもう動けない。

悔しいし……ホントにオレには何も出来ないことを自覚せしられる。

「オレにはないよ

「お前になくともオレこはあるよ。ちょっと、頼まれて欲しいんだけど？」

「すみません。意味が判りません。勘弁してください

「お前なあ。姫からパスもらつたる?」

「でも、ティアスがここにいるなら、あんまり関係ないし」

そう言つて、ちょっとだけ恥ずかしくなつてしまつた。

「それなんだよな。……あんなケガするなんて思つてなかつたから
そ。計算違いだ」

「——イマジマはオレに突つ込みもせず、溜息をつきながらぼやいていた。

「うん。姫がイライラしてるのが手に取るよつに判つてさ」

「……コウタ、お前それで部屋に近づかねえんじゃないだろな?」「だつて、何か愚痴られそうだし。トージがフォローしてあげなよ」「えー。やだやだ。大体、カナさんに連絡したら、オレが怒られたんだぞ? 2人もついていながら何やつてんのつづつて。オレはその時いなかつたし、姫の責任じゃんか」

「でも、トージだつてオレに怒つたし。お前がついていながら、あんな目にあわせてつて」

「いや、まあ。なんだ。まあまあ。忘れりょ」

つーか、お前らオレの存在を忘れてるだろ。
今のスキに逃げるか。

「……で、用つて言つのはまだ」

「……何でしよう?」

もちろん、彼はオレを逃がすわけがなかつた。再び首根っこを捕まってしまった。

「話を聞いて判るとおり、姫との連絡がとりづらい状況にある。あの人、ケガが酷くて動けないし」

「本人は、……随分平氣そうな顔してるけど」

他の連中と一緒に見舞いに行つたときは、もう平氣、みたいなことを言つてたけど……。

「ホントに平氣なら動いてるだろ？あの部屋からほとんど出られないと。まだ時間がかかる」

「そうなんだ」

「それに、この国は……いや、あの王子の近辺に限つてだけ、ガードが堅くて近付きにくい」

「それって、イズミやサワダがいるからってこと？」

「そうだな。護衛部隊は厄介だよ。まあ、他は人数はいるけど、大したこと無いつて言うか。うちにはコウタもいるし」

セリ少佐は微笑むことでトージの言葉を受け止めていた。こうして見えてると、ただの人の良さそうな兄ちゃんにしか見えないんだけど。相当すごいでことだよな。

さつき、イズミの話を聞いてからだから、その価値はよく判る。

「もしかして、オレに、ティアスとの橋渡しをしちつてこと？」「そこまでは求めてないけど。もう言つこと？」

何で疑問型？失礼なくせに、求めてるし！？

オレだって、2人でなんて滅多に会えないのに！

確かにオレは、この城の中で、場所は限られてるけれど、自由に動けるようになった。

オレの学ランの胸には金色の小さなバッヂがついている。ちょっと凝った彫りが入ってるくせに、星形でちょっとカジュアル。いぶした感じの色が、アンティークっぽくて嫌いじゃない。これがまた意外とかっこよかつたりするんだけど。

だから、このバッヂ自体に不満はないんだけど。

だけどこのバッヂは、要するに識別の印なわけで。

まあ、名札だってそうなんだけど。でもこのバッヂがどういう意味での識別なのか？それが判らず、ちょっとだけ不愉快だった。

でも、オレに自由が、限られた中での自由が『えられたのは、確かにこのバッヂのおかげだ。

国でオレが軍服を着てるわけにも行かない。私服でも、この学ランでも目立つ。だから、この人は部外者じゃないですよ、という証なのだろう。

事実、先ほど二イジマ達やイズミ達が言っていたように、この国は外敵を警戒をしている。

そんな中、オレはただの刺激物にしかならない。

だから自分で刺激物じゃないことをアピールするしかない。

でも、刺激物じゃないことをアピールできても、浮いてることには変わりない。

彼女の部屋へ向かう道のりも、オレは好きじゃなかった。

ここにいると、人目に付くのが、いやになつてくる。

そして、いやでも人を必死で観察しなくちゃいけないことも気

付かされる。

ホントは、ここにいるのは不愉快でしかなかつた。感謝をすることとは、別の話だ。

なのに、ティアスと二イジマ達の間をつなぐ? この上、オレにここで一体どう動けと?!

ティアスの部屋に向かう途中で、何人も軍服を着ている人に会う。親衛隊以外、この城の上層階であるフロアで、オレが知ってる……つまりは過去で知り合ったヤツに会うこととなかつた。外ではたまに見かけることもあつたけど。

階級の低い兵は、このフロアには上がって来れない……らしい。年齢的に、まだ士官学校生か、士官学校卒でも准尉か少尉、大抵は陸軍歩兵といったところだ。

要するに、このフロアは、あのイズミ達が下手に出るような、階級の高い人たちばかりなのだ。

だから、余計に居心地が悪い。

初めて会う人が、どれくらい偉くて、どんな扱いで、どんな立場なのか、ある程度は見極めなくちゃいけないってこと。

そんなめんどくさい上に、むかつくこと、いちいちしなくちゃいけないのでいやで仕方ない。

例えば……ちょうどティアスの部屋の前に立つ、軍服に身を包んだ男性。もう、中身なんか見えやしない。間違えないために、まず軍服を、それから階級章を見ないと。

おそらく、この部屋に一緒にいるミハマか、イズミに用があるんだろうから、伝令だとしても少尉以上。伝令じゃなく、用があるなあ、もつと……。

胸に光る勲章と、襟に付いた小さな階級章。それを見逃さないようだ。

階級は少佐、勲章は一つ。でも、戦争での功績じゃない。おそらく年は40近いだろ。豊かな口ひげを蓄えていること、オレはやつと気がついた。

「……君は？ 殿下に……」「用ですか？」

口ひげの少佐は、オレを讃めるように値踏みしたあと、胸に光るバッヂを見つけたらしく、値踏みをやめ、言葉を変えた。オレはわざとらしく敬礼して見せた。

「いえ。オレ……僕は結構です。この部屋の客人に用がありますので……。後ほど、外で待たせていただきます」

オレの言葉を受け、少佐は部屋の扉をノックし、許可を得て入っていった。

中は何だか賑やかだった。

そう言えば、サワダの父を後見に持つと言つことと、出会いのこともありますて、彼らは彼女を警戒していたはずなのに、話している姿は何だか楽しそうだった。

その姿は、オレの不安を煽っていた。それは十分理解している。

部屋の外で待っていたら、ミハママトイズミが口ひげの少佐と一緒に部屋から出てきた。

「イズミ中佐は結構ですけれど」

「いえいえ。王子の護衛が、私の仕事ですから」

笑顔を崩さないまま、減らず口を叩くイズミ。隣を歩くハマが、オレの姿に気付いて苦笑いして見せた。

……何か、どうと疲れるな。

思わず溜息をもらす。

今なら、部屋にはティアス一人か……。やつとまともに話が出来そうだな。

でも、何から話したら良いんだ? まいるな……ちょっと考えないと。

扉をノックするまでに、随分時間がかかったような気がした。ニイジマがオレに何を求めてるのか知らないけど、彼からの重圧はノックする手を鈍らせるのに充分だった。

「あれ? アイハラ? 何だよ、こんな所で」

「?え? ! 何で、サワダがティアスの部屋から……? 会議に行つたんじや」

不思議そうな顔でオレを見ながら、サワダは後ろ手に扉を閉めた。

てか、なんでミハマ達と一緒に出てこなかつたんだよ。今まで……そんなに長い時間じやなかつたにしろ、もしかして2人きりだつたつてこと? !

「いや、報告会だけだつたし、遅れていつたからすぐ終わつたんだ」

「でも、何でここに?」

「いや、ミハマ達がいたから……。なに噛みついでんだよ」

苦笑いを見せるサワダ。……ちょっと大人気なかつたかも。
でも、よりにもよつて、サワダなんだもんな……。

「別に。なに話してた？」

「話？……話、ねえ……」

田を伏せる。その顔が、まるでオレの知ってる沢田のようだ、
……嫌だった。

「とくに何も？お前が気にするようなことは。自分の知ってる女とは別人とか言つときながら、相当だな」

「サワダこそ。何でそんな含んだ言い方するんだ？」

一瞬、サワダの表情が変わったのを見逃さなかつた。
すぐに元に戻つたけど……慌てたような、悪いコトしたような、
そんな顔だった。

「なにもない。あるわけもない。勝手に誤解すんなよ、めんどくせ
え」

そう言つて、オレの前から逃げるよつに、彼は立ち去つた。

……絶対何かあつた！
怪しそうるよー好きになるわけなんか無いって言つときながら、
あの態度！

「相原です、入って良い?」

思わず、ドアをノックする手に力がいる。ちくしょう、悔しい……。何があったんだ。

ティアスもちつとも返事してくれないし。

「……ごめんな。どうかした?どうぞ?」

何だ、わざわざ扉まで来て開けてくれたんだ。申し訳なさそうに扉の向こうからオレを覗いていた。

「1人?さつきサワダが出てきたみたいだけど

「……あ、うん。いたけど、一緒に他の人もいたよ?」

いや、そうじやないだろ?時間差があつただろ?

「入つたら?こんな所で話さないでも」

「うん」

1人きりなのに、あつさり部屋に入れるな……。平気なのか
な、そう言うの。

もしかしたら、サワダのこと……。いや、だつたらわざわざ『他の人も一緒に』なんて言う必要がない。

何度かこの部屋に入ったけど、2人きりになるのは初めてだつた。大抵誰か一緒だつたから。

それは、他の連中がオレのことと信用しきつてないのもあるのだろうけど。

だつて、この部屋と、オレにあてがわれた部屋は、随分扱いが違つ。広さも、オレの部屋の倍くらいはあるし、ベッドも広い。

テレビもあつたけど……ティアスはつけてないみたいだつた。オレの部屋が素泊まり客多めのビジネスホテル（安め）だとすると、この部屋はシティホテルのエグゼクティブフロアにありそうな部屋だつた。言つたこと無いからよく判らないけど。

でも、やっぱりベッドには天蓋がある。意味が判らん。

彼女は後見にサワダの父親である元老院議院がついている。オレのように招かれざる客ではないということかな。

だつて、彼女も私服でこの城にいるのに、よそ者なのに、オレのつけているバッジはない。

だからと言つて、この部屋には当然、生活感なんて無いけど。

「体……もう、起きあがつても大丈夫なの？」の間は起きあがるのも大変だつたのに

「こんな言葉をかけることすら難しい距離感なのに、どうやって連絡係など！」

「だいぶね。いつまでも寝てるわけには行かないし。時間もつたしないから」

「若いの、生き急いでるな」

「そうかもね」

彼女は悪戯っぽい笑顔を作つて見せた。

「座りなよ。まだ、体が辛いだろ？」

「ありがと。君は優しいね」

「勇士で良いよ。オレの知ってるティアスは、そう呼んでたから」

そう言つたら、彼女は少しだけ戸惑つていた。申し訳なさそうな顔をして、目を伏せ、オレの顔を見ないようにベッドに腰掛けた。

『オレの知ってるティアス』

オレの知つてる彼女なら、気にするだらうことを判つてて、そういうすることを期待して、わざとオレはそう言つた。

彼女はオレの携帯のデータを消したことを、申し訳なく思つてゐる。だからバスをくれたし、優しくもしてくれる。

そこにつけ込むようにといつたら、言い方が悪いだらう。オレはくすぐつただけ。

「……ユウト。そこの椅子に座つたら？」
「うん」

おそるおそる、オレをそう呼んだ彼女に、オレは満足した。いい気分だ。

彼女が、オレの知る彼女であることと、オレと彼女の共有するこの時間に。

オレの知つてる彼女とは別人かも知れない。でも彼女は、オレと時間を共有した、あの子をこんなにも思い出させる。

「サワダと、何の話をした?」

「何でさつきからサワダ中佐の話ばっかり??」

「いや……まあ……。そりや……。いや、サワダっても、何つーか、女人苦手、みたいな話を聞いてたから、意外だなー……なんんで……」

「何それ。その言い方。何かトージみたい。やだあ?」

唇を尖らせ、むつとしてみせる様は、オレの知ってる彼女そのものだった。

逆にあの、中央の広場にいた、顔を隠した楽師の姿からは想像がつかない。

「あんまり、エライ階級の人って感じじゃないんだ?」

「そんなこと無いわよ? これでもそこそこ階級ですから」

今度は悪戯っぽい笑みを浮かべて見せてくれる。

「ティアスって、いま幾つなの?」

「失礼ね。そんなこと、直球で聞かないでよ、もう。20よ。トージと同じ年」

そう言えば、ニイジマも年上なんだっけ、オレより。あんまりそんな風に見えないけど。

「ふうん。こここの護衛部隊もそつだけど、それって……あんまりよく判らないんだけど、すごいんだろう? その年で、あの階級って言つのは」

「ああ、それはあの男の敷いたルールがメチャクチャだからよ。強ければ、戦つて勝てば、上に上がるだなんて。まあ、のし上がるのにはちょうど良かつたけど」

あの男つて……もしかして魔王のことですか? 支配者じゃないかよ、もう。

その制度でのし上がつてゐる人間にまで、メチャクチャとか言われてるし。

……てか、サカキ元帥との会話を聞いてても思つたんだけど……

…中王に『じてるわりに、忠誠心みたいなモノが感じられないって言つた。ここにいる護衛部隊と比べると、似てる部分もあるし、違うところもある。

護衛部隊は、オワリ国に所属してゐるのに、愛国心といつか、王とか、國自体への忠誠心のようなモノが薄い。國のために戦うし、國を守るために動いているのだけれど、彼らにとつては王子＝ハマが全てだ。

王子が國を守るから、彼らも國を守つてゐる。そんなところがある。だけど、彼らの王子への忠誠心は強く、重い。

良いとも悪いとも思わないけど、護衛部隊も、ティアスも、組織の中で浮いてるよつと見える。

「ちやんと黙つていてね。こんな話。判つてると困つたび

ティアスは、人の悪い笑顔を見せた。余裕たつぱり。

08

黙つていてね。なーんて、かわいいこと……。

……ちがうな。彼女はもしかして、釘を差した？オレのこと信用してない？

だつて彼女は、オレの持つてた彼女の写真を消したり……でも、お詫びだと言つて、パスをくれたり。

彼女の行動には理由がある。

だから、時々こうして心に棘が刺さるような、そんな真似をされるときついけど、仕方ないと納得できる。出来てると思つ。

「どうしたの、そんな辛そうな顔しちゃって」

「……それでもないよ」

「『めんね、こうこう』話し方、良くないとは思つてるんだけど」

そう言つて可愛くほほえむ。

「いや、ホントに気にしないよ。だって、ティアスの立場とか、いろいろあるんだろ？」

「コウトは優しいのね」

彼女は笑顔を崩さない。動くともなかつたけれど。

「立場があることを振りかざして、わがままを言つてるだけの人だつているのにね」

「ティアスは、違うよ」

「そう? ありがとう」

……これつて、ちょっとといい感じじゃない? !
ティアス、オレのこと、かなり好印象だよね!

つて、オレは以前もそう思つてたんだっけ。なのに、沢田にとられてたわけで。

初めてあの2人がキスしてるとことか見かけちゃったときは、本気でショックだったぞ。あいつら、少しば人目を憚れつついのー。

「あ、そうだ。オレ、ニイジマに……」

「ここで一気に彼女との距離を縮めたかった。

「イジマのことをネタに、彼女との秘密を増やすつもりだったの」、彼女は人差し指を立てて、オレに喋らなによつに要求する。

「だめよ。誰が聞いてるか判らない」

「……あ、そうだね。ここ、オワリの国で……」

彼女ことって、ここは敵国だ。複雑な関係ではあるけれど。

だけど、彼女はオレの台詞に、首を横に振った。

「それだけじゃ、無いけどね」

「…………？」

「名前は言っちゃダメよ。頼まれてるのね？」

オレは黙つて頷いた。

「ありがとね、コウト。引き受けてくれたんだ」

彼女の笑顔に、思わず何度も頷く。彼女が感謝してくれるなら、それで充分だ。

彼女はベッドから立ち上がり、少しだけ苦痛に顔を歪ませた。支えるために、オレは立ち上がり、彼女に駆けよる。

彼女はその手を拒否して……拒否したくせに、オレに近付き、耳打ちをした。

「伝えて。『しばらく動けないから、2週間後に彼の合図で動く

と。『それまでに連絡を取れる体制を整備して』

内容は全く色氣がないけど、こんな耳元で囁かれたら、どうぞ
あするつてー

「また、頼むね」

平気な顔をしてたけど、彼女はかなり苦しそうにしていた。
そして、彼女はやっぱりオレの手を拒否した。

「……辛いな……」

「なに?」

「辛いなら、そう言えば、手を借りたら? 別に、悪いことじやない
と思ひナビ。オレなんか、頼りまくりだよ」

もっと笑ってくれると思った。でも、彼女は微笑んだまま。
そう、微笑んだままなんだ。ずっと、同じ笑顔で。

「借りてるよ? あいつらとかね。良くしてくれてる。コウトにも、
頼ってるよ」

「逃げなくとも」

「あはは。『めんね。気分悪くしちゃったんなら許してくれないか
な? ちょっとそういう言いの、苦手なんだ』

それって、男が怖いとか、そう言つこと?

そういうえば、ちょっと、びくついたって言つたか?。何かあ
つたとか?

彼女の視線は、まるでオレに絡みつくようだったけど。誘われ
てるようでたまらないけど、でも、彼女がそう言つなり。

「『めんね。ちょっと休ませてもうひとつも良いかな？』

「あ、うん……。ケガしてるの」「無理させちゃったね」

「気しないで。また来てね」

れつきまでの視線は何だったのか。

彼女はいつも通りだった。その姿に多少引っかかりはあるモノの、彼女に見送られ、部屋を出る。

「なに、いい雰囲気でないの？ 彼女と。つまへやつてんじやん」

扉の外にいたイズミに声をかけられる。つーか、盗み聞きしてたのか？！

『ダメよ。誰が聞いてるか判らない』

……」「こつか……！？ それって、ここのことか！？

「ミハママと一緒にいたんじゃないのかよ」

「こつも一緒にいるわけじゃないだろ。勤務中だし。オレはオレで、自分になすべきことをしてるだけさ」

「ふうん。こいつの、仕事なんだ」

「どうだろ。仕事になるかもね、その内」

彼は悪びれることなく嫌味をオレにぶつけた。

「……オレ、部屋に戻るか？」

「」のそりイズミから距離をとつたのだけれど、彼は簡単にオレの肩を掴み、引き留めた。

「まあまあ。ちょっとお茶でもしない？」

「いやだよ。オレは可愛い女の子としかしない」

「え、オレ、可愛いじゃん」

「身長300m減らしてから言え」

「うわ、酷い」と嘆息なあ。誰に向かつて口をいてんの？』

そんなに力を入れたようには見えなかつたのに、イズミは軽々とオレを持ち上げ、方向を変えた。

「さあて、どこがいいかな。オレ、シロノワールとか食いたいな」

「え？ 本気で出かけんの？ マジでナンパ？！」

「お前みたいな嫌なヤツ、ナンパしねえって」

『そう言いながら、オレの意志を無視して、引きずつてエレベーターに押し始めた。

角で座り込んだまま、オレはイズミの顔を見上げる』とやら出来ない。

「……何故でしょ？ 屋上とかでも……よくない？」

「いや、オレは人と話をするときは、敵も味方もいなくて、人の多い所つて決めてんのよ」

「意味が判らない……。さつきは屋上だつたじやんよ」

「相手が、テツやシユウジさんだつたから」

「なにそれ」

初めてオレは、イズミの顔を見ることが出来た。彼はいつも人の悪い笑顔だつた。

それを見て、どうしてティアスの笑顔を思い出したのか、自分でも判らなかつた。

「あそこは、手の中に収まりそうな、狭い世界を見渡せて、いい気分になれる場所だから」

「余計、意味が判んなじよ……」

「残念。珍しく、本当にことを言つたのに」

エレベーターの扉が開いたと同時に、イズミは再びオレの首根っこを掴んで、引きずり出す。

「シン、ビリへ行く？ アイハラくんから手を離したらどうだ？ 痛そうだ」

ミナミさん――

王宮の出口で、無言で笑顔を浮かべたままオレを引きずるイズミを見かねて声をかけてくれた。

イツキさんの言ったとおりだな。オレに對して怒つてたとしても、優しいよ、この人は。

「ちょっと、コーヒー飲んでくるだけ」

「……そつか」

オレを瞞めるように見元す。やれ。

「良いから、普通に歩かせたらどうだ？」

「逃げるんだよ、コイツ。オレがおじつてやるつて言つてること」

「どうせ経費で落とすつもりだろつ―」

「あつたり前じゃん。何で男に、オレが金出してやうなわけないのさ。すぐ戻るから、ミハマには黙つてこい」

「戻つたら、話を聞いフ」

あれ？ もしかして、ミナさんも納得済み？ それで、いつもの行為？

オレのこと、疑われてるって言つか、疑わしいモノに対しても尋問するのを黙認してること？

「ミ……ミナさん……オレ、何も」

「何もないなら、シンにそいつ詰めていただければ」

「…マジっすか」

助けてはくれない？

引きずられるままのオレを、ミナさんは見送るだけだった。

「食べないの？ シロノワール」

ホントにコメダに連れて来やがつた。しかも、自分で注文しどいて、オレに押しつけるし。

王宮からほど近い、地下鉄の駅の田の前にある喫茶店に、イズミは迷うことなく連れてきた。要するに、いつもこのことをしているつことだ。

怪しい奴と話すとお……王宮で話したくないとき……ミハマにも内緒にしたいとき。

そのわりには、店にはそれなりに人もいる。この中に、敵が紛れてたらどうするんだ。5組くらいしかいないけど、判ったもんじや

ない。

「ん? オレ、甘いモノ苦手なんだよね」

「だつたら頼むなよ」

「食べないの?」

「いや、食べるけど」

オレは甘いモノは大好きだ。むしろコーヒーは苦くて飲めん。勝手に注文しやがつて。強引な男は嫌われるぞ。

「つーか、自分の立場判つてる?」

「判つてるよ」

「判つてる人の態度じやないけどね。めんどくさいから、本題からはこぬけど、君、あの子とはどいつなの?」

「どいつ?」

「どいままで彼女のことを知つてる?」

「どいままでつて?」

「いや、わうわうわうわうたんかな、つて思つて」

こんな真つ昼間に、こんな人のこもれする話じやねえだろー。

「オレ達、ほんとんじ話も出来てないんですけど」

「まあ、それは軽い冗談なんだけど。あの子、そんな簡単に出来るような子じやなさそうだし。お高につつーか」

「別に、そんな感じの悪い言い方するような子じやないし」

「いや、どうだろ。ものすつごに人を拒否してる感じがするけどね。判らんよ! 気を使つてるけど。神経質つーか、なんといつか。めんどくさい」

「あんまり悪く言つなよ」

「悪く言つたよ! に聞こえるんだ。失礼だよな」

充分すぎるくらいに嫌な言い方してゐるじゃねえか。

「オレ、あの子自体は全然嫌いじゃないよ。ただ、怪しいだけ」

それはそれで、困るんですけど。ちくしょい、どうしてやひつ。

「ミハマに内緒にしてまする話なんだ、それ? 彼女がミハマのお氣に入りだから。よく、部屋に来てるらしいし?」

「それは別に、ミハマの自由だからさ。関係ないけど。そんなことより、あの子が似てるこの方が、問題かな」

誰に、と彼は特定して言ったわけではないのに、彼女の部屋から悪いことでもしたような顔して出てきた、サワダの姿を思い出していた。

「ウソつけ。関係ないだなんて」

「まあ、いろいろなことが、いろんな所と密接に絡み合ってるわけよ」「イズミが勝手に絡ませてんじやんよ。オレ、関係ないし」

あ、今の、ちょっとやばかったかも。オレはかなり冗談っぽく言ったのに、言つたはずなのに、イズミの耳は超怖かった。

「呼び捨てにすんなつて言つたろ？」

顔は大抵にこやかだけど、その顔をさらに大きく動かし、ヒツヒツと笑つて見せた。だけど、目が笑つてないんだって、お前は……。

「じゃあ、率直に言おうか。君、彼女が何者か、知ってるんじゃないの？」

「……何者つて？」

「それはオレが聞いてるんだよ。やつをも言つたらっ・怪しこいつでに、君もね」

「オレには何も出来ないつったの、イズミだし」

「そりなんだよね」

「どうちだよ。

まあ、ティアスのこと気に付いてるわけでは無いみたいだから、良いけど。

「アイハラはさ、何も出来ない、何も知らない。ミハマがそつぱつんだから、多分そりなんだよ」

運ばれてきたコーヒーに皿を落とし、何も入れてないせにスプーンでゅつくりかき混ぜ続けていた。

「まあ、オレもそつぱつよ。ただ、お前は隠し事はしてる。ミハマはそれを知ってるけど、それを口にしない」

皿を合わせない。その怒りにも似た、重い心の向く先はオレなんか、それとも彼の主なのか。

「程度によると思わないか？すべては

「言つてゐる」と……よべ……」

彼は顔を伏せたまま、上田遣いでオレをこらみつけた。

「はつあつ言つとくけど、オレはこの狭い世界を守るためにならなん
だつてある。やつと見つけた、オレが生きていけるこの場所を」
「別にオレは、邪魔しないつて。ほんとだつて」

茶化す氣にはなれなかつた。

切実で、何だかクレイジーな彼の瞳が、怖かつた。
重いよ。重すぎるよ！

「ミハマがお前をじうフオローしても、これがオレの仕事だから。
彼女にどんなに心を移していても、オレは疑つてからないと」
「何で疑う必要があるんだよ」

「……本氣で言つてゐる？」

何を知つてゐるんだ？ オレが彼女のことを見つけて、疑つてゐる？

「オレは、別に彼女に怪しい所なんてなこと思ひナビ

「それは、君にとつてね」

「何だよ、はつきり言えよ。そんな隠して喋らなくとも！」

「やだよ。めんどくわい」

ちくしょう。何だよ、こんな所に連れ出しちゃ、自分のことは喋ら
ないつてか？

「彼女を疑つてんだろ？ でも、ミハマに氣を使って、いつやつてこ
そこそ動いてる。動いてるのには、何か理由があるへせこ。たゞ疑つて
るなら疑つてるなりの、理由があるんだろ？」

「疑つてるのは、オレじゃない」

「めっちゃ疑つてるつーの！」

「オレには、確証もないし、あんなことはきっと彼女のことを知る」ともない。だけど、怪しことは確かだ

「イズミじやないのか？彼女を疑つてるのは誰？//ハマ・ショウジさん？それとも……」

イズミは顔色一つ変えずに、いつもの笑顔のまま、オレを見ていた。

「……サワダ？」

「残念だねえ。アイハラはさ、あの子のこと、気に入つてたんだろ？それを、元々いた所では、テツのそつくせんごとられちゃって」「話を変えんなよ。大体、お前が先に……」

重たい話を、まるで自らの思いを、オレに教えてくれるようなこと。

もしかして、これつて、オレのこと、多少なつとも信用していることか？

ミハマにも、サワダにも話して貰つてことを、オレに話してくれてるだけなのか？

「先に……何だよ？」

「いや、なんでもない」

イズミの表情は変わらない。なんか、あんなこと言つから、急に申し訳ない気分になつてきたじゃないか。

やつと見つけた、生きていける場所だなんて。

もしかして、イズミだけじゃなく、ほかの連中もそんなこと思つ

てるのかな？

だとしたら、オレとはあまりに意識が違うすぎるよ。

「何だよ、何へこんじゃつてんの？」

「別べへこんで無いつづーの！」

「ああ、そう。アイハラ君、気がちいちゃいからなあ

「小さくねえよ」

「ああ、違うね」

人の悪い笑顔に変わった。いや、まあ、普段も人が悪いんだけど、余計に。

彼はわざとらしく、タバコを手にとつて見せた。演じてるって感じがしますけど。

「世界が狭いんだ。悪かったよ」

少しだけ、認められたような気がしてたのに、何でこんな言い方されないといけないんだ。

「申し訳ありません、お客様。閉店のお時間になりますので……」

「この店の店長と思しき初老の男性に声をかけられ、オレは初めて窓の外を見た。空はまだ明るい。

「今、何時ですか」

そう言つた後で、白夜だつたことを思い出した。どうも、時間の感覚が狂うな……。

閉店時間からかなりたつていたのか、店内には誰もいなかつたし、店長はかなり不機嫌そうな顔でオレを睨み付けていた。口調が丁寧な分よけい怖い。まあイズミに比べたら、たいしたことは無いけど。彼は白いシャツの袖をまくつて、似合わないミリタリー調の「じつ」時計をチラッと確認した。それから、さりげなくオレの方に、時計を見せるかのように腕を傾けた。よく見たら、壁には時計がかかっていた。

「11時12分です」

「……いい時計ですね」

「ええ、新作なんですよ」

彼は満面の笑みをたたえていた。

オレは胸をなでおろし、即座に立ち上がった。

「すみません、帰ります」

急いで店の外に出て、少し離れた場所にある公園のベンチで座り込んだ。こんなに明るいのに、いや明るいからこそ人がいなかつた。結局、店長に声をかけられるまで、オレは喫茶店の片隅の席に座り込んだままだったのだ。何でここまで言われなければいけないのかと、正直、理不尽だつて思いでいっぱいのまま、時間だけが過ぎ去つていぐのを感じていた。

イズミは、なぜか迎えに来たサワダに連れられ、さつと城へ戻つていった。サワダがオレのことを気にかけてくれていたようだが、何を言つてくれたのかは覚えていない。恐らく、いつものことなんだろう。今までも、彼がこうやって敵を排除して来たに違いないことは容易に理解できた。

「なにやつてんだよ、お前?」「

「うわっ……て。何だ、二イジマかよ。脅かすな」

後ろから声をかけ、肩をたたいたのは、私服姿の二イジマだった。いつもならここで笑いながらしゃべるとうだねび。

「こんな思いつきつ人目につくところに座り込んでて、脅かすもくそもあるか。そういう時は、たいてい心に疾しこことがあるから驚くんだ」

「別に無い」

「ああ、うう。疾しことは無くとも、なんか抱えてるつて感じはするけど。まあ、オレこなびつでもいいことだし」「だから、何でそうこうつひととー。」

オレが怒鳴りつけたときには、二イジマはオレの隣に座っていた。

「うちのお姫さんにも、頼まれてんだよ。お前には優しくしてくれって。戦い方も、戦争すらも知らない子が、いきなりこんな状況にいたら大変だろ?」、可愛そだからって」

「何それ、ほんとに? ティアスがそう言ったのか?」

「あのなあ。こくらなんだって、上司が言つた言葉を違えて言つぼどバカじゃないぞ」

「バカとか言つてないつて」

なんか、時々子供みたいなこと言つよな、こいつ。結構、優秀な軍人のくせに。

それにしても、ティアスがオレの事をそんなに気遣つてくれてなんだ。オレの前ではあんなつれない態度を見せることがあったけど、二イジマにそう言つことを言つてることとは、たぶんそれが彼女の本音なんだろう。

「つーか、その二イジマの態度は、やさしさなの?」

「優しいだろ? だつて間違つてたか? オレの言つたこと?」

「間違つてない」

オレは簡単にイズミとの会話について二イジマに話すこととした。二イジマの口からオレの現状が伝わることで彼女に優しくしてもらいたいって言つ下心がなかつたと言えば、うそになる。

「なんというか、イズミ中佐は相当切れ者かも知れんな。これは要注意」

「切れ者? 何で?」の話で??.

「わかんないの? お前、たいしたこと言われたわけでもないのに、揺さぶられてるよ、それ」

「オレが、揺さぶられてる？」

「まあ、気付いてないなら良いんだけど。いや、たいした男かもね。しかも、ずっとそういうことをしてきたんだろうな」

「それはオレも思つた」

公園の時計の針だけが、オレに時間を教えてくれる。こんな夜遅くに城に帰つても入れてくれるのかだけが心配だつたけど、帰りたいわけじやなかつた。

「イズミは、ミハマと、その護衛部隊のためなら何でもするんだろうな、きっと。そんな気がする。オレは彼から見たら、外敵でしかないんだ」

「だろうな。姫も、それをひどく感じるつて言つてたし」

「でも、ミハマがティアスのこと気に入つてたんだから、多少は…」

「いや、だからこそ余計に、警戒してるんだろう。姫の周りは近づけない。護衛部隊に警戒されても仕方ない要素がそろつてしまつている。どうやら、サワダ議員も、敵として認識されてるみたいだし」「他はどうか知らないけど、ミハマとは相当仲が悪いかな」

そういうて、ニイジマにティアスが怪我をした時の、ミハマとサワダ父の様子を話したら爆笑されてしまった。

「ガキだな」

しかも、その一言で一蹴するか、お前は。確かにオレも同じことと思つたけど。

でも、少しだけ気が楽になる。ティアスのこともそうだけど、ニイジマもこうやって話をしていたら、何だかオレのいた時代の彼のようだ、安心できる。もしかしたら、彼は、彼らは、本当にオレの

」とを受け入れてくれるかもしれない。

「いつか必ずオレは元の時代に戻るけど、だけど、どこか廻り所が無くひや、正直つらこよ。」

「『イジマは、イズミみたいにいつも笑つてゐるようなやつじやないけど、今日は何だかにこやかだった。』

「うちのお姉さんさ、怪我して、ちょっと氣弱になつてゐるからね、悪いけど、フォローしてやつて。オレたちも気にしてゐるんだけど近づけないからね。お前には連絡係ばっかやらして悪ことは思つてゐるけど」

「いや、それは、それがティアスのためになるのなら、やむよ。怪我、かなり辛そうだつたし」

「だな。あんなところじや、おひおひ敵我も治せやしない。あんなに警戒されていや」

そつか。そうだよな。イズミは、ミハマが彼女に興味を持つてゐることで、余計に彼女に對して警戒心を抱いてゐる。何かあつたときには、彼女が裏切り者だとわかつたときに、傷つくのは他でもない、彼の一一番大事な主なんだから。

だとしたら、もしかして、あのときのサワダは?

『話?……話、ねえ……とくに向も?お前が氣にするよつな』とは

「サワダがティアスの部屋にいたのつて、彼女を疑つてたから、確認のため?」

「なんだそれ。サワダ中佐が姫の部屋について……一人きりで?」「うん。でも、ティアスもサワダも何も無いつて否定するから

オレに食つて掛かつたくせに、『ああ、そう』なんて氣の無い返

事をしながら一人で頷いていた。

02

しばし考へ込んでいた二イジマだつたが、突然、勢いよくオレのほうに振り向いたかと思つたら

「そう言えれば、お前、携帯持つてたよな？」
「……持つてるけど、通じないよ？」
「なんで？」
「いや、まあ、この時代に作られたやつではないからで無い？」
「そうか、そうだよな。そうか」

「イジマたちからすれば、オレと頻繁に簡単に連絡が取れたほうが楽なんだろうけど。

「てか、ティアスの携帯にかけねばいいんでない？」「いや、まあ、あの人、携帯壊してるわけよ」「そんなの、サワダのお父さんから渡してもうるえば？」「いや、まあ……」「何だよ、何で言葉を濁してんだよ」「いや、まあ、それとこれとは、また別つて言つか……」「べつ？」「いや、まあ、頻繁に電話とかしてられない状況なわけよ、あの人は」「オレだって、今日みたいにイズミに拉致られたりしますけど」「いや、まあ、とにかく、頼むわ

なんか、急に怪しくなってきたな……。もしかして、オレに、彼女との連絡を取ってほしいわけではないのかな?

「何が目的?」

あえて彼のまねをして、オレは真正面からにらみつけた。

「いや、別に?」

「オレがティアスと連絡を取る必要って、無くない?」

「いやいやいや。必要だよ?」

「そうか? だって、確かにニイジマたちが直接彼女を見て守ることは難しいかもしないけど、連絡を取るだけなら、別に電話ですればいいことだし」

「いや、まあ」

「…………つーか、その…………姫のこと、見といてほしいわけよ

「は? なんで?」

「判るだろ? あの負けん気の強いお姫さんが、素直に人の手なんか借りないってことくらい。口では『頼りにしてる』とか『助けて貰つてる』とか言つけどさ、実際のところ、一人で何でもしちゃうつて言つとか、勝手に動いちゃうわけよ」

「なんか、それ、わかるかも」

『ありがとね、ゴウト。引き受けてくれたんだ』

?

彼女はそう言つてオレに感謝するべせに、抜えるために、駆け寄つたオレの手を、やんわりと拒否をした。

「だろ? しかも、あんな大怪我しちゃつてさ、心配かけんなって話だよ。カナさんはぶち切れるし、コウタはおろおろするばかりで、オレがこうやって根回しするしかないわけよ」

何だ、怪しいかと思つたら……端に彼女を心配してつてことか。彼女との関係を円滑に進めるための根回しなわけね。それならそうと、最初から言えればいいのに。もしかして、照れくさかつたんだるうか。

「もしや、二イジマつて、ティアスのこと……」
「いや、ありえない、絶対無理。大体オレ、彼女いるし!」
「うへー初耳」
「そりゃそうだ、言つてないし」

あ、そっか。あっちの二イジマではないんだつた。聞いたこと無くて当たり前か。

新島つて、落ち着いてる割に、なんか浮いた噂とか聞かなかつたんだよな。

「誰? 美人? オレ知つてる人?」
「美人だよ。会つただろ?」
「会つた?? ティアスじゃなくてつて……もしかして、サエキ大尉? あの人いくつ?」
「まだ28だよ。あの人、それ気にしてんだから、あんまり言つなよ?」

めっちゃ美人だし。こっちの時代なら、年は違つても女優だよ! すゞくねえ?

「うーん、ティアスとサエキ大尉なら、結構考えてしまつかも。美
人だしなあ」

「タイプぜんぜん違うし。綺麗なら何でも良いのかお前は
「間口が広いって言ってくれ。綺麗なお姉さんも、かわいい女の子
も大好きだ。選べって言われたら、難しいだろ？」

「まあな。でも、姫は、性格があれだぞ。面倒だぞ。悪いことは言
わないからやめとけって。ああ見えて根暗だし」

彼はオレを茶化しただけだと思つ。

でも、オレはその言葉に答えられず、黙ってしまった。

「もしや、本気だつた？見掛けはかわいいけど、あれでも大佐殿だ
ぞ？」

「まさか。だつて、別人だし」

「ああ、携帯に残してあつた『姫』ね。なに、そつちはまともなの
？」

「まともつて……。お姫様捕まえて、なんて言い草だよ。まあ、ま
ともつて言うか、優しかったよ。あんな魔物相手に立ち回るような
子じゃないし。あんなにかわいくて、優しいなんて、最高じゃない
？」

「だけど。

だけど、どうしても、あの陰のある表情が、オレの心に引っかかる。

彼女と共有した秘密が、彼女を支配するはずの秘密が、オレを支
配する。

オレの知ってるティアスでは無くて、いつのティアスのことが
かりを思い出す。

「あれに似てる女が、優しいとは思えんけど……」

悪態をついていたはずの「イジマ」は、いつの間にか消えていた。
どうして?

辺りを見渡すが、見当たらぬ。何で急に……。

「アイハラくん。どこに行つたかと思つてた。こんなところに。一人?」

声をかけてくれたのはミナミさんだった。

そつか。そういうことか。彼女が来たから、姿を見られちゃまず
いと思つて、どこかへ隠れたんだ。言えよ、びっくりしただろ?

「一人です。もしかして、探しに来てくれたんですか?」

「ああ。殿下と……テツが心配していたから。シンがあいてきたと
言つて」

「で、ミナミさんが迎えに来てくれたんですか? 女の人一人で、危
ないですよ? イズミがミナミさんを一人で外出をせるとは考えにく
いんですけど」

いや、軍人だから、そういう問題じやないんだろ? けど。他の男
を捜しに、つて言つたら、絶対止めると想つ。

「シンには内緒で來た。テツが行くつて言つてたんだけど、彼は怪
我をしてるから。帰るつか、この時間は、許可証がないと門が開か
ないから」

ミナミさんの氣の使い方に、ティアスを思つ「イジマの」とを思
い出してしまつた。

「オレ、迷惑かけてました?」

白夜の中の公園を、ミナミさんはオレの先に立つて歩く。見晴らしのいい安全な道を選んでいるようで、城に向かうには、少しだけ遠回りだった。

彼女の腰に下がるレイピアを見てしまったオレは、彼女の後を恐る恐るついていく。軍人なのだから当たり前だし、あの城の中では慣れただけど、やっぱりこの物々しい格好とこの平和そうに見える町並みには違和感を感じてしまう。

「いや、君のせいじゃない。シンが悪いんだ。大方、君に酷いことでも言つたんだろう。どうしても、人に対する優しく出来ないんだ、あの子は。だから、その……おこがましい言い方かもしれないけど……」

「彼女が口ごもる。固くて、不器用で、まじめで、ともすればきつい印象を与えるかねない人だけど、彼女はまっすぐで優しい。たぶん、ここにいる誰よりも」

「大丈夫です。気にしてませんから。慣れました」

「申し訳ない。そういうてくれると、助かるよ。でも、あの子も、君にはずいぶんなれてきたというか……以前ほど、頭ごなしに疑つてかかるてはいないと思うよ」

「はい。オレも、そう思います。なんか、時々勘違いしそうになるくらい」

「勘違い？」

「そう。オレのいた時代の、泉真と。多分あいつ、サドつ氣あるんですね。それはこっちもあっちも変わらないって言つか。サワダに対して、異常なほど氣を使つてゐること以外は、まあ、概ねあんな感じだつたし」

彼女が反応したのはサワダの名前と、イズミが彼に氣を使つてゐつてどこにだらう。黙つてしまつた。

「いや、その。ちょっと違うかな。こっちのイズミは、たくさんの敵と、護衛部隊のみの味方つて区切りを持つてゐるけど、あっちの泉はごく少ない味方と、中間と、敵つて感じだから。まだ遊びがあるかな。時代もあるかもしれないけど」

「そうだね。シンにはそういう意味での遊びが無い」

彼女自身も氣づいたのか、無理やりいつものあの硬い笑顔を浮かべ、イズミの話をしてくれた。

「遊びが無いから、人にきつくあたることしか出来ない。昔から、そなんだ」

「仕方が無い？」

「いや、そこまでは言わないよ。ただ、私のせいもあるから、私がらきつとは言えない。殿下が嗜めて下さるから、最近はあれでも少しマシになってきたほうだ」

「ミハマが嗜めて……」

「フ！怖すぎるつて！あのキラキラ王子様、顔と発言と物腰に似合わず、締めるところはキッチリ締めるんだよな。やっぱ、あの王子様にはなんかあるよな。あのイズミが、奢められる、だつて。でも、イズミがきつこのつて、何でミナミさんのせい？」

「あの、イズミとナマをもつて……付き合ってたわけではないよね？」

だつて、この人はサワダのことが好きなのに。どうして彼女はこんなことを言うのだろう。イズミは、この人しか目に入らないけど。

「まさか。弟……いや、出来の悪い息子……。そんな感じかな？」「ずいぶん色氣の無い関係だね……」

ちょっとだけ、イズミが氣の毒になつた。

「だけど、あの子が望むなら、仕方が無いのだろう。私は、あの子の人生に対しても責任があるから」

「責任……」

彼女の言葉は重い。多分、オレだけではなく、イズミ自身にひとつも。どんな責任かは知らないけれど、彼女のその言葉が意味するものは、おそらくイズミが求めているものではないはずだから。イズミが、あんなにもミナミさんに執着してゐるくせに、距離を縮めているくせに、動かない理由が、少しだけわかつた気がする。好奇心だつて判つてた。この人たちとは、それを排除して生きてきてるのもわかつてた。でも、聞かずにはいられなかつた。

「責任つて？」

彼女は、まじまじとオレの顔を見た。まつすぐ城に向かっていた足を止めて。そして、初めて、「仕方ないな」といつた、諦めにも似た笑顔を見せた。

オレが知る彼女の笑顔で、初めてぎこちなさを感じ無かつた。

「あの子は、私のせいで、自分のために生きられなかつた。私のために生きてくれていた。今までも、そしてこれからもそうだらう。あの子は、いつも自分のためだといって、自分以外の誰かのために生きる。その誰かを、彼が選べばよかつたのだけど、彼は自身の意思で選ぶことの無いまま、私のために生きることになつた。だから、私は、彼の望みに出来る限りこたえる。それが、私が唯一彼に出来る報いだ」

「この人は、どうして泣きそうな顔で、こんなに綺麗に微笑むんだろ？。そんなの、ずるい。

「でも、誰かのために生きるのって、それって、自分がそうしたいからそうやって生きるんだと思うけど。イズミは、別にミナミさんのせいでの、なんて思つてないと思つけど。あの男が、そんなことをするとは思えないし」

「そうだね。殿下も、そうおっしゃつていた。彼が執着してるのは、彼が戦う理由は、彼と、彼の大好きな誰かとのつながりのためなんだ。それを守るために、その世界のためなら、彼は何でもするし、してきたのだと。だから、彼の行為も、彼の思いも、彼以外の何者にも縛られてはいけない。だから、気にする必要は無いと」

穏やかな表情で、ミハマを、イズミを思つ。彼女を取り巻く、ぴりぴりした空気が、緩んだように感じた。ミハマの言葉が、彼女を動かしたのが、その場にいなかつたオレにも、よく理解できた。

「だったら、私にも、彼とのつながりを大事にする意思があるし、彼の行為に報いようという自由がある。責任もあるし、その責任から逃れる言葉かもしれないけど

彼女はそれだけはつきり言つと、再び、城に振り返り歩き出した。

04

黙つてオレの前を歩く彼女との沈黙が重くて、判つていながらどうでもいいことを聞いていた。

「そういうえばオレ、夜、城の外に出たの始めてかも。あんまり、外に出してもられないし」

「城の者は、ほとんど外には出ないよ？街の人も、このくらいの時間だと、殆どみんな外には出ない。君のいた時代は、こんな時間に外に出ていたの？」

「うん。て言うか……こんなに明るいと、夜って感じがしない。確かに、昼とか、朝に比べたら、ずいぶん空の色は違うけど、太陽が見えないのでおかしなくらいには明るいし。あ、でも、北欧にいた友達の話では……」

ティアスが、一時期ドイツにいたって話を聞いたことがある。太陽は完全に沈むけど、真っ暗にならない時期があるって言うつていた。多分、こんな感じなんだろう。夏だから、よく深夜に遊びに出来かけていたと言っていた。

もう、時代が違う話とはいえ、ティアスの名前は出せないけれど。

「ホクオウ？」

「えつと……そっか。ほら、世界地図の西のほうに大陸が少し残つてたろ？あの辺のこと。オレのいた時代には、あの辺にでっかい大陸があつたの。で、こういう白夜みたいなのがてその大陸のすつごい北の方とか、南にも大陸があつたんだけど、そのすつごい南の方であつた現象なんだって。だから、同じ日本でも、オレは白夜つて初めてなんだよね」

「でも、深夜に出歩いたら危ない。この季節は明るいとはいって、深夜には魔物が出る」

「……あつ」

そうだ。深夜になると魔物が出やすくなるって言つてた。だから、店も、この時間に閉まるんだ。オレがいた店以外、ほとんど閉まつてたし、店長が長居してたオレに嫌な顔した理由がちょっとわかつた気がする。

「……あれ、この季節つて……？？いま、冬じゃないの？」

「ずいぶん寒いし、オレが元いた時代では12月だったから。

「白夜は、夏の間だけだよ？」

「夏でこんなに寒いの！？冬とかどうすんだよ！陽も落ちるのに！？」

みんな長袖だし、コート着てるのに…

「そうか。うーん……寒いけど、まあ、何とかしてるよ。都市自体に暖房システムが働くから、今より少し寒いと感じるくらいですぐせるよ」

騙された気分でいっぱいです……。冬だと思つてた。そりだよな。白夜つて、夏の現象だよな。オレ、大丈夫かな。この鍛えてる人たちと一緒にされても困るんですけど。でも、よくよく考えたらそうなるのか。地殻変動で緯度まで変わつてしまつて、オレの知つてる世界とは随分変わつてしまつているのだから。

何が辛いって、ほほ、常に冬……？

「城の中は、貴族も多いし、かなり快適に出来てると思ひよ、君にとつても。だから、あまり出歩かないほうがいい。今日は、シンのせいだつたけど」

「そうですね」

確かに、あんまり厳しさは感じなかつた。ミナミさんの言葉に、小さな棘を感じたのは、たぶん気のせいだ。

「でも、地殻変動があつたからつて、こんなに気候まで変わつていのつか？同じ国とは思えないよ。町並みが似てるだけに、不思議な感じがする」

「そう。ホントに似てるんだ。地殻変動以前の町並みを残そつと、この国は努力してきたりしいから」

「そりなんだ。そういうば、シユウジさんがそんなこと言つてた」

「そうだね。の方は、とても歴史にお詳しい。君が、の方の知識を証明してくれることは、誰にも言えなかつたとしても、嬉しいと思うよ。この町が変わっていく前で、本当によかつた」「変わる？」

彼女は黙つて頷いた。

「聞いたろ？中王の政策により、古い街並みを残してはいけないん

だ。少しずつ変わつていつてる。君がテシと会つた町は、中心部から外れているから、ほほ昔のままだけど、この辺りは中王の監査もに入る」

声を潜める。誰が聞いてるか判らないつて言つのは、皆に徹底されていることなのかも知れない。

「監査つて？」

「ああ、定期的に中王軍の者が各国に入るんだ。町並みのチェックばかりではないけれど。年に4回。季節の変わり目にね。次は3月1日だから、あと一週間だ」

「ふうん。抜き打ちとかじゃないんだ。それつて、いつ、誰が来るとか、どこを見るとかってことも、事前に判つてるもんなの？」

「ああ、あらかじめ、統括本部から通達があるよ。次回は統括本部のサエキ大尉と西二ホン管理部のカツラ少尉相当官だったかな」「……中佐、とか大佐、とかは来ないんだね」

「年に一回は来るよ。このじきはたまたまだよ。オワリは大国だから、監査の回数も多いし」

「じゃあ、他のもつと小さな国は、回数自体少ないってこと？」

「状況によるや」

そういうで、彼女は少しだけ遠くを見つめた。

「誰が、じつやつて監査してるなんて、誰も知らないんだから、ホントはね」

彼女の言葉の重たさが、痛いほどよくわかつた。

思わず立ち止まって、オレは彼女を見つめてしまった。彼女もまた、オレを見ていた。その表情が、だんだん険しくなつてきた。

「……ミナミさん? オレ、また何か悪いこと……」

「動かないで、ゆっくり、私のそばに」

腰に下がるレイピアに手をかけていた。ゆっくりと抜いたその剣先は、可憐といえば聞こえは良かつたが、弱々しかつた。

「空?」

「ああ」

彼女と同時に空を見上げる。明るかつたはずなのに、いつの間にか暗くなっていた。陽が沈んだわけではなかつた。地平線は先ほどと同じく、畠と夕方の中間のよつな色だつた。空の一点から、墨が染みこむように黒い色が広がつていた。

「まだ、やつは姿を見せでない」

彼女はやつ言つたけれど、あの黒い染みからは、今にも何か出できそうな、何か禍々しい生き物の気配を感じた。

「その間に一緒に走つて出口に向かおつ。やつが現れたら、私が君と併走しながら、引き止める。その隙に君は一人で公園を出て、城へ入るんだ。これが通行許可証だ」

彼女の視線の先には、もう城が見えていた。でも、そう言われても。

「!!……!!ナミさんは? だつて、空から来る魔物つて、サワダだつて手にゅうつしたのに」

声が上ずつてしまつたけど、ここで一人で逃げたら男じゃないで

ショウ？！

「おそれらぐ、大丈夫だ。倒せるかは判らないけれど。ただ、君を守りきれる保障はない」

冷静に分析されましても！

その言葉が、オレを逃がすための詭弁なのか、ただの分析なのかはわからなかつたけれど、要するに、とにかく逃げた方が良いつてことね？まだ、敵の姿は見えないけど。

「走れ！」

彼女の合図で、走り出す。後ろから獣の雄たけびのようなものが聞こえたが、振り返ることは出来なかつた。

「走つて！」

いや、もう、走つてますけど！てか、それつて……。

……見るんじやなかつた。彼女の声に思わず後ろを振り向いてしまつたら、やつぱりいた。

なんて言つたらいいんだろ？。動物的ではない。まるで、黒い雲の塊が、意思を持つて動いているというか。煙よりはずっと濃く、はつきりと存在感を放ち、後ろから追つてくる。

てか、何でそもそも追いかけて来るんだよー…?

気配を感じるだなんて、テレビの中の世界だけだと思つたけど、はつきりと判る。ダンプカーが迫つてくるよつた、そんなイメージかもしけない。ただ、何かヤバイ感じだけがどんどん強くなる。

「うわー。」

こきなり、ミナミさんが無理やり公園の出口の方へオレの背中を押した。振り向くと、彼女はあの細い剣を構え、雲の塊と対峙していた。

「ミナミさん…。」

「いいから、早く…。」

「でも…。」

置いてくるわけ、ないだろ…? 確かに怖いけど、でも、女のヒトを一人で戦わせて、オレ一人逃げただなんて、ありえないでしょ?…

「ミナミさん…。」

オレが彼女に近付こうと一歩踏み出したその時、彼女は雲の塊に吹っ飛ばされ、オレの足下に滑り落ちた。

「早く…。」

背中を痛めたのか、ぎりぎりの動きで必死に起きあがつていた。

「でも…。」

明らかにあの魔物に対して、抵抗する術がないんじゃないのか？
だって、イズミやサワダが魔物との戦闘で、特別視されていたのつ
て、要するに他の人では何とも出来ないってことだろ？

「一緒に逃げよう！無理！おいてけない！」

ミナミさんは黙つて首を振る。

「私でも、何とか出来る。でも、君を守りきれないと言つたはずだ」

落ち着いた口調で、でも、率直すぎて心に突き刺さるような台詞
を彼女は吐いた。

要するに、オレは邪魔つてこと？足手まといになるつてこと？

彼女は、黙つてしまつたオレを無視して、雲の塊のような魔物に
向かつていく。

細い剣が、光を帯びる。剣よりも、むしろその光が雲を切り裂い
ているように見えた。光の中に、暗雲が溶けていく。そのたびに、
獣のような雄叫びをあげ、魔物が小さくなつていく。

彼女もまた、あの護衛部隊の一人なのだと。そう思わせるだけの
実力だった。長い髪を振り乱しながら、暗雲が動物の手のような形
を取つて彼女に向かつてくるのをぎりぎりの所で避け、少しづつ切
り裂いていく。

切り裂いた雲が飛び散り、彼女の体をかすめ、オレの傍まで飛ん
でくる。

「何をしてる。早く逃げろ！」

飛び散つた雲を追つて、彼女がオレの元へ駆けよつてきたが、動
けなかつた。

「どうしたー？」

「……いや……その」

揃つてオレの足下を見つめた。

雲のようだつた魔物が、人の手の形を取つて地面から生えていた。オレの足に絡みついていた。気付かないうちにオレの体にまとわりついてきた。

「だから……」

言つたのに。

彼女はそう言つたのだろう。でも、オレの顔を見て、やめた。黙つてオレの足下に絡みつく、人の手の形をした魔物を切り裂いていく。

オレは本当に、ただの足手まといだ。
こんな状況なのに、心が重くて、動くのが辛い。

彼女の体を、雲が人の手の形を取つてかすめ、傷つける。でも、
彼女は剣を振るう手を止めない。滲む血の痛みを意図的に無視しながら、オレを助けるために剣を振るう。
オレは何も出来やしない。

どうしたらいい？

「…………ミナミさん……」

オレを置いて、逃げて。本当はそう言つたのに。彼女はそう言つてくれるのに。オレにはどうして言えないんだらう。

黒い雲はいつの間にか、ホールタールで象られたマネキンのような姿をとつて、ぎこちない動きでミナミさんの背中に近付いていた。オレの声と、震える指先が指示するモノに、彼女は気付いて振り向いた。

「……っ！」

魔物の黒い右手が、ミナミさんを吹っ飛ばした。それと同時にオレの足に絡んでいた黒い手が、足に食い込んだ。まるで杭が刺さったような傷みが広がる。

「え？！うわ！！」

しかも、オレの血だらけの足から杭が抜けたような感覚があつたと思つた途端、一瞬黒い雲がオレの体を包むように広がり、再び手の形を取つて実体化した。ただし、今度はオレの体を潰せるほど大きな手に。

押しつぶされたまま、鼻から黒い雲が入つてくるのが微かに見えた。アンモニアに似た、鼻をつんざくような匂いがする。

ヤバイ……オレ、死ぬのかな……。息が……苦しい。

ヤバイ……オレ、死ぬのかな……。息が……苦しい。

「……あれ？」

体が軽くなつた。なんで？

体に何か不愉快なモノが入つてきたような感覚が残つてて、気分は悪いけど。足も痛いし。

「ティアス！」

寝ころんだままのオレの頭の上に立っていたのは、まだケガをして寝ていたはずのティアスだった。手にはジャックナイフ。もしかして、こんなモノで魔物を？オレを助けてくれた？

「大丈夫？」

「とりあえず、生きてるけど……あの、ティアス」

気が遠くなりそうだ。だけど、この状況で、ティアスを田の前にして、これ以上かつこ悪いところは見せられない。

「サワダ中佐、ミナミ中佐は？」

え、サワダ？

「ミナミさんの傷が酷いからオレが連れてく。動けそこないし。アイハラは……動けそうだな」

「この足を見て、それを言つつか？」

「この血…すげー出でんのに…」

「そんだけ騒げるくせに、何言つてやがる」

「ユウト、落ち着いて。血はたくさん出でるからケガが酷そうに見えるけど、実際はそんなに深くないから。大丈夫よ。歩ける？」

サワダは横たわるミナミさんを気遣い、彼女の横に跪く。意識を失っていたらしい彼女は、サワダの存在に気付いて、大きく身を震わせた。

「サラさん、平氣？」

「テツ……？ どうしてここに？」

「いや、アイハラもちつとも帰つてこないし、サラさんも出かけたつて言つから、こんなこつたらうと思つて。大方、シンがこいつを置いてきちゃつたから、責任感じて迎えに来てたんだろ？ 心配したよ」

「心配？ 私を？」

彼女を抱きかかえるようにして、丁寧に起こすサワダの行為に、ミナミさんの表情は急激に変わる。女の子そのものというか、少女マンガみたいだつた。こんなに判りやすく、人の顔つて変わるんだなつて思うくらい。

彼との距離を、彼の行為を、彼の言葉を、ミナミさんが異常なほど意識してゐるのが、離れた場所から見ているオレにもはつきりと伝わる。

……ティアスは……どう思つてるんだら？

いや、関係ないか。こつちのティアスは、サワダのことなんて何とも思つてないんだから。ただ、どうして一緒にいたのか気になるけど。

「傷が酷いから、動かないでいて。……聞いてる？ サラさん？」

「あ……ひ、うん」

彼女はなすがまま、サワダに抱きかかえられる。子供のように真っ赤になつて、顔を伏せていたが、残念ながら彼には気にしてはなかつた。

「毒を持つてるタイプではないみたいだから、大丈夫だとは思つけど」

「テツ、彼女は……？どうして一緒に？」

「いま気づいたのか、ミナミさんはティアスの存在に怪訝そうな顔をする。」

彼女は彼女で、相当複雑だらう。怪我をして寝てるはずの客人が、サワダと一緒に自分を助けに来たなんて。

「別に、一緒に来たくて来たわけじゃない。それくらい判ってるだろ？」

「やうやくひとを言ひてるわけではない。状況を聞いてるんだ」

真っ赤になつて俯いてるだけかと思つたら、ミナミさんはまつすぐ彼を向き、彼を問い合わせ正す。ただ、またすぐに俯いてしまつたけれど。

「空から来る魔物に対する抵抗力が、この国にはまだ無いようですが、けど？」

「……いま、そんな話はしていないし、この国にはテツ……サワダ中佐も、イズミ中佐もいますから」

「私の国でも、そのような魔物が出て、私はそのための抵抗力を持つために動いています。怪我をしてるからと書いて、ここに寝てる時間はありませんから」

彼女は、サワダの肩越しに、じつとティアスを見つめていた。普段冷静なミナミさんからぬ表情だと思つた。

「外に出でていた事に関しては、」迷惑をおかけしています。でも、この件に関しましてはサワダ議員も了承済みですし。サワダ中佐と

は、そこでたまたま会つただけです。私は、彼には疑われているようですね」

微笑を浮かべながら、「まかすよ」ハナミセんに説明をする。そして助けを求めるように、サワダに話を振った。

少なくとも、オレにはそう見えた。

「よく判つてるみたいだな。良いから行こう、サラさん。傷が酷いんだから。オレがシンに怒られるよ」

「私は……その」

「大丈夫じゃないって。たまにはオレの言つことも聞きなよ」

惚れた弱みというやつか。彼女は、彼に何も言えない。この一人が例えば男女の関係ならば、明らかに男のほうは、何かを「まかしている態度なのに。

それに、何か疑わしいと思つたから、ハナミさんも突っ込んだんじゃないのか？ 何も無かつたら、何も怪しくなかつたら、納得するつて。

「コウト、平氣よね？」

「え？ うん……」

ホントは、かなり痛いんですけど。

「冷静だな、案外。もつと心配するかと思つた」

嫌味たっぷりの表情で、彼はティアスに笑いかけた。彼らの間に流れる空気は以前と同様に、緊張感のあるものだつたけれど。だけど、明らかに何かが変わっていた。

「あなたこそ」

彼女は同じよひに含んだ笑顔でそう言って、彼女はオレの前を歩く。

それを、オレはおそらくかなり物欲しげな顔で見つめていたのだろう。

「きついなら、手を貸すけど？」

そう言ってくれたサワダの表情が、なんだか怖かった。そこに、オレは裏を感じてしまう。

「いや、大丈夫だつて。ぜんぜん平氣！」

「そりゃ、ならいいけど」

彼女と彼は微妙な距離を保つたまま、城に向かって歩き始めた。

07

サワダはミナミさんを抱きかかえたまま、城の門番に許可証を見せ、城に入つていった。

「……あれ？ ティアスは？」

「さあ。許可証を持つてるようには見えなかつたけどな。どこに消えたんだか。怪しいことこの上ないな」

そう、彼は言つくなつて、何だか嬉しそうに見えた。

オレの思い込みのような気も、ほんの少しだけしてたけど、どんどん怪しさが増すんですけど。彼らの間に流れる空気を、疑わざるを得ない。いや、仮にオレの知ってる一人のようなら、そんな色氣のある関係ではないにしても、彼らは何か秘密を共有しているような、そんな感じがある。いや、秘密を握られているところつか。

「怪しこうて言ひへせこ、なんか、楽しそうでない？」

門を通り抜け、ライトアップされた中庭を歩き、正面玄関へ向かうサワダの横に並びながら

「オレが？別に、楽しくはないさ」

やつぱり、サワダは楽しそうに見える。何より、彼に抱えられるミナミさんが、不安そうに彼を見ていたのだから。

「お前じれ、いつたい何を疑つてんの？」「何つて……」

オレの様子がおかしかったのか、彼は吹き出し、誤魔化すよつて

「お前が言つたんだろ？『別の人間だ』って」

と言つて、笑顔を見せた。ただ、その笑顔はとても、オレの知る沢田の父親に似ていたけれど。こっちのサワダ父は、まだよく知らないけれど。

以前、泉が沢田父を『存在 자체がエロイ』なんつって、褒めてんだか褒めてないんだか、あまりにもそのままかつ直接的過ぎる、際どい言い方で表現していたけれど、その言葉がぴったりだと思った。男から見たら、微妙に不愉快な存在だ。

オレの知つてゐる沢田にもその片鱗はあつたけど、こんなにすこ
くはなかつたかな……。まあ、別の人間なんですけど？！

「お前こそ、何か知つてゐんぢやないの？あの女について」

サワダはそう言つたとき、オレを見ずくに田の前にある正面玄関
の扉を見つめていたけれど、彼の肩越しに、ミナミさんがオレをじ
つと見ていた。まるで様子を伺つよう。

「何かつて……？オレが知つてゐるティアスは、こっちの女ぢやない
「そう」

含んだ言い方だな。オレの答えは完璧だつたと思つぞ？おどお
どしてなかつたと思うし。

どういうつもりか知らないけれど、彼はそれ以後、黙つたまま、
ホテルそのままの自動扉を抜けた。

エントランスはいかにもホテルっぽいつくりで、本当に昔のもの
を再現してゐるんだと感じたが、奥にあるエレベータールームにつな
がる部屋から先は、一見木製の扉をかたどつた重い鉄の扉が聳え立
つていた。ここでいつたん客を受け付け、どこへ招き入れるか振り
分けているのだろう。見た目がホテルなだけで、中は実はかなりし
っかり管理されてゐるのかもしね。

500年もたつてゐるはずなのに、何でここまでこだわるのか。
オレが過去に執着するのとは違つ。怨念にも似たものを感じていた。

それは、なんだか、オレがこの時代のサワダ達全員に感じる、
微かな違和感にも似ていた。

「おつと」

Hントラランス側からは受付で操作しないと開かないはずの扉が、自動で開いた。それに驚いて、ミナミさんを抱えたままのサワダが扉から距離をとった。

「遅いしーつーか、何でサラ、怪我してんの？！」

「おまえが迎えに行かないからだらうが。オレのせいじゃない。それより、医務室！」

「……テツちゃん、オレを怒つたな？」

不満そうな顔で、怒ったサワダではなく、オレを睨み付けながら、扉の横に設置されていた内線を取り、連絡を始めた。

確かに、オレが帰つてこなかつたのが悪かつたかもしだけど、それは責任転嫁だらう？ 大体、元は外に連れ出しておきながら、放置したお前が悪いんだし。

……とは思うものの、口には出せない。やっぱ、まだ怖い。でも、『怒つたな』って。子供か、じつ？ 確かに子供っぽいところは多々あるけど。でも、それもわざわざ感じもするしな。これも、イズミ田への『気遣い』つてやつか？！

「本部の医務室が空いてるつて。珍しく誰も使ってないみたいだ。担架出すつて言つてくれてるけど、テツちゃんがそのまま抱えてつた方が早いよね？」

受話器を戻し、歩き出すイズミ。それにサワダもついていく。

「お前が抱えていけばいい」

「テツちゃん、悪いけどそのまままで。あまり動かしたくない。それより急いで」

ため息をつくサワダに、照れるミナミさん。すれ違はしても、

サワダもイズミも、お互に妙に気を使いあっていて、ちょっとだけ心が和む。イズミは、彼女が好きなくせに、彼女がサワダを好きなことを知っているのだろう、あの過敏な男が気づかないわけがないし、好きな相手にだけはとことんまでに気を使う男だ。

でもそれが、自分から彼女が離れていつてしまう結果になつても、それでいいと本気で彼は思つているのだろうか？

サワダは……案の定、鈍かつたな。イズミに気を使つたつもりだつたんだろう。ぶつきらぼうで不器用だ。それが妙に、オレの知つてゐる沢田を思い起させる。あんなに含んだ言い方が出来るくせに、ずるいよな。

「これが、オレが彼らに感じてる違和感なのかな？」

「アイハラくんは？」

黙つてついてくるオレを氣にしてくれたのは、ミナミさんだつた。

「自分の怪我が酷いときに、あんな迷惑なお子様のこと気にしなくていいって。てか、アイハラ、怪我してんの？」

畜生、いつものイズミに戻つたな。このやう。わざわざ後ろからこつそりついてくるオレのそばに寄つて嫌味な顔で笑つていた。じいつ、へらへらしやがつて、笑つてればい冷たいこと言つてもいいと思つてやがるな、たちの悪い。

「してみつづーの一見ろ！この大量の血を！」

「たいしたことないつて、こんな。大げさな」

『血はたくさん出てるからケガが酷そうに見えるけど、実際はそん

なに深くないから』

彼女のあのセリフは、パニクつてるオレを落ち着かせるためのものだと思つてた。

「その程度の判別も出来ないの？」

「出来るか！オレのこと、何も出来ないってつたの、イズミ！じょんよ！」

「敬称つける！まあ、血口分析は出来てるよひで、何よつ？」

またしても嫌味ぽく笑うナビ、オレはいま正直、イズミなんてどりでもよかつた。

「シン！何も判らないと判つているなら、もう少し考えろ。アイハラくんに当り散らすんじゃない」

まつたくだ。やっぱ、ミナミさんは優しい。それに引き換え、イズミは冷たい。でも、彼の言つてることも、ティアスと何も変わらない。言い方だけだ。

「だつて、こいつ、ぜんぜん平氣でしょ？大体、歩いてんだもん。こんなん怪我のうちに入んないつて。甘えてんの」

『コウト、平氣よね？』

『冷静だな、案外』

でもティアスは……彼女だけは、オレの知つてゐるあの子と変わらず、優しいはずだ。

『そういう話をしてるわけじゃない。もう少し優しくできないのか

！」

それがたとえ、別の人間だったとしても。彼女だけは。

08

それがサワダの気遣いなのか、オレにはわからなかつたけれど。彼はミナミさんを医務室まで連れて行つた後、医務室の先生に状況報告をして、彼女に精一杯優しくしておきながら

「オレ、ちょっとハマに報告してくるわ。ミナミさんのこと、頼む」

とだけ残して、彼女の手当てを手伝つイズミが制止も聞かず、医務室を出て行つてしまつた。

彼女は、彼にいて欲しいんだと思つけど、そういうところの判らない男だな、ほんとに。

「待たせてしまつて申し訳ない。災難でしたね。客人のお名前は何と言いましたか？」

ミナミさんの手当てを終え、彼女をベッドに寝かせた後、座つて待つっていたオレに先生が話しかけてくれた。イズミはもちろん、オレの方など振り向きもせず、ミナミさんの横につきつきりだ。

浅黒い顔にたっぷりの白いひげを蓄えた、初老の男性だった。白衣を着ているからよく判らないけれど、かなりいい体格をしている。

「アイハラです。すみません、こんな夜中に」「はは。良いですよ。この季節は何時間でも残業してられますから」

えつと……なんか、そういうジョーク的なものは、感覚が違いますぎてよく判らないんですけど。

「それだけ、人に気が使えば大丈夫だ。怪我をしたのは足だけですか？サワダ中佐のお話では体内に異物として魔物が侵入してきたとか？」

「え？はい。でも、もう別に。ちょっと、違和感が残ってるくらいで」

サワダのやつ、あの状況でよく見てるよな。でも、見てたくせに、オレを助けに来たのはティアスだった。それって……。

「毒のない魔物だと中佐はおっしゃっていたけれど、ちょっと見せてもらいます？私は魔物の影響に関しては専門ではないから、何とも言えませんけど……」

「あの……毒がある魔物の場合は？」

「え？そりゃあ、ものにもよるけど、なんともしようがないよ。今の医療じゃ、どうしようもないから」

「この人、ほんとに医者？？笑い飛ばしちゃったよ。

「そんな当たり前のこと聞いて、どうしようつと？そんなに心配しなくとも、中佐がきちんと状況説明をしていくくださったから、対処できるわ。の方は若いが魔物の対策に関してはスペシャリストだから」「だから」

「どうか。オレが何も知らないってこと、知らないわけだもんな。

余計なこと言ってしまった。

「あ、でも、それなら、イズミ中佐も……」

「サワダ中佐のおっしゃることですからね」

なんか、引っかかるな。嫌な言い方。

喋りながらも、喉の奥を見たり、目の中をのぞいたり、足の手当をしたり、と手際は良かつた。良かつたけど、なんか、ながら作業つてどうなんだよ？！

「足の傷だけのようですね。傷も深くないので、1週間もあれば完治しますよ。歩くのにも支障はないようです。それから、体内に異常はないようです。無理やり侵入されたから違和感は残っているでしょうが、痕はない。ただ、新しいタイプの魔物のようなので、しばらく様子を見てください」

「ありがとうございます」

と言つては見たものの、なんか、納得いかないな。これで良いのか？

不満を思わず顔に出していたり、奥のベッドから、イズミがオレを手招きしていた。

「ちょっと、彼女の様子を見に行つても良いですか？」

「どうぞ」

ひげ面の軍医は常に笑顔の氣もくなおじさん、と言つた感じだったが、オレはどちらにも好きになれなかつた。

「何だよ。//ナ//せんせ……？」

「大丈夫だよ。せつともうすぐ殿下がいらっしゃるから

ベッドで横になりながら彼女はかすれた声でそう言った。いつもの硬い笑顔を見せながら。

反面、イズミはむつとした顔で、軍医を睨んでいた。

「余計なこと、喋るなよ？」

「え？……あの人に？」

椅子に座つたまま、声を潜めて話すイズミにつられ、オレも彼らに顔を近づけ、小声で話す。

「何で？」

「別に、ミハマが来たらわかるさ。テツのやつも、余計な気を使いやがつて……」

「その……テツのことだけビ」

彼女が体を動かし話を始めたので、彼は彼女を抱えるようにして優しくもとの姿勢に戻してあげていた。

「テツがどうかした？」

「彼女と……サワダ議員の客人と一緒に、助けに来ててくれたんだ」「一緒に？何で？つーか、何である子、外に出てるの？大体、まだケガが酷いくせに？」

「わからない。後で確認しようと思つたけど。お前も何も聞いてないのか？」

「聞いてないよ。アイハラ、お前、なんか知つてんじやないの？」
「知らないよ」

「そうだね。知らなかつたら、突つ込まない」

オレを睨むイズミを制すように、彼女がフオローを入れてくれ

た。

「でも、こいつは

「シン、今はアイハラくんの話じゃない。そんなに彼を責めるな。彼は何も知らないよ。彼女が外に出ていたことに関しては、サワダ議員に確認したほうが良いだろう。彼女の行動に関しては、現在後見である彼がすべての権限を持っているし、彼が口を利けば、外に出ることも、行動の自由も得ることが出来る。それだけの話だ。ただ、そうなつてくると」

「そうだね。テツの言つてた説は、結構濃厚な気がするな。何で一緒にいたかは微妙だけど」

ちらつと、イズミが彼女を伺う。多分、彼女もオレと同じで、あの二人の仲を疑つてる。でも、オレが彼らを疑う理由と、彼女が彼らを疑う理由は確実に違うはず。何で、彼女は彼らを疑つているんだろう？

「あの二人つて、もしかして、仲良い？こないだ、一人きりで部屋にいたのを見たけど」

「さあ？ テツは何も言わないし、その人そもそも女嫌いだし。その割には、まあ、よく話はしてるみたいだけどね。ミハマが彼女のところに行くのについていつてたんだけど、慣れたんだか、二人でも平気みたい」

そこまで言つてから、彼は彼女を気にして、話すのをやめた。オレの知らないうちに、いつの間にか、彼らは近づいていたってことか？

「ミハマはティアスのこと気に入つてた」

「だね。珍しく……つーか、初めてじゃない？あんなに『執心な』の。

可愛いもんだけど。まあ、あんまり良いこっちゃないけどね。あの人の息がかかってるなら。テツの言ひ説がホントなら。テツがある子と仲が良くなるなんて、考えにくいけど?ねえ、サラ」

彼女に対する問い合わせが、どんな意味を持っていたのか。彼女は黙つて頷いた。彼女が一人の仲を疑つているとイズミはわかつてゐるくせに、ああいう言い方をする。だけど、その様子は、さつきみた際にサワダに花を持たせる行為に比べたら、ずっと自然な気がした。

彼女のこと、欲しいと思つてるなら。

09

時計が深夜2時を指していたけれど、外は夕暮れのままだった。城の中は随分静まりかえつていたはずだけれど、医務室の扉の外が急に騒がしくなつた。

「全く、あなたはホントにどうしようもないですね。わざわざテツが報告しにきたんだから、おとなしくしてなさい!」「だつて、心配だろ?? シュウジ、五月蠅い!」

ミナミさんの傍らで、イズミが声を殺して笑つていた。中に入つてこないのに、誰がきたかすぐに判るつて言つのは凄いつづーか……バカだな。

「これはこれは殿_下。こんな夜更けに」

軍医は襟を正し、満面の笑みで扉を開け、敬礼をした。判りやすく態度が変わつたのを見て、イズミの言いたいことが判つた。

「いや……それより、ミナミ中佐は？」

子供のように言ひ争っていたのを見られて恥ずかしかったのか、ミハマもシユウジさんも2人揃つて咳払いをしてから、営業スマイルで軍医に答えた。

「ええ。奥のベッドに。傷は大したことありませんが、しばらく安静にしていただいた方がいいですね」

「そう。ありがとう。こんな夜中に悪いね」

軍医の態度の変化を知つてか知らずか、ミハマは笑顔を見せ、彼を労つた。そのミハマの後ろで、シユウジさんは黙つて、彼らの様子を見ていた。

「……テツ、いないな。てつきり一緒に戻つてくるかと思つた。いつもなら、シユウジさんと一緒にミハマのことを怒つてることになる」

イズミが隣に立つオレに聞こえるかどうかと言つた声で呟いた。多分、ベッドに横たわるミナミさんには聞こえていないだろう。でも、彼の言うとおりだ。ここにサワダがいるのは、何だか不自然な感じがした。

「サラ、大丈夫？」

ミハマは心配そうな顔でオレ達の元へ駆けよつてきた。その様子を、軍医は眺めていた。隣に立つたままのシユウジさんを気にしながら。

「ミタ殿。申し訳ありません、こんな時間に」

「いいよ。心配だつたし

彼もまた、ちひつと、軍医の方を見た。それはホントに一瞬のこ
とだつたけれど。

「誰一人、欠けてもらつても困るから」

その台詞は、果たして誰に向けたモノなのか。彼の台詞と笑顔に、
何より、誰より喜んだ顔をしていたのは、イズミだつた。

「殿下、サワダ中佐はどうしました?」

軍医がいるせいか、イズミが気持ち悪いくらいに一寧にハマに話
しかける。

「後から来るつて言つてたけど。ちひつと、用があるつて言つてた
から」

「用事?」こんな時間に?」

「うん。……スズオ力准将!」

ミハマが、軍医の隣で煙草を吸つていた(ここに禁煙だと思つたが)
シユウジさんに声をかける。それを合図に、シユウジさんは軍医に
人の悪い笑顔を向けた。

「申し訳ありませんが、席を外していただけますか? 殿下のご命令
ですのです」

「え? は……」

「殿下のご命令です」

軍医は敬礼をし、医務室を出ていった。それを見届け、シユウジ

さんがオレ達の方へと歩いてきた。

「あの人、医者なら偉いんじゃないの？年もそれなりにいってたし。まあ、ミハマの命令って言われたら遠くしかないだろ？けど。階級章、見たこと無いヤツだった」

「ああ、そうですね。軍医はまた別の階級になりますから。彼は軍医少佐ですから、上の方ではありますね。こんな夜に出てくれるような階級の人ではないんですけどね」

彼は説明しながら近付いてきたが、さすがに煙草の火を消してから、ベッドの横に立った。

「やつ？ テッちゃんの名前出したら、喜んで準備してくれたよ？」

不愉快そうに答えたのはイズミだった。そう言えば、内線をかけたのは彼だけ。

「まあまあ。いつものことですよ。シンが怒ったところで、彼らが変わるものではない。もっと建設的に、復讐することを考えた方が」「復讐を建設的に考えてどうするんだよ」

ミハマが溜息をつきながらシュウジさんに突っ込む。この人も、頭がいいんだか、何だかなあ。

「サラ、無事で良かったよ。先生には連絡してあるから、もう少しゆっくり休めると思うよ」「ありがとうございます」

先生は、外にいますけど？ もしかして、以前サワダの話をしてたときに言つてた「先生」かな？ サワダの主治医みたいなもんだと思

つてたけど、もしかしたら、この人達にとつて氣心の知れてる医者つてことかも。

イズミやミナミさんは、階級が高くて、この国では扱いが悪い。あくまで相当官であつたり、出生が違つたり、なんて言つぐだらない理由ばかりだけど。

「動かしても良いらしいから、明日には部屋に戻りつ。今夜はオレがここにいるから」

彼がこんな穏やかな笑顔を人に見せられるのかつてことに、オレは驚いていた。開いた口がふさがらない。イズミは、ミナミさんを安心させるために、優しい言葉を彼女に聞かせる。

「そりが。悪いな」

それに対し、ミナミさんも優しく微笑んだが、あつさりしたもんだつた。うまく行かないもんだな。これが、サワダ相手だったら、彼女の態度は全然違つていただろう。

「とりあえず、テツがもう一度、顔を出すと言つてたので、それで待ちましょか。アイハラくん、そこの窓開けてくれますか？」

「あ、はい」

オレに指示しながら、シユウジさんは煙草を取り出した。怪我人いるのに吸う氣だよ、この人。あと、オレも一応怪我人なんですけど。動けるけどさ。

仕方なく、言つとおりに窓を開ける。ベッドからはちょっと離れてるから、まあ良いか。

「てか、ちょっとくらい我慢できないのかよ?まあ、良いけどさ。

せめて、そつちの奥で吸ってきてね。換気扇の下。アイハラ、ついでにあつちの窓も開けて」

「人使い荒いな」

文句を言いながら窓を開けた。位置関係がよく判らないけど、中庭と、その奥にある温室が見えた。確か、反対側は訓練場に直結しているから、こちちは穏やかなもんだった。客間もこちらに面してるのはずだ。まあ、医務室が訓練場側や墓場側にあつたら、落ち着かないだらうけど。ここは3階だから、けつこう下の様子がよく見えるし。

深夜の夕暮れの中、奥にある温室を囲む木々の間を縫つて歩く2人の影が見えた。

見間違えるはずがない。ティアスとサワダだった。

10

何で?何でティアスとサワダが……。

勘弁してくれ。もしかして、オレが危惧していたとおりになつたつてことか?あいつら2人、あんなこと言つくなに、こそこそ会つてるつてコトかよ。こっちでまで?

どうしたらいい?どうしてやろうか…ちくしょう。こんなコトつてあるかよ。ティアスは、あんなにオレに優しいのに。あんなに可愛い顔を見せてくれるのに。

「何、どうしたんだよ?アイハラ」

その声に、思わず振り返ってしまった。しかし、その時にはもう遅かった。イズミがオレの後ろに立っていた。オレ、そんなにおかしかった？！

いや？ 良いのか？ 結果オーライか？ サワダとティアスがこそこそ会つてること、ミハマが知ることになるんだから。そうしたら、多分、こっちのサワダなら彼に気を使いそうな気もするし。

「外になんかあるの？」

ミハマもまた、イズミの様子なのか、オレの様子なのか、とにかく不審に思つたらしく、立ち上がつた。

「いや、別に。夜は危ないから、やつぱり閉めとこつか。シユウジさんが外に出るつづ一ことで」

「私が危ないのは良いんですけど？」

ショ……証拠隠滅した！この男！！笑顔のまま、何も見なかつたフリをして、彼は窓を閉め、オレにもベッドの横にある椅子に座るように促した。その笑顔が、怖かつた。
なんだそれ、意味が判らない。

『テツちゃんと彼女がどうにかなるなんてあり得ないし、何よつミハマが興味を持つてるし』

そんな風に思つてゐるくせに、黙認かよ。だつたら、オレからミハマに……。

「ミハ……」

「アイハラ、怪我、どうへ？」

オレの言葉を遮るよつて、声を掛けてきたのは他でもない、イズミだつた。

「え？いや、もう……平氣だけど」

「だよな。軽かつたし。かすり傷だつたから、血が止まれば大したこと無いだろ？出歩ける？」

オレの首根っこを掴み、引っ張るイズミ。それをミハマとミナミさんが制止しようとしたが、無視して、彼は部屋の外にオレを引っ張り出した。

扉の外には軍医とイツキさんがいて、何か険しい顔で話をしていた。

「シ……イズミ中佐、どちらへ？」

イツキさんの表情が、にわかに明るくなつた。それに、イズミも笑顔で答える。

「ちよつと、彼にお話が

軍医の手前、オレの首根っこを掴む手を離してくれるとと思つたのだが、逆に彼はその手に力を込めた。そして、彼の様子を伺いながらいつもの嘘臭い笑顔を見せた。

「申し訳ありませんが、彼女にも中に入らせるよう、殿下から言付かつておりますので」

「そうですか。申し訳ありません

彼女は中尉で、彼よりも位は下に当たる。何を話していたかは知らないけれど、どうせその内容は、イズミがオレの首に力を込める

程度のモノだらう。聞きたくはなかつた。

イズミが後ろを振り返らず、オレを引つ張つて廊下を進むのと入れ替わりに、イツキさんが中に入つていつた。その様子を、軍医は眺めていたが、どんなつもりだったのかはオレには判らない。

「なんだよ。いいかげん、離せつて」

随分、軍医の姿は遠のいていたのに、イズミはオレの首根っこを掴んだままだつた。どうやら、離す気はないらしい。猫のようにオレの首を掴んだまま、氣にせず引っ張り続けた。

「いま、見たこと」

歩き続けて、もう、城の中央にあるエレベーターの前まで来たとき、やつとイズミは立ち止まり、口を開いた。

「サワダとティアス?」

「口外無用な」

「なんで?」

「なんでも。平和のためさ。何事も、タイミングが肝心なわけよ」

にやつと、人の悪い笑みを見せた。それって、つまり……

「伝えないわけじゃないってこと? つーか、お前の心持ち次第つてこと? 全て」

「そんな、オレがいつ上から見たよ?」

「いつもだよ」

わかんねえな。イズミって、肝心なところは煙に巻くんだ。思わずぶりな台詞と、思わずぶりな態度。心を見せてるフリをしながら、

簡単に人を突き落とすし。

「いやって、オレにはほんの風に語り合って、オレのことを同じ田線で見てるのかと思えば、やっぱり上から田線だし。

「何が平和になるんだよ。お前の言つことは意味が判らない」

「てか、アイハラ的には何で平和になると思えないのさ?」

「サワダとティアスって、どう見たって怪しいよ。こそそ2人で会つたり、一緒に外に出ていたり。それ、イズミは知つたのか?」

「半分くらいね」

「ミナミさんは知らなかつたのに? 見た? あのミナミさんが嫉妬してんの」

「お前もね」

「オレのことは置いとけよ」

「何で? アイハラだつて、充分すぎるほど、嫉妬してるから、そいつやってテツにばつか食いつくんだろ? だつて、ミハマだつて彼女と二人で会つたりしてゐるのに、それは気にしないんだ」

「色氣の問題じやね?」

オレから手を離し、突き飛ばすように体を離す。あまりに乱雑な扱いに、ちょっとだけ傷ついたぞ、この野郎。

「……まあ、ミハマじゃあな。色氣ゼロ。彼女といつても、まま」と
みたいなんだもんな

「サワダは存在がエロイのに?」

「そうそう。……て、何でそんなこと」

「オレの知つてる泉も、そつまつてたんだよ。沢田本人でなくて、沢田父のことだつたけど」

「あ、そう。あの親子もな。本人、めっちゃ嫌がるから、似てるとか言つなよ?」

せうやつて、サワダに気遣つくなに考えてんだ？
思わず、不審な目で彼を見上げた。

「誤解の無いように言つとくけど、オレ、テツのことは敵だと思つてるから。まあ、いまは一応、味方なんだけど」

「……なんだそれ。意味が判らん。イズミつて敵に気遣うのか？あんだけ、護衛部隊以外のヤツに対して、酷いくせに？それ以上にサ

ワダに、気持ち悪いくらい気使つてるぞ、お前つて」

「使つてるぞ。テツにも、ミハマにもね。でも、敵だよ？その方が自然に見えるだろ？」

イズミの言つてることも、判らないでもない。だけど、そんな不自然なこと、あっても良いんだろうか。

不自然に見えるのは、オレが彼らに、まだ過去との繋がりを求めているからだろ？

第3話 続・支配するもの、やられるもの

01

エレベーターの前で待つこと30分くらい。その間、イズミはサワダの話には触れず、くだらないことを延々と喋り続け、オレもあきれながらそれに答えるだけ。

「何してんだ？お前ら？」

エレベーターから出でたサワダの姿に、オレは心底胸をなで下ろした。

同時に、彼を嫉妬の目で睨み付けてしまっていたけれど。

「ハイツを連れ出してただけだよ。みんなまだ医務室にいるから、行ひつか」

「？ああ、そう」

オレの背中を突き飛ばすように押し、エレベーターに突っ込んだ。中で転げてしまいそうになつた体制を整えていたのに、扉が閉まつた。

「なんだよ、一体……！」

いじめか？これはいじめか？つーか、上の階に行きたいのに、勝手に下に行つてゐし。ボタンくらい押せろよ。サワダがドMなら、イズミはまさにドSだろうが。自覚してんのか、あの男は！

1階に到着し、扉が開く。開いた扉の隙間から誰かの姿が見えたとき、何だか気まずくて思わず顔を伏せた。もう、みつともないよ

な。ボタン押し間違えたみたいで。

「どうしたの、コウト? 医務室に行つたんじゃないの?」

乗ってきたのはティアスだった。降りようとしないオレを不審な目で見ながら、一緒にエレベーターに乗つた。

「乗るとき、サワダとすれ違つた」

「……そうなんだ」

その間は、無いよな。まあ、完全に判つてての嫌味だつたから、仕方ないかも知れないけど。

だって、このタイミングは……無いだろ? もう少し氣を使えよ、2人とも。あからさますぎるだろ? 少なくともヒントランスマで、彼らは一緒だつたはずだ。

「さつきは助けてくれてありがとう。でも、途中で消えちゃつたら、心配してたんですけど」

「あ、そうだね。『ごめんね』でも、あの入達、私のことあまり信用してないって言つたが、ものすごく疑つてるから。余計なこと聞かれないうちに、と思つて」

「消えちゃう方が怪しまれない?」

「でも、それならどうせやつて出てきたんだつて話になるじゃない。一緒に戻る必要はない」

なんか、納得出来るような、出来ないような。

「サワダと、一緒に助けに来てくれたから、一緒に出でてきたのかと思つた。その方が納得できる。あいつ、あんなんでもいいのおヒライさんみたいだし」

行為を肯定してやれば、話を聞きやすくなるんだって、オレの知つてる泉は言つてた。
もしかしたら、この子のイズミも、そつ考えながら話してるとか
も。

「違つわ。たまたまよ。出てきたら、余つただけ」

「なんで出てきたの？」

「何でそんな風に聞くの？」

ちよつと、不機嫌な顔を見せる。その様が余計に怪しかった。

「なんで出てきたの？」

「……だって、魔物が出てきてるでしょ？」この国は、まだ、対抗力

がほとんどないに等しいじゃない

「一イジマ達と連絡とりついこつて言ってたくせに、こんなに出歩

いてるの、おかしくない？」

「前よりは、とつやすくなつてるよ、私のケガが治つてきてるんだ

から」

彼女は笑顔一つ見せず、むつとした顔のままぞう吐き捨てた。
扉をじつと睨み続け、エレベーターがついた途端飛び出した。

「え？あ、『めんつて！』

追いかけようとオレも出たけど、さすがに足が痛くて走れない。
てか、ティアスもまだそんな、走つて良いような体じゃないはずなんだけど。戦うなんてもつてのほかのはずだし！はずなんんですけど
……。

オレが弱つちこのかな……。それとも、ティアスがものすごく無

理をしてるとか？

ああ、もつ……しかもものすつゝぐく怒りせぢやつてゐるし。余計なこと聞きすぎた。でも、怒るってことは、やましこじとがある証拠、なんだよな。隠さなくとも良いじゃんよ。いや、隠すなら、もっと完璧にしてくれよ。オレがへこむ。

なんだこれ。オレ、こいつのティアスのことが好きだつたわけじゃないはずだろ？ オレが好きなのは、オレにもみんなにも優しいあっちのティアスだ。

確かに、こいつのティアスならフリーだし、オレだけが彼女の秘密も握つてるし、落とせるかもつて思つて、頑張ろつとは思つたけど。

それにオレは絶対、元の時代に戻るつもりなの。

なんでこんなに、彼女に振り回されちやつてんだよ？！

02

早く、戻らなくちゃ。

あちらとこちらの彼女の存在が、オレを急かす。

オレの記憶に残っている最後の彼女の存在を、必死に思い出す。それにはがりついているのが、はつきりと自覚できる。

早く、帰りたい。こんな所にいたくない。

足取りは重かつた。自分でもびっくりするくらい、体が動かなくて、それでも何とか部屋に戻り、ベッドに倒れ込んだ。塞いだはずの傷口から、包帯越しに血が滲んでいた。その血が、傷つき、横た

わっていたミナミさんの姿にかぶる。オレが、あんな田にあつたら
一体どうなつてしまふんだう。

「この世界には誰もいない。ティアスも、サワダ達も、所詮はオレ
の知らない連中だ。
だけど彼女だけは、……ティアスだけは違つはずだった。それな
のに。」

「アイハラ？ 起きてる？」

ノックと共に聞こえたのは、ミハマの声だった。こんな時間に、
王子様が何やつてゐるんだよ。出ないわけにも行かないでの、足を引
きずりながら扉を開けた。

「「めん、寝てた？ 足のケガをサラが気にしてたから

そう言つて彼がオレに手渡したのは、換えの包帯と傷薬（ちなみ
にかなり怪しげな色をしていたのだけれど）だった。オレは彼に中
に入るよう促し、椅子を勧めた。

「ミナミさんが？ 自分もあんなにケガしてたのに？ オレのケガなん
か大したこと……」

「シンがアイハラのことを持つ張つてつたからさ。無理はしちゃダメだよ」

だからって、わざわざミハマが来るか？

「あ、オレがここに来たこと、シユウジにもシンにも言つちやダメ
だよ。軽はずみなことするなつて、五月蠅いんだ」
「うん。だいぶ軽はずみだと思つ。確か、王子様じやなかつたっけ
？」

「王子様だよ？これでも

笑い飛ばす。彼の持つ雰囲気はまさに王子様と言わんばかりの、オーラのようなモノを持っているのだが、行動が伴わない。

「じめんね。多分、振り回されていると思ひけど」

「え？」

「オレからも、言つとくから」

「……別に。だって、ミハマのために動いてるだけだろ？あの入達。別に、なんも悪いコトしてないし」

ふてくされたようにいつも言つたオレに対し、ミハマは笑顔を見せる。

「そうだね。でも、それがアイハラことっては良いことでも、悪いことでもある。そういうもんだろ？だから、そんなこと、言わなくていいって。ありがとう」

「……やっぱ。今、ちょっとどきつとした。男相手なんですけど。そういう言つことねりつと言つ？！こんな真っ直ぐで、優しくて、いい人で……。あいつらが彼のために何かしようつて頑張るのも判らないでもない。

『口外無用な。平和のためを。何事も、タイミングが肝心なわけよ』

イズミはああ言つてたけど。でも、ミハマに今の状況を知らせなくて良いのか？オレだって、あの2人のことが気になる。だったら、彼の置かれている立場ならなおさらだ。

ミハマとサワダの距離。彼の、彼女への思い。

下心が、あわよくばとこいつ思ひが、無いとは言わないけれど。

「……サワダって、ミハマと仲良いんだり? 田下だけど、幼馴染みだつて」「うん。何? 突然」

「だつたらさ、同じ女の子を好きになつたりしたこととかないの? 一緒にいたなら、会つ子も一緒なわけだろ? 」

ミハマは腕を組んで考え込む。考え込むよつなことじやないから、彼なりのパフォーマンスなのかも知れない

「無いかな、そつ言ひの。オレ達、好みが随分違うから」「なるほど。ミハマは、サトウさんはタイプじゃない……と」

「あはは、そつなるね」

「あ、ごめん。ここの人たち、彼女のことに触れたがらないから」

でも、ミハマなら、笑い飛ばして話を聞いてくれる気がしていた。彼が一番気にしているだろうけど、彼が一番、受け皿が広いといつか。ずるいかも知れないけど、彼にこつそり聞くのが一番良いかも知れない。探し探りだけぞ。

「神経質に見える?」

「少し。でも、ここに来てから、サワダとサトウさんが一緒にいることか見たことないし。あれかな。昔つき合つてたけど、今は別れてて、サワダが気にしてるから、周りが腫れ物扱い……とか?」

ミハマは、ただ微笑むだけだ。

「ほり、なんて言ひの。」「一般的に考えてつて言ひつか。やつぱ、元カノ元彼とか気にするじゃんね?」

「そうだね」

「だから……かな？って。違うみたい？」

やつぱり、微笑むだけだつた。

「あのや、『言いにくいのかも知らないし、知らせたくないのかも知れないけど、でもセオレも、どうやって氣を使って良いか、判んないんだよ……』

「そつか。『うだよね。』『めんね。』でも、テツヒサトウさんて別に何もないんだよ。サトウさんが好きなのは、テツキさんだしね。でも、ちょっとこういふあつてさ」

あれ？今、やつぱりとスゴイこと言わなかつたか？

テツキさんて……サワダの父さんだろ？ミハマが敵視してゐる数少ない人間だろ？！しかも、サトウさんがサワダの好みとか何とかも簡単に肯定するし。

えつと、重いつづーの一

待て待て、自分。あつせつミハマが『こんなコトを言つたとは言え、こんなにおろおろしてどうする。別に、サワダがサトウさんを好きで、サトウさんがサワダ父を好きでも、別に彼らの間に実際に何かあつたわけでもないし、

……何かあつたらどうしよう。なんか、こいつのサワダ父つて、いろいろ悪いコトしてやうなんだもんな。だとしたら、あいつらがあんなに氣を使つたり、サトウさんのことを敵視したりする理由も判らないでもない。極端だとは思つけど。

「どうかした？」

「いや。別に。なんか、『めん。変な話、わからせつ』」

「何で？どうしようもないし、アイハラの言ふとおりだよ。知らないや氣も見えないし、知らないことで怒られたのは腹に合わないよ」

「」の立場の人には、いつも見つめられることは本当にありがたいけど。でも「」は、ホントの所どう思つてるんだ？ だって、ティアスのこと……。

やう言えば、」の人、氣があるような口調を簡単に言つたわりに、生きしゃがないな。

「ミハマヒー、サトウさんのこととか、ホントはどう思つてるの？」

王子様じゃなくて、ミハマさん

「難しことに思つね。でも、君であるオレも、普段のオレも、オレなんだけじね」

「だけど、本音つて隠してない？ 特に、立場があるとな」

「隠してはいなによ。黙つてはいるけど」

いつもの隠すつて言つんだよ。

「みんなが氣を使つてくれるとおつだよ」

珍しく彼は頭を伏せ、微笑んで見せた。微笑んでるはずなのに、その姿はきれいなのに、怖かった。

「ああ、やう。相当極端だよね、それって。違う？」

「極端……かもね。なんと言つてくれてもいいけれど」

「開き直つやつてるよ……」

何があつたんだ。聞きたくもないけど。

彼女がサワダに、なんかしたつてことだよな。だから、ミハマは怒ってる。それを、あの人達は気を使つてる。彼ら自身の怒りも相まって。

でも、そんなに気にするようなことなのか？あいつだって、もういい年なのに。女がこっちを振り向かないくらいで。違うのか？

「何があつたか聞いてもいい？」

「聞いても、大したことじゃないよ」

「大したことじやないなら、聞きたいかな」

「ああ、そうかあ……。事実は大したことじやないんだけど。結果がね」

結果？サワダがどう思つてるかつてこと？

あの、常に何か重いものでも背負つてゐるような顔をしながら、時折笑顔を見てくれるサワダが、一体何を考えてるかつてこと？それが聞きたいんですけど？！

よく考へないと……。

ミハマは、イズミのよつに攻撃的に出ることはないだろ？。だからこそ、氣を使うべきだし、考えて言葉を出すべきだ。

簡単に見透かされても、オレの失態を、オレ自身が知ることが無くなつてしまつ。

『どうしたの？大丈夫？何があつた？』の台詞つて、すぐ人を追いつめると思わない？』

心配されるくらい、別に良いじやないかと思つけど、イズミはそれがサワダを追いつめると言つた。でも、要するにそんな言葉が受け入れられないほど、まずい状態つてこと？それつて？

『いいんだよ。一人にしてやるしかない。閉じこもつちやつてんだから』

『死神は、オレがどうこうの状態なのか、判つてたんじゃないのか？だから、用があるなんて嘯いて』

イズミも、ティアスも、彼の様子を、何かが彼を落としていることを、知つてゐるし気付いている。

『オレもあの女も、自分の墓を掘つているんだ』

そして、彼らが頻繁に使つ『墓』と言ひ言葉。サワダは、誰かの墓を掘り続けているのかと思つたけど、そうじやない。自分の墓を掘つてゐる。何のために？

『同病相憐れむつて言葉、知つてる？』
『何を下らんこと言つてる、あんたは』

ティアスもまた、自らの墓を掘り続ける。彼女と彼は、『同類』なのだ。少なくとも、お互にそう感じていたはずだ。他の誰が否定しても、彼ら2人はお互いに。

その2人が樂師とオワリの雄将としてではなく、ティアスとサワダとして出会つてしまつた。だから、彼らが一緒にいるのは、必然的なものなのかな？

「以前、イツキ中尉とも話したんだけど、サワダは、どうして墓を掘るのかな？その理由を、みんなは知つてるんだよね？」

心臓が押しつぶされそつた。ミハマがどう思つつか、判らなかつたから。ただ、心配しても、彼がどう思つてゐるかなんて、オレ

には判らないんだだけ。

「明確な理由を知ってるわけではないと思ひばぢね、みんな」

「でも、共有してる」

「ただの精神安定剤がわりだよ。ああして墓を掘つてると安心するみたいだから。罪を償つてる気分になるんだろうね」

彼の言葉は、やつぱり重い。かわらず、淡々とした口調で、微笑んだまま、重い言葉を紡ぐ。

「だとしたら、あの、中央の楽師も同じなんだね」

「どうして？」

「知ってる？ミハマ。あの2人、『同病相憐れむ』ってヤツらしいよ？そう言つてるのを聞いたんだ。だとしたら、ティアスよりずっと、楽師殿の方が彼にお似合いじゃない？」

するいと思つた。自分のこと。でも、彼と同じように、何氣ないフリして喋つてしまえばいいんだとも思つた。

「やべ、奇遇だね」

「……奇遇？」

「ティアスにも、彼は同じよつて思つてゐるみたいだよ？」

その台詞は他でもない、彼が彼女を疑つてゐると言つて示していた。

ミハマの表情は変わらなかつた。彼の台詞が、本当は何を意味し

てこるのか。オレには判らなかつた。判らなかつたけれど。

「……同じようじ? つて?」

「うん、だから同じように。テツがあの楽師殿に感じているものを、ティアスにも感じてゐる。あまり良い言葉とは思えないけれど、その、同病相憐れむつてヤツだね」

「……そう言つ……」

「そんなに、同じように感じる人つて、たくさんいるのかな?」

ミハマの言詞が意図することを、今度ははつきりと理解する」と
が出来たと思つ。

「ティアスと、あの楽師殿が似てるつて?」

「そうだね。オレもテツも、違う意味で、そう思つてゐる

「違う意味で?」

「うん。オレは、ティアスも楽師殿も、人の傷みを受け止められる優しい人だと思つてゐる。アイハラが少し話してくれた、君の時代にいたティアスのような人だつて、オレも思つた」

オレは黙つて頷く。今は全面的にその意見に賛同できないけれど。オレの知つてゐるティアスのように感じるときがほとんどだけど、でも少しだけ、強すぎる部分も感じてゐる。

「でも、彼女の優しさって、自分の重みがそれをせしむと思わない?
? 表面的な優しさに誤魔化されそうになるけど」

「表面的? よく判らないよ」

「その場限りの、気遣いなんて、出来る人はいくらでもいるし、要領のいい人ならほぼ確実にそうするだろ?」

「この人、このキラッキラの爽やか笑顔で、酷いことわざりと言つ

ませんでしたか？！それを優しさと言わないわけ？この人。イメージ違うな……つてことも無いか。

「ええっと、あれですよね。ティアスは、そうじゃなくて、優しいつて言つてるわけだよね？」

「ん？ そうだよ？ 何かおかしなこと言つた？」

「いや、言つてない……よ？」

この人の笑顔つて、邪氣がないんだよな。台詞はなんか重いんだけど。騙されそうになるな。騙されちゃいけないって言つのは、この人の周りの人見てたら、強く思うけど。

「サワダとは違う意味つて？」

「うん。まあ、テツは、あんまり女人、信用していないしね。だから、ちょっとフィルターかかるつて言つうか。ティアスも、あの樂師殿も、自分と同類つて言うか、ちょっと似てるんじゃないかつて言つてる。自分の悪い部分というか、重く暗い部分に」

ミハマの表情が曇る。こんなにはつきりと、強く思い表情を見せることは少ない。だけど、その表情は大抵、彼らのことを考えると見せる。

「オレも、テツとティアスは似てると思ってるよ。でも、あいつが思つてるみたいに、悪い意味じゃなくて。の人達、根が暗いんだよね」

「サワダが根暗なのは判るけど

「あはは。『じめん』じめん。根暗つて言つるのは言い方が悪いよね。ちよつと、内にこもる部分があるつて言つうか。こもりすぎてて、本当にのこと考へてゐるのに、それがうまく伝わらないつて言つうか。テツは口が悪いし、プライベートでは気遣いもそんなにうまい方じゃ

ないから、あまり優しく見えないかも知れないけど」「そんなことはない。サワダは、まあ、確かに口も悪いし、言い方もきついけど、優しいこともあるなって思うよ」「アリシリ

それはもしかしたら、比較対象として側にイズミがいるからかも知れないけど。あの一人は、一人とも口が悪いけれど、面白いくらい正反対だ。

「そう、アイハラならそう言つてくれると思った。ありがとう」「何でミハマが礼を言つただよ。ビリして良いか判んないって、そいつ言つことられる」と。

「いろいろフォローされてるの、知ってる」「良かった。でも、本当は、みんな優しいよ。オレだけは、あんまり優しくないんだけど」「そうかな？ミハマは優しいけど？」

「オレは、喋り過ぎなんだ。何も言わないことも、多分優しさだと思つ。テツのことで怒ることも、その理由を言つことも言わないことも。事実を告げることだけが、優しいことだとは思わない」

「それはそうだけど……でも、今、ミハマ」

「だから、オレは優しくなんかないんだって。この手の中の世界を、守り、大きくしていくことだけが全て。そのために動くつて決めた。だから、それ以外のものに対して、オレは厳しい。そんなの優しくなんか無いじゃないか」

「仕方ないんじや……」

仕方がないことだと。オレは思つたけれど。だけど、その優しさも厳しさも、オレに向かはれていたとしたら？
ミハマの優しさでオレはここにいる。だけど、彼の世界は、あの

護衛部隊だけ。もしかしたら、この国も入ってるかも知れないけど、この国にだって敵はいる。

彼は黙っていることも優しさだという。だから、イズミやイツキ中尉がサワダのことを語らないのも、サワダに対する優しさであると同時に、オレに対する優しさだと。

彼らが黙っていることが、本当の優しさだとしたら、今、ミハマがオレにいろいろなことを告げてこることが厳しさだつて、彼は言つてるのかも知れない。

でも、そうは……思えないし、思いたくもない。

「ミハマって、ティアスのこと、ホントの所どう思つてるの？ イズミなんかは茶化してるけど？」

「どうだろ」

「どうつて？！ そこは誤魔化すんだ。ずるいな

「誤魔化してないつて！」

照れてる…この人照れてるよ…ああいつこと、さうつと言ふくせに、この手のことは全然ダメなんだ。判りやすく顔も赤いし。

「アイハラだつて」

「オレ、そんなに判りやすくなつて。別に、こいつのティアスは、オレの知らない人だし」

そのはずだけれど。

「いや、まあ、ね？」
「意味判らないし。何だよ」

真正面から突っ込んで、こんなにあからさまに照れるとは思わなかつたな。でも、この様子だと、サワダとティアスのこと、多分な

にも知らないよな。もしかしたら、疑つてもいいのかな?『ティアスよりずっとお似合い』なんて、遠回しあげる台詞じゅう、ミハマには通じないのかな。

「もし、サワダに彼女とられちゃつたら、どうすんの?」

「取られる?別に、オレと彼女は何もないし、テツとも無いよ。でも

「だ

その台詞は、彼がそのことを考えよつとしていない様にもとれた。

「でもつて?」

「ホントにそうなつたら、それはそれで良い傾向なんぢゃないかな?

「?

良い傾向つて!?

05

オレが、彼の台詞の真意を聞いただと口を開いたとき、彼は笑顔で持つてきていた包帯と傷薬を差し出し

「オレ、手当てしようか?」

なんて言しながら、まるめてあつた包帯を解き始めた。彼がこの話を終わらせようとしているのは明らかだった。だけど、彼の綺麗な笑顔の持つ圧力に、逆らえなかつた、何故か。

「……ありがと!」

「自分で包帯ほどける?薬を塗るから」

もう、ほとんど痛みはなかつたけれど、包帯をはずしたら、オレ

の足は赤黒く変色していた。おかしいな。普通に歩けたし、イズミ達の言うとおり、（最初はびっくりして大騒ぎしたのが恥ずかしいくらい）そんなに酷くない気がしてたのに……。なんかこれ、おかしくない？

てか、こんな状態なのに薬を塗るだけかよ。しかも、あの恐ろしい緑色つーか、腐った色の。＝ハマを信用しないわけじゃないけど、あの医者の人も信用していないわけじゃないけど、見かけ何とかならないのか？

「こうこうのって、薬で治るの？」

「治るものと、治らないものがあるけど。魔物が相手だったからね、なんとも」

そう言えば、あの軍医もそんなようなこと言ってたな……。判らないことの方が多いくことか。やっぱこの薬、信用度が低いかも。

「今夜、君たちが出会った魔物は、少なくともテツ達ですら初めて見るタイプだつて言つてた。ティアスもね」

「……ティアスに話を聞いた？ オレを助けてくれたんだ」

「又聞きだけど。魔物を退治したときに、テツが彼女に聞いたつて。戦い方が判らないと、あいつらとは戦えないから。データは持ち帰つてきてるけど」

「そうなんだ。なんか、色気のない会話

少しだけ、ほつとした。もしかしたらこいつそり会っていたのも、サワダのことだから対魔物の話を聞き出してたのかも知れない。

……それはそれで、彼女にとつては困るだらうナビ。

「彼女は天から来る魔物への対抗力を持つてる。彼女や、テツキさん曰く『国が北に近いから、脅威にさらされていた』って話だよ」

オレの様子を見て、そう教えてくれたくせに、笑った。

「結構、過酷な環境にいたのかな？だから、あんなに強いとか？だつて、ミナミさんだつて、この国では上方の階級なのに、戦えるのに、あの魔物に対しては何も出来ないに等しかつた。いくら、魔物に対するのには戦い方があるからつて」

「そうだね。サラも、魔物に対する対抗力は持つてゐるけど、あの天から来るものには力が及ばないと言つていて。シンやテツが彼女ともデータをシェアしてるので使いこなせるかどうかは別なんだ」

おそらくそれは、あんなに研究しているショウジさんが、魔物と戦う力がないことに等しいのだろう。

「彼女は戦えるし、知識も豊富だし、それを応用する能力もある。ショウジもテツもシンも、彼女を評価していたから相当なものなんだとと思うよ？」

伊達に、中央の大佐じやないつてことか。

ミハマはオレに薬を塗つたあと、包帯を巻きこつとして、解いた。しかし、その後が酷かつた。長く伸びた包帯と格闘しながら、ねじり、ぐちやぐちやのまま、巻き付けよつとしたので思わず止めてしまつた。

「ごめん、ミハマー、オレ、自分でやるからー。」

「え？ そう？」

「……よく、他の連中にもそう言われない？」

「わりと……」

これが普通だと思つてませんか？重傷だぞ？不器用すぎる！ってか、

自覚をせろよ！教育係だろ、シユウジさん！――

「サワダってさ、女人の人苦手だつて言つけど、ティアスとはよく話すんだ。気にならないの？まあ、色氣のない話ばかりつて感じみたいだけど」

「うーん。オレとあの子が仲良くなることを、シユウジやテツやコノはあまり良い顔しないんだよね。テツキさんの息がかかつてるとか、正体不明だと書いて。まあ、その兼ね合いで、彼女の所に行くと大抵テツがくつづいてきて話してゐるうちに、慣れちゃつたみたいだよ？」

……ああ、サワダ父のミハマつて普通に話に出すけど、二人で話してゐる時つて、すゞしく険悪だらうが？なんでこんな風に、笑顔で話が出来るんだろう。

「別に、サワダのお父さんも、エライ人じやん。身分がどうとかつて話もあれだし、敵対勢力と仲良くなることが悪いとは思わないけど」

「だよねえ。オレもそう思う。でもまあ、シユウジ達はテツキさんの狙いを、オレの失脚だと思つてるからや」

やれやれ、と言つた顔で天を仰ぐミハマ。思つてゐつてなんだよ。変なの。

つーか、失脚つて。

「またそつ言つことわらひつと言つ！失脚つて？何で？だつて、サワダ父には王位継承権はないつて聞いたぞ。あるのはミハマと、サワダと……」

「まあ、そつ言つことだね。テツが王位についたら、その実父であるテツキさんは必然的にここでも扱いが変わるからね。でも、オレ

はそんな小さいことに彼がこだわるよりは思えないけどな

「小さくないよ！ 小さくない！」

「でも、テツが王位についても、テツはオレのこと裏切らないよ？」

そんなの、判らないだろ！

さすがにそうとは言えなかつたけど。

06

ミハマにオレの言いたいことは伝わったのか、そして彼が伝えたかったことがオレに伝わっているのか。どちらも成されていないような、そんなもやもやとした感覚がオレの中に残つた。だからかも知れない、彼が立ち去つた後も、ただ黙つて彼の座つていた椅子を見つめていた。

オレが気にしそぎているだけなのかも知れない。ティアスとサワダのこと。本当は、気にする必要もないかも知れないし。大体、オレが欲しいのは、いつのティアスじゃないはずだ。だけど。

そのはずなのに。なのにどうしてこんなに心が重いんだろう。

あいつらが一緒にオレとミナミさんを助けに来た……それだけなら良かつた。あいつらが一緒に中庭でこそそそ会つてたりなんかしたから。こんなに引っかかる。

布団にぐるまつたまま、そんなことをずっとと考えていた。いつのまにか時計は5時を指していた。空は、昼に比べれば暗いとは言え、ずっと明るい今まで、そんなに時間がたつていた気がしなかつた。

嫌な気分だ。

はつきりしたかった。怖かつたけれど、オレは再び窓の前に立ち、

中庭を見下ろした。もちろん、随分上の階なわけだし、医務室から見下ろしたときのように、はつきり何があるか判るわけじゃないけど。大体もう、サワダもティアスも、城に戻ってきてたんだから、いるわけもなかつた。

「え？」

氣のせいだらうか。木が揺れるその隙間に、人影が見えた気がした。遠いし、木陰にうまく隠れているせいか、すぐに判別できなくなつたけれど……。

怖くなつてきた。あの時、3階の医務室から見下ろした、あの二人だと思つたら。

スリッパを脱ぎ、靴に履き替えた。その時、自分の足を見てびっくりしたけれど、あんなに赤黒く腫れ上がつていたはずなのに、随分治まつっていた。傷みはほとんど無かつた。

急いで部屋を飛び出し、エレベーターに乗り、二階に向かつ。この時間は、おそらく外には出られないだらうし、オレが出入りできるフロアは限られているから。

3階フロアを進んでいく。窓側には全て部屋があるので、中に入らないと、中庭を見下ろすことが出来ない。とは言つても、医務室くらいしか入れる部屋はないんだけど。

うろうろしながら探していたら、奥の廊下を突き当たつたところに、唯一中庭に面している窓があつた。その窓は開けることは出来なかつたけれど、外の様子を伺うことは出来た。さつきよりははつきりと人影を確認できた。それでも、木々が揺れるその一瞬だけだつたけれど。

やっぱり、サワダとティアスだつた。寄り添つてゐるように見えるのは、オレの氣のせいか？

「ひらひら。口外無用つて言つたる? なにこんな所にまで確認しに

きてんだよ。やつやと部屋に戻れって

「……イズミ……中佐」

やう言えば、今夜はミナミさんの側にいるって言つてたな。だつたら、やすと医務室にいるよ。

「別に、見たくて見てるわけじゃない……」

「わざわざ、こんな所に降りてきてるのに? あいつら、あれで隠れてるつもりなんだから、まつとこてやれば?」

いや、充分隠れていますけど。よつほど田を凝らしてみないと判らないし。静かに、気配を殺したまま、彼はオレの隣に立ち、中庭を見下ろした。

「まつといても良いわけ?」

「今はね。テツが、ホントの所どう考へているか判らないし。彼女も

「同病、相憐れむつて?」

イズミは一瞬、押し黙った。彼がそんな態度に出たこと、オレは驚いたけれど。

「誰だよ、そんなことお前に言つたの」

そつぶつけに言つてから、また少し、沈黙が流れた。

「……ミハマ? ミハマだよな?」

「オレが、彼にそう言つた。サワダとあの中央の楽師の話を」

「ああ、そう。彼は、それを知つていても、口にしないのに」

『そう、奇遇だね。ティアスにも、彼は同じように思つてるみたい

だよ?』

奇遇だったのは、サワダが『ティアス』と『樂師』それぞれにそう思っていたこと?それとも……

「奇遇だな。同じ話をするなんて」

「そうだな。うん……ホント」

ミハママつて、どこまで、何を理解してるんだ?そしてその思いを、彼ら護衛部隊は全員共有してるのか?それともイズミだけか?もし共有しているのだとしたら、サワダがあんな行動に出るわけがないだろう。

それとも、端にティアスのことを樂師だと疑ってるってことだけを共有してる?

「……中央の樂師と、ティアスのこと、似てるって言つてたよ、ミ

ハマは

空の色が、すつきりしなかつた。再び大きく風が吹いて木々が揺れる。その隙間から見える一人の姿は、深夜の公園でいちゃつくカップルそのままだった。

「ああ。だから、気に入ったんだよ。知ってる?」

「どこが似てるんだよ」

「根暗なところかな」

「意味わかんねえ。素直に『顔が好みでした』って言う方が判りやすいよ」

そうだな。なんて囁きながら、イズミはげらげら声を上げて笑っていた。

「でも、サワダも、同じこと聞いてたって、ミハマは言った」「だねえ。ただ、ミハマとテツが似てるって言つた部分は違うと思つけど?違つはずなんだけどね」

げらげら笑うべしに、いやに真面目な表情で外を眺めていた。

「テツは、彼女を疑つてるんだけどねえ」

「ミハマは?」

「ああ。どっちでも良いんじゃない?」

どっちでも良いつて、そんな答えがあるか。そもそも、お前んとこのH子様であり最高責任者じやねえのか?一でも、やつぱりサワダが疑つてゐつてゐつのは……。

「疑つてるのに、ああいつ真似するような男なんだ。サワダって」「どうだろ?ね。ミイラ取りがミイラについて所じゃない?その内、答えが出るさ。だから言つたら?時期尚早だつて。あの状況、今は見逃してやろうよ?」

「……それって……」

「どう転ぶか、判らないからさ」

イズミは、やっとオレの方を見ていた。企んでいるのが、オレにもよく判つた。

イズミに促され部屋に戻つたものの、結局一睡も出来なかつた。

ふらふらの頭で、ミハマのいるフロアに向かう。彼の気遣いで、彼と彼の護衛部隊が食事をするときに呼んでもらえている。他の客人と一緒に食事をするのは大変だと言つことで。オレは、ミハマが父親であるオワリの王と一緒に食事をどちらず、専用フロアで食事をとつてることに驚いたけれど、もうそつ言つもんだと納得するしかないのだと思つことにした。

彼らはいつものようにミハマを囲んで、一つの正方形の大きなテーブルで食事をとつていた。たくさんのバターロールとハムエッグにサラダ。それからオレンジジュース。王子様にしては簡素な気もしたけど、充分すぎる食事だ。時代なのか、好みなのかは知らないけれど、今まで口にしたものは、全部とにかく塩辛かつた。気になると言つた程度だけだ。

オレはミハマの真正面に当たる、彼から一番遠い席にいつものようく座った。その時初めて気がついたけれど、いつもミハマの右隣に座っているはずのサワダがいなかつた。ケガをして医務室にいるミナミさんがないのは判るけれど。

「おはよう、アイハラ。眠そうだね？ 大丈夫？ 昨日遅かっだし、ケガしてるから……」

「あ、全然。大丈夫だつて。それよりサワダは？ 珍しいね、いないの」

昨夜、随分遅い時間というか、ほとんど早朝だつたんだ、ティアスと二人で中庭にいたのは。途中で見ることをやめたけれど、彼らはいつまでああして一緒にいたんだろう？ その後、寝てるつて可能性もあるな。

「ちょっと、お使いに行つてもらつてる。ご飯くらい食べてけばっ

て言つたんだけど、先に行くなつて

ジュークのボトルをとろうと手を伸ばしたミハマを制し、代わりに注いであげたのはイズミだった。そのまま席を移動し、いつもサワダが座るミハマの隣に座つた。

「あ、そりなんだ」

「眠そうだったから、無理しなくて良いのに。シンが代わりに行くなつて言つてくれたのに、ねえ？」

同意を求められ、頷いたイズミだが、彼はいたつて普通だつた。眠くないのかな……。

「良いんじやないの？ついでだからさ。あいつが行くつってんだら、行つた方がいいって。自分で気付いてるなら、その方がいいって

「うん。まあ、そりなんだけどね

「人のことを心配していられるような立場ですか、あなたは。もつ少しちゃんとしなさい、ちゃんと」

初めてみたときから全くもつて違和感の無かつた、食事中に新聞を読みながら説教をするシユウジさんの姿が、今日は妙に違和感があつた。どうしてだろうと見ていたら、その違和感の正体に気がついた。今日は制服着てるーちゃんとした格好だ！

「シユウジさん、今日は何があるの？」

「何ですか

「いや、……違和感ありまへりでしょ？」

オレの突つ込みに、不思議そうな顔で隣に座るミハマに尋ねるが、

彼もまた笑顔で即座に突っ込んだ。

「普段の自分を振り返りなつて。オレにちゃんとしろって言つ前に
わ」

「ちゃんとしてるじゃないですか。制服まで着て」

「普段してないくせに」

この二人じや埒があかない。オレは隣で笑いながら彼らを眺めて
いたイツキ中尉に聞くことにした。

「中央の監査の人があるのよ」

「へえ……」

あれ？ その話、昨日聞いたな。

「ミナミさんに聞いたけど、それって、来週じゃないの？ 3月1日
だって言つてた気がする」

「ええ。先月そう通達があつたんだけど、昨夜急に統轄本部の方だけ
先に監査にいらつしやるつて連絡が。急な話だから夕方になるそ
うだけど、準備で今日は忙しいみたい。テツちゃんは出かけて正解
かもね」

「統轄本部……。確か、サエキ大尉が来るつて」

「ええ。サエキ大尉つて方を知つてるの？」

「あ、うん。中央に行つたとき、少しだけ話をしたんだ。綺麗な人
だつたから、覚えてただけで……」

一言余計だつたかな。イツキ中尉は「そう」とだけ言つて微笑んで
いたけれど。

もしかして、サエキ大尉はティアスのことを心配して？ いや、い
くらなんでもそれはないか。仕事だろうし。でもニイジマ達の話だ

と、相当心配してたみたいだし……。

「お仕事があるから、制服着てるんだ、シユウジさん」

「……普段も、お仕事してるんだけどね」

思わず一人で苦笑い。可愛いなあ、イツキ中尉は。

「何ですか、そこ一人。こそそしてー」

真正面から睨み付け、オレ達一人つづーか、オレを指さしていたのはシユウジさんだつた。何か悪いことでもしたかな?メガネ光つてますけど。

「人を指さすなって、シユウジさんが言つんぢやないですか。恐一・怖くなんか無いです。いいから、離れなさい」

お父さんか!~ちょっとシユウジさんがあり得ないくらい怖いで、これ以上突つ込むのをやめたけど。オレは。

「何おっさんみたいなこと言つてんだよ。シユウジさん、だつさにな」

「何ですか」

「いや、だから、行動が」

何故かムキになるシユウジさんを、イズミが苦笑いを浮かべながらからかっていた。

「監査の人人が来るつてことは、みんな忙しいんじゃないの?てか、サワダはいなくていいの?」

「ええ。だからすぐ戻つてくるわよ」

気にせずイツキ中尉に話しかける。何か、シユウジさんとの態度つて、やきもきっぽいんだけどな。さすがに、そんなこたないか。

「お使いって、何しに行つたの？」

「先生を呼びに行つてくれてるの。サラさんの様子を見るために」

「そう言えば、軍医のおっさんも、よく判らないからビリとか言ってたけど、詳しい人なの？」

「そうね。ここの中の軍医よりはずつとね。でも、やつぱり信用できる先生がいた方がいいでしょ？」

「……そらなんだ」

納得できない話ではないけど。何か、城の中にいる人より、外の方を信用してゐるつて言つのもなあ。今までずつとそうしてきてたつてことなんだろうけど。仮にも、王子様とその護衛部隊なのに？

「こんな忙しこときには、サワダがわざわざ？電話で呼べばいいじゃんよ」

「いいのよ。お使いなんだから」

何か、隠しているような口振りだつたというか、イツキ中尉らしく、先にオレに情報を与えてくれていたことに違和感はあったけれど、やっぱりなつて感じだった。

これも多分、サワダへの気遣いなんだ。彼らの。

オレには一体何をしているのかは見当もつかなかつたけれど、城全体が慌ただしく動いているだけは判つた。廊下ですれ違う軍人

達は、オレなんかに構つてゐる暇は無いとばかりにばたばたしていた。人に気にされないと呟つことが、こんなに楽なものだとは思わなかつた。

樂ではあるけど……寂しいもんだな。不審がられていても、存在してるように見られていた方が、いいこともあるつづーか……贅沢な悩みだけど。

元々オレなんて、ここでは厄介者って言つか……。サワダに出会つて、ミハマが助けてくれなかつたら、今ごろどうしていたか判らないくらいだもんな。ミハマが拾つてくれたからこそ、ここでの扱いが良いこともあるし、面倒なこともある。

まあ、拾つてくれたミハマはともかく、彼の周りからは、まさこ招かれざる客として扱われているけれど。

オレを受け入れてくれたのは、多分ティアスとミハマだけなのに。

そのティアスは、結局オレがいた時代の彼女と同じく、サワダの元へ走つてしまつたわけだ。別の人間だの何だの言つておきながら、結局はそうなるんだ。

……まだ、決まつたわけではないけれど。オレの思い違いかも知れないし。そうと思いたいし。

「イズミ……中佐！」

「申し訳程度に中佐つてつけんなよ、もう。今日は部屋でおとなしくしていろよ」

廊下の窓からぼんやり外を見ていたオレを見かねたのか、どこかへ向かっていたはずのイズミが、あきれ顔で近付いてきた。彼が制服を着ていることはそんなに珍しいことではないけど、わざわざ見

せびらかしているかのよつだつた。

「イズミつて意地悪だけど、悪いヤツじゃないんだよな。そう思つけど。機嫌のいいときは、普通に面白いヤツだし。元の時代に戻つたら、絶対仕返しあえやう」

「イズミも忙しいのか？」

「いや？ 仕事探しに行つても、雑用押しつけられるだけだし。忙しい顔してるだけ。お貴族様達だけ、頑張つてればいいんだつて」

「ふうん。シユウジさんとか？」

「あの人、たまには仕事をした方がいいんだつて。やれば出来る人なんだから」

「だつたら、サワダもいた方が良くない？」

「まあ、出迎えるときだけいればいいんでない？ うちの看板だかんね、王子様とセットで」

一緒に窓から外を眺めながら、げらげらと笑つた。その言葉の意味を必死に考えていたけれど、ただの軽口であつて欲しいと願うばかりだ。

窓から見える中庭と、その先に広がる城壁。さらにその先には墓場が見える。

「墓、見てたの？」

「いや……そいつはわけじゃないけど……」

墓は、あまり好きじゃない。

『……お前のじゃないよ』

サワダはそう言つてくれても、『アイハラコウト』の墓があるのは事実だし。

『サワダ中佐と、同じ理由よ』

ティアスとサワダを繋ぐ場所なのかも知れないし。サワダが樂師をティアスと認識していなくても、ティアスはサワダに対しても思つてゐることだ。

彼らはあの場所でつながつてゐる。まあ、實際は中庭でしたけど？

「實際さ、どうなのさ、あの二人？」

「ああ、あの二人？」

オレもイズミも、忙しそうな軍人達が通過するだけの中庭を眺めていた。

「決定的な証拠が欲しいところだな」

「証拠？」

「あくまで、一人でこそこそ会つてただけつづーのは、いくらでも言い逃れできるしね」

「意味が判らん。何に対しても言ひ逃れるのか、会つてただけですむわけないだろ？がよ」

「でも、テツだしね。あいつのことだから、会つてただけつて言ってもわりと信用できちゃうし、何かあつたつて言われても、そりやそうだよな、ですかわけだし」

「なんじゃそりゃ。サワダなら、どっちもオッケーつてこと？イズミなら間違いないく、何かあつたつて言われるだろ？けど」

「こいつ、笑い飛ばした。普通にやつてそりだな、そつまつ」と。

「ミイラ取りがミイラについて言つてたのに。よくわかんねえよ、状況が。オレはそんなんじゃなくて、あの二人が出来てんのか出来て

ないのかだけが知りたいの…」

「お、ストレートに来たな」

ずっと笑つてら。楽しんでるだけの様にも見えるけど。いつかは照れくさいつーのに。

「本人に聞けば？」

「……本人つて、サワダ？ イズミが聞けよ」

「違うつて、彼女。ティアちゃん」

何でこいつでも、いつの間にそんな馴れ馴れしい呼び方になつてんだよ。

「オレが！？」

「他に誰が？ 確認できたら報告よろしく。彼女、さつきサワダ議員となにやら打ち合わせしてたけど、終えて部屋に戻ったの見てたから」

オレの肩を叩き、立ち去る。振り向いたら、彼はこちらを見ることがなく、手を振っていた。

彼の言葉に動かされたわけじゃないけど、オレはその足で彼女の部屋に向かった。

彼女の部屋の前で声を掛けてみたが、返事がなかつた。そのことに少しだけ、ほつとしてしまつた自分が嫌だつた。だけど、このままで終わらせるのも何だか悔しかつた。多分、イズミのせいだ。窓から再び中庭を臨む。さつきよりも全体が一望できた。普段よ

りずっと、人が慌ただしく動いていることがよく判る。

1階に下りて、案内板に従つて中庭に向かう。ここに来て随分経つけど、中庭に出るのは初めてだつた。昼は簡単に出られるけれど、夜は中庭に通じる出口に衛兵が立つていて、入れないことを知つていたから。あまり、出歩くのは得策じや無いというのは、オレ自身がよく判つていたことだから。

中庭に出ても、城の中と同様、オレのことなど構つてる暇など無いと言つた感じで皆通り過ぎていく。普段なら、オレの胸に光るバツジを見て、声を掛けてくるなり、訝しげな目をするなりするのに。人の流れに逆らいながら、昨夜、彼女たちの姿が見えた辺りに向かう。木陰にベンチがあつたり、広場になつていたりと、公園のようになつていて、上からは見えなかつたが、城内の人々の憩いの場になつてゐるような場所だつた。彼女たちは、ここに座つていたのかな？

「あら、コウト」

木陰にあるベンチの一つに座つていたのはティアスだつた。部屋にいないと思つたら、こんな所に……。昨夜もいたくせに。

人といふときは元気な顔をしているが、実際はまだケガが治つていなければずだ。だからかも知れない。うつすら汗の浮かぶ額を拭きながら、ややぐつたりとした表情で座つていた。

「昨夜のケガは大丈夫？」

「オレは、全然平氣だよ。ちょっと痛いけど、歩くのには困らないし。ティアスこそ……」

「私も、大丈夫よ。少しは動かないとね」

オレは昨夜、彼女を相当怒らせているはずなのに、彼女は笑顔を見せてくれる。何もなかつたかのように。彼女が優しいからだけで

はないとと思うオレは、やっぱり自惚れてるのかな。

黙つて彼女の隣に座つた。ちょうどサワダがしていたように。彼女は何も言わなかつた。

「そう言えば、来週来るはずだつた監査の人、今日来るんだつてね。こんなに城の中が慌ただしいの、初めて見たよ。スゴイ影響力だ」「そうね。でも、仕方ないわよ。それくらい中王の影響力は大きいのよ？」

ゆつくりと、彼女の視線が辺りを見渡しているのが判つた。頭は一切動かさずに、周りの様子を伺つているのが判る。判るのに、彼女の声は朗らかだつた。

彼女が辺りを見渡した理由を、もうオレは知つていた。ただ、どうしてそれを彼女が気にする必要があるのかは判らないけれど。だつて彼女は、中王側の人間なのに。どうして中王の監視を気にする必要があるのか。

「……もしかしてもしかするけど。慌ててきた人つて言つのは、君を心配してかな？」

「かもね。まいつたわ」

彼女は笑顔のまま溜息をついた。嬉しそうに。

「監査つて、何するの？こんなに大変なこと？」

「大したことじゃないわ。予算が適切に動いているかとか、不適切な施設が国に存在していないかとか、書類を4、50枚ほど記入して、チェックするだけよ？ああ、でもオワリは5万人越えてるから半期に一度の監査もあるのね。めんどくさそつ

「……5万人？！」

少くない？！いくら地殻変動があつたからつて、500年も経つてるはずなのに。

「5万人越えてたら大国なの？オワリつてどれくらい人がいるのさ？」

「えつと……たしか8万3千人で、中央を守るカントウに次いで2番目よ？」

「少ないって。だつて、名古屋市だけでも220万人越えてたはずなのに」

「それはユウトの時代ってこと？隨分、窮屈ね」

「いや、でも……そうでも……無かつたとは言わないけど」

「そう言えば、外をしつかり見たのつて、この城の付近と、最初にサワダに会つたN町の中心部だけなんだよな……。名古屋城もすっかり廃墟だし。ミナミさんも言つてたけど、實際はオレの知つてる風景なんか、ほとんど残つてないのかも知れない」

「人口が増えていかないんだから、そんな数なんてとうてい無理ね」「増えていかない？」

「だつて、増える数より減る数の方が多いんだもの。仕方ないわね。いくら墓を作つても追いつかない。いつか墓だらけになるかもね」

墓を掘つてる張本人が、自嘲氣味に笑つた。何も言いたくなかつた。

どうせ、ティアスもサワダも、その墓だらけの世界に自分の墓を掘るとか言い出すんだ。

「監査つて、何のためにするんだよ？」

「さあ？主のお考えになることだから。中王は、神様と一緒になのよ？彼が黒と言えば、白いものも黒くなるの」

「ふうん」

「あは、ハウトってばすぐ顔に出るのね」

彼女の笑い声に、思わず顔を伏せてしまった。恥ずかしくて。そんなにすぐに顔に出るかな、オレって。

「何のためかしらね。表向きは各国の経済バランスを正確に知ることであつたりとか、国の正しい発展のために必要な資料であつたりとか、いろいろそれらしい理由はあるけど、そんなことはどうでもいいのよ」

オレの知ってるティアスも、気が強くて、喧嘩腰のような話し方になるときがあった。大概それは、サワダに対するときによく見られたけど。

だけど、今のティアスは、喧嘩腰と言つよりは、ただただ悪意に満ちていた。

「本当の理由は？」

「抑制のため」

「……何を？」

「この世界の成長。言つたでしょ？ いつか墓だらけになるかもねって。墓だらけになる前に、この星自体が墓になっちゃうかもね。そうしたら、墓を掘らなくてすむのかもね。私も、あの人も」

新緑の広場を、軍人達がせわしなく行き来する。だけど、隣に座る彼女は、遠い目をして、彼を思っていた。全ての風景が目に入っていないかのような顔で。

「……サワダのこと……」

「え？」

「案外、好きなんだつたりして」

あくまで笑顔で、何でもないような顔で聞いたつもりだった。変な汗が背中を伝っていたのが判つたけど、妙に顔と頭が熱くなつていくのが判つたけど、必死で笑顔だけ作つていた。

「それはないよ。もしかして、それを聞きたくて、やたら中佐のことを聞いてたの？」

彼女の笑顔は落ち着いたものだつた。その余裕のある姿に、オレは思わず溜息をついてしまつた。

「どうしたのよ、コウト？」

「いや、そつか。だつて、一人ともケガしてるのに、いそいそ一人で会つたりしてるから」

「え？まさか。昨夜のことは違つて言つたのに」

むつとした顔でオレを見ていたけれど、彼女は怒つているように見えなかつた。

「いや、あの後、二人でここにいなかつた？」

「ううん？見間違ひじゃない？」

彼女が言つならそらのかと、オレは納得したかつた。

昨夜、ティアスとサワダがここにいたときは、もつと彼らの距離が近かつたはずなのに。今の彼女には、その周りに人を寄せ付けな

いような、触れるのを憚られるような、そんな雰囲気をまとっていた。

もう少しだけ近付きたかった。

ただただ、当たり障りのない世間話を続けていても、彼女には近付けない。だけど、さつき少しだけ見ることが出来た、彼女の本音に近い部分を、彼女はもうだしてはくれなかつた。

「……サワダ中佐」

『お使い』から戻つてきたらしいサワダが、黙つて彼女の横に立つていた。根暗のくせに、妙な存在感のある男だ。

彼女にもつと近付きたかったのに。どうしてこのタイミングで帰つてくるかな？この男は。

「お使いって聞いたけど？終わったのか？」

「ああ。まあ」

口の端を少しだけ上げて、微笑んだ。いや、微笑もうとしただけかも知れない。そのぎこちない動作が妙に儂げで、オレは喧嘩腰だった口調を反省した。

「あの、横……」「うん」

充分すぎるくらい空いていた彼女のもう片方の隣に、サワダは勧められるまま座つた。体を動かして場所をずれたはずの彼女は、再び体を動かして彼の方へ身を寄せた。彼もまた、少しだけ彼女の方へ身を寄せる。彼の左手が、彼女の腰に触れる程度に。

いや、これでできないつて言われても、全く信用ならないんですけど？！一体何があつたんだ、この二人！

「二人でなに話してたんだ？」

「世間話よ？みんな忙しそうねって。ねえ、コウト？」

オレもまた、黙つて頷く。彼女の悪意は、サワダに知らせるなつてことか？オレには教えてくれたのに。

オレの顔には多分、出ていたのだろう。この優位に立てた心が。サワダが苦笑いをしていた。

「随分、軽装で出かけたのね？どこへお使い？」

「ああ、学校のある方だけ。あんな所に制服で行つたら、町の人にはビビられますけど？」

「そうね。行つたことはないけど、穏やかなところみたいね」

「そうだな。監査もあそこまで細かくは見ないし。町並みをずっと残し続けてる……」

サワダの目が、彼女を警戒していた。だけど、彼の口振りに敵意は感じられなかつた。

だけど、彼が彼女を疑つているのは確かだつた。彼女はそれに気付いているのか？それに、彼はどの程度、彼女を疑つているのか？

「こんな所にいないで、休んでれば？」

彼は彼女の顔を見ずに、彼女を気遣つた。彼女は驚いたような顔を一瞬だけ見せたが、すぐに微笑んで見せた。

「大丈夫よ。お気遣い無く。あなたこそ」

「別に。オレは大したこと無いけど。あんたは酷かつたろ？が。心配してるヤツもいるだろ？」

「そうね。ここでは1人だけど」

「気遣つてゐるかと思つたけど、そりゃない。探り合つてゐるんだ。暑くないのに、変な汗が流れてくる。彼らの会話に入つていけない。サワダは、もしかしたら思つた以上にいろんなことを知つているのかもしない。イズミ同様に。

「そろそろ、戻らないといけないんじゃない? その格好では出迎えられないでしよう?」

「そうだな」

「私も、少し休んでるわ。あなたのお父上に、中央からの使者を一緒に出迎えるよう言わわれているから、準備もしないとね」

彼女は立ち上がり、オレとサワダを交互に見つめ、挨拶をして通用口に向かう。サワダはそれを追いかけたかったのも知れない。軽く腰を浮かせ、彼女の方へ体を動かしたが、オレの存在を確認して再び座った。

「行けば? サワダも準備があるんだろう?」

「いや……まだ、時間、あるから……」

さすがに、嫌味だつたかも知れない。何とも言えない、困ったような表情で、オレから目を逸らした。彼は立つに立てなくなつてしまつたわけだ。

「お使ひつて、もしかして、『先生』?」

「ああ。サラさんが心配だしな。連れてきた

「ミナミさんつて、まだ医務室?」

「いや、自宅に戻つてるよ。先生はシンに連れて行つてもいらっしゃる」

「ほんに住んでるんじゃないんだ」

「まさか。オレやシユウジは私室をもらつてゐるから、ほとんどの

に住んでるようなもんだけど、一応、家があるし。あまり帰らないだけで。シンとサラさんは元々町に住んでたんだけど、こっちの宿舎に住んでる

「そうか、サワダやショウジさんは、こんななんだけど一応、お貴族さま扱いだもんな。

「わざわざサワダが迎えに行くんだな」

「まあ、オレもちょっと用事があつたし。ついでだよ。ここにいても、仕事押しつけられるだけだし。しかしそれにしたって……ちょっと慌ただしそぎるかな？」

「体」と辺りを見渡す。その動きにつられて、オレも同じく周りを見渡す。

「予定より一人だけ先に来るつづたつて、年末の監査でもないのに、大げさな」

「ああ、その年末の監査つてヤツが、なんかエライ人が来るつてヤツ?」

「そうだな。あの、中央の楽師……」

その単語に思わず反応してしまったが、必死でサワダから目を逸らした。でも、もうサワダは明らかにティアスを疑ってる。オレがここに必死に誤魔化しても無駄かも知れないけど。

「楽師がどうかした?」

「いや、去年の年末の監査のときには来てたよ。他の人に任せて、半日で戻つたけど」

「なんだ」

何だ、そんな話か。

「サワダ中佐…こちらにいらっしゃいましたか。探しました。サワダ議員も殿下もお探ししていたようですが」

サワダの横に立ち、敬礼をしながら声を掛けってきた男性は、見たことのない顔だったが、階級章は大尉だった。25・6歳つて所だ。サワダに対しても媚びるような態度の無い人は、ここでは逆に珍しかった。

彼は大尉の言葉を受け、慌ててベルトループにつけていた携帯を確認する。どうやらかなり着信履歴が残っていたらしく、あからさまに「しまった」と言つた顔を見せた。

「今日は監査が来るだけでは無いのですか？」

「ええ。そうなんですが。実は眞[ジ]ん、カントウの姫君がいらっしゃるという連絡がありまして……」

「……タイミング悪いな、あの女は」

「カントウの姫君」という言葉を聞いて、サワダは嫌な顔をした。

「何か？中佐？」

「いえいえ。何も。わざわざありがとうございます。すぐに戻りますので」

笑顔で敬礼をし、大尉を労つた。大尉が立ち去るのを見送り、サワダも立ち上がった。

「カントウの姫君って？」

通用口へ向かうサワダを追いかけながら、話しかけた。イズミな

ら嫌がつて話してくれないだろつたゞ、サワダはきちんと応えてくれた。

「ミハヤの追っかけだよ。カリンって言つんだけど。気が強くて、男勝りで、やたら頭の切れる女だ。鋭いつづか」

「呼び捨てなんだ。お姫様だろ？」

「まあ、幼馴染みみたいなもんだからな。オレは苦手なんだけど。お前も気をつけるよ。余計なこと言つた。特にカリンの前では」

「……やつする」

サワダが言つならよつぱりなんだつた。でも、どんな人だろ。

どうやら、監査にやつてくるサエキ大尉の影響も大きいけれど、それと同じくらいにカントウの姫君、「カリン」の影響も大きいようだった。神社から様子を見に来たイツキ中尉が、廊下の壁にもたれながら、せわしなく動く人たちについて解説をしてくれた。「手伝うつもりは全くないけれどね」と言いながら。

彼女の話によると、軍部は監査の対応に追われ、元老院含む議員と文官はVIPの対応に追われるモノらしい。しかし、どちらも国を挙げて受け入れないといけないから、そこで、軍部と元老院側の力関係が……と、またしても鬱陶しい政治の話をされてしまうところだったので、オレは途中で話を遮り、そう言つもんだと納得することにした。

話が重くなる度、自分の心も何だか重くなるような、そんな気分だった。

「それよりさ、サワダがお姫様の前では『余計なこと言つた』とか、『気をつける』とか言ってたけど、どんな人なの？」

「そうね。全くその通りよね。あの人もね。気が強いって言つた、強引つて言つた」

「ミハマの追っかけだって言つてた」

「ええ、そうね」

うわ、顔色変わった。意外と判りやすいな、イツキ中尉つて。まあ、相手がミハマなら判らないでもないけど。でも、どれくらいか

な。臣下としてとか？仲間としてとか？

「……オレは、どうしてたらいいのかな？」

「一緒にご飯でも食べましょうか？そうだ、サラさんちに行きましょ」

「ひ」

「あれ？イツキ中尉は……」

「私は待機してるわ、もちろん、護衛部隊としてね。でもサラさんも、こっちの様子が気になつてるとと思うし。あのお姫様が来たなんて知つたら、心配でこっちに来ちゃうかも」

「そんなに……？」

どんな女が来るんだ。怖すぎるよ。

「……あら、タイミングの悪い女ね。もう来ちゃつたみたい」

イツキ中尉も充分怖いって。タイミングの悪いって……。

廊下を移動する文官達の動きが、さらに慌ただしくなつていた。
「いらっしゃった」「殿下を」という声が聞こえる。

「ど」「行くの？」

「殿下の所よ？待機することをお伝えしないとね」

颯爽と歩く彼女の後ろに、申し訳なくついていくオレ。かなり情けない姿かも。

窓の外を見ると、日差しが少しだけ落ちていたのが判る。感覚がおかしくなりそうだけれど、もう夕方だ。

「そう言えば、サワダ議員に言われて、ティアスも監査の人と一緒に挨拶するって言つてた。でもあの人は元老院だから、お姫様の方に氣を使わないといけないんじゃないの？」

「そうよね。そんなこと言つてたんだ。ティアス？」

歩きながら横田でオレの顔を確認していたので、黙つて頷いて見せた。

「あの人、ここでもちよつと特別なのよね。元老院の中でも影響力の大きい人だし、何より王の妹婿だし、それに、軍部にも影響力があるのよ」

「軍部に？」

「私たちは生まれる前だから、シユウジさんから聞いた話でしかないけど。元々、あの人ガ王の妹婿としてここにきたときは、軍部の人だつたんですって。まだ二十歳になつたばかり位の時期に、今の特殊部隊の基礎をつくつて、教官としてそこに所属していたらしいのよ」

「そんな話……」

「今は、おぐびにも出さないわ。本当に最初の何年かだけだつたんですね。死別されてしまふらしくしたら、テツちゃん連れて中央にいたらしいし。誰も彼に逆らわないし、王のお気に入りだし、本当のことは誰も口にしないのよね」

なるほど。当時のことと明確に記憶している人は、派閥に入つてゐるか、影響の小さいところに飛ばされてるかつて所か。オレの知つてる沢田のお父さんつて、そんな風には見えなかつたけどな。

ただ、じつちのサワダとサワダ父の関係を見る限りは、もう何があつてもおかしくないんだろうなとも思えた。

「それつてさ、思つただけど。シユウジさん、やばくない？」

「やばいわよ？だからなのか、本氣なのかよく判らないけど、シユウジさんに関しては、サワダ議員が自ら引き抜きに來てるけど。中央の研究開発部からも來てたかな？」

それは確か、「樂師」から聞いた。ティアスのシユウジさんへの評価が異常に高かったことに、妙な違和感を覚えていた。

「ユノ。殿下の元へ向かつてゐるの？」

後ろめたさから思わず話を中断してしまったが、声をかけてきたのはティアスだった。イツキ中尉がすごいのか、ティアスがすごいのか、年が近いことも手伝つてか、二人は結構仲が良かつた。でも、ミハマのことが絡んだら、どうなんだろうな、イツキ中尉つて。

「ええ。ケガ、大丈夫？ 隨分辛そうだけど？」

オレと話をしていたときも、少し汗を搔いているなど言つぐらいで普通に見えた。だけど、彼女はティアスに「辛そうだ」と言つ。もしかしたらあの時サワダにも、そう見えていたのかも知れない。

「……歩く分には」

「テツちゃんが、ティアスは焦つてゐるって言つてた」

彼女の前では、そんなこと言つてなかつたのに。焦つてる？ ティアスが？

「早く治そうとして、動き回るから。心配してた。あの人、言わな
いけどね」

「……お互い様だわ」

「殿下には、そんな風に言わないくせに」

照れたように、彼女はイツキ中尉から目を逸らした。その様が余計にオレの不安を膨らませる。イツキ中尉の余裕も、彼女の動揺も。

「サワダ議員の所に行くんでしょう？」

言葉に詰まっていたティアスを見かねて、イツキ中尉は話を変えた。彼女もそれに甘えるように、照れた表情のまま頷いた。

「ユノは待機？何か、カントウの姫君がいらっしゃるから、その人にも一緒に、つて言われるんだけど」

「……知ってる？カリン姫のこと」

少し間があった。その間を、イツキ中尉がどう捉えたかは判らない。

「拝見したことは」

「どんなお話ししたか、よかつたら教えて。気をつけて歩いてね。またケガを酷くしないように。行きましょ、アイハラさん」

可愛く手を振つて、ティアスから距離をとりながら再び歩き出すイツキ中尉に、またオレは必死でついていく。ちらちらと彼女の様子を伺いながら。

「酷くつて？」

オレは知らない。

「あの人、昨日アイハラさん達を助けに行つたでしょ？」

「うん。もしかして、その時？」

「その時は、テッちゃんがフォローに入つたから大丈夫だったみたいだけど、以前はケガを酷くして医者に怒られてたよ？」

「昨日以外でも、ああやつて抜け出してたってこと？」

「みたいね。彼女の行動は、サワダ議員の管理下だから、私たちにはどうしようもないし、彼女の自由だとは思つけど。殿下が心配されるのよね」

知らなかつた。だつて、一イジマがあんなにオレに彼女との連絡係をさせようとしてたつてことは、よっぽど動けないのかと思つてたから。ケガは治つていたように見えたけど、それも違つてたつてことだし。

「ねえ、何だか面倒だと思わない？」

「何が？」

「だつて、アイハラさんだつて、判つてるんじょ？ 彼女のこと。私、じうじうのつて、どうかと思つなあ」

イツキ中尉の真意を、オレは測りかねた。

02

彼女はその後、ティアスのことに触れなかつた。もしかしたら、ティアスのことを疑つてるとか、疑つてないとか、もうそんな話じやないのかも知れない。

王宮内にあるミハマの（要するに王太子専用の）密間に、中にいるミハマの許可を得て、彼女の後について入る。王太子専用室だけでも、寝室を含めておそらく10以上あるはずだ。多すぎるだろうと思つてたけど、この王宮の広さと、国の人口を考えたら、そんなモノなのかもしない。

……いや、根本的に何か違うな。感覚がおかしくなりそうだ。

「あれ？ テツちゃんもショウジさんもいるかと思つたのに……」

一緒にいるかと思つたサワダもショウジさんも部屋にはおりず、ミハマが1人でいた。王子様1人にしておいて、何してるんだか。ここは彼が持ついくつかの客間の一つだが、オレが知る限り、どの部屋もほぼ同じ構造だつた。20畳ほどの広さの洋間の真ん中にはやたら高そうな革張りのソファセツト、アンティーク調の足の低いテーブルに、毛足の長い明るいベージュの絨毯が敷き詰められた。調度品はほとんど無く、唯一部屋の奥に当たる、開放的な窓際にはテーブルと同じティエストのデスクが備え付けられており、そこにも揃いのようになにかと書かれた紙が置かれていた。デスクの上も綺麗なもので、凝った彫刻の施された淡い光を放つランプが一つあるだけだった。彼の持つ他の私室とは違い、一切手をかけられていないと言つか、こだわりとか、生活感を全く感じなかつた。

彼は随分待つていたのか、奥のデスクには空になつたグラスが2つ並んでいた。

「ショウジはもうすぐ戻つてくるつて言つ連絡があつたんだけど、テツは王宮に着いたつて言つ連絡があつて以来、連絡とれないや。多分、王宮内にいるつてことは、別の所で捕まつてるんじゃないのかな？」

「サワダ議員が、ティアスを連れて中央の監査の方に挨拶ですつて」

彼女の口振りには、もちろん悪意が籠もつていた。

「そつ。なら、きっとカリンの元にもつれしていくだろうね。もう来てるらしいし。もしかしたらテツもテツキさんに捕まつたかな」

「カリン姫はおそれくこちらにいらっしゃいますから、私、待機します。シコウジさんももうしばらくしたら戻つていらっしゃるのでしょうか？裏に回っていますから」

「いや、良いよ。一人でここにいてくれれば。監査の人はともかく、カリンはオレの周りにいる人のことは、十分承知してるから」

「はい」

ミハマの言葉に、イツキ中尉は満面の笑みを見せた。ミハマがこういうことを言つのはいつものことなのに、彼女は特別なことのように喜んでいた。

「アイハラは……」

「殿下がカリン姫と会食中、一緒にサラさんの様子を見に行こうと思つて」

「そう。オレもそつちに行きたいな。頼むよ」

「はい」

彼女は彼の中の「カリン姫」と「護衛部隊及び自分」のバランスを見て、喜んでいたんだ。普段なら、そんなこと当たり前のように自分たちに比重を置かれていることを知つていて、何でこんなに喜ぶんだろう。もしかしたらカリン姫って、ミハマにとつて結構重要な人物なのかもしれない。だからこそ、彼女はこんなに喜ぶのかな。

「ミハマ、良いですか？謁見の間に行きますよ」

制服の襟元が乱れた状態で、よれよれの髪型のままのシコウジさんが、大慌てで部屋に入ってきた。乱れてるのはいつものことだけど、慌てるのはなかなか見ないな。

「なんだよ。カリン？ 何で王の前で？」

「別にカリン姫はあれですけど、サワダ議員がティアスとテツを連れて、王の前でお話しされてるんで。これ以上、妙な噂が広がらないうちに、行きますよ」

「連絡とれないと思つたら。やうせとけばいいよ、もう。めんどくさいし」

「まあ、あなたならそつとと思つたんですけど、そつとわけにもいかないの。行きますよ。コノ、後を頼みます。シンには連絡してあるので」

彼女は黙つて頷き、引っ張られていくハマを見送った。

「サラさんちに行くのは、なしね。仕事が出来たみたい」

彼女はデスクにあつた2つのグラスを持つて、奥にある扉から給湯室に入った。これも他の客室と同じ作りだった。

「オレ、何か手伝おうか？」

「大丈夫よ？ ありがとう。でも、良かつたら部屋で待機してて」

「邪魔しないって。黙つてるから」

「……でも、相手はあのカリン姫だから」

だから、それは一体どんな女だ！

彼女がグラス拭いて、食器棚に仕舞つたのを見届けて、彼女の後について給湯室を出る。

「中央の楽師殿」

「何だ、なんだなんだ。サワダもイツキ中尉も、何のつもりだ？！ その名前を出したらオレが動搖するとでも！？」

「……が、どうかした？」

「彼女にも、あなたは疑われたんでしょう？ カリン姫の眼光は、きつと彼女より鋭いわよ？」

人の悪い笑みを浮かべてから、彼女は客間の扉に手をかけた。てっきり、様子を伺われているのかと思った。もう、ホントにどう動いて良いか判らないって。

「……あ」

扉を開けて、いやなものでも見たように彼女は表情を歪ませた。扉の外に立っていたのは、この城内では見たことのない女性だった。服装も、その存在感も。パンツスーツで出歩く女性って、この城内にはいないしな。

「イツキ中尉、どこかへお出かけ？ ミハマは？」

「先ほど、姫君のお話を……入れ替わりだつたようですね。謁見の間に向かつてますわ」

これが噂のカリン姫？！ 美人じゃん！ 好みじゃないけど、すらつと背の高い、モデル体型に、アジアンビューティって言葉の似合う端整な顔立ち。可愛いイツキ中尉も良いけど、クールなカリン姫も、まま良いよ！ でも、モデル系って話なら、クールビューティ系のミナミさんか？

「そちらは？……」この部屋にいるには随分、階級が……

「殿下の元で見習いとして身の回りのことをしております、アイハラユウトです。客人扱いでして……」

イツキ中尉の目配せを受け、敬礼して簡単に名乗る。しかし、はつきりものをいう人だな、この人。美人だけど、性格きつそうな顔してるし、サワダが言った「強引」って言葉も、あながちウソじやなかつたりして。

「へえ。そんな話は初耳だな」

「……最近ですの。2ヶ月くらいですから。先日の中核での報告会の際も殿下に同行して中央まで。カリン姫はいらっしゃらなかつたのですか？」

「父が向かつっていたのだが、私は一日田からしかいけなくて。オワリに魔物が出て、急いで帰つたという話しか聞けなかつたよ」

入れ違いになつたつてわけだ。図々しくも、呼ばれてもいのないのに、しかも国王を置き去りにしてミハマを追いかけてくるくらいだからなり会いたかつたんだろうな。それが、イツキ中尉には不愉快なわけだ。

ティアスにはここまで敵意は見せないくせに……おかしな話だ。ミハマは彼女を好きなんだから、彼女のことを気にした方がいいと思つけど。もしかして、イツキ中尉もサワダとティアスが怪しいこと、知つてゐてことかな。だから、彼女を氣にしてないつてことか？

「そう言えば、アイハラ殿は、南の方からいらっしゃったのですか？」

「え……えーと」

いや、この辺の出身なんですけど……。なんで？思わずどもつてしまつた。その間に、イツキ中尉が割つて入つてくれた。

「いえ、その……各地を転々としてまして。ねえ？」

黙つて頷く。出身を疑われるつて、どんな状況だよ？

「まあ、ミハヤのことだから、どんな子が側にいても不思議ではな
いけれど……その子は、ちょっと違うかな？彼が懐に入れると考
えにくい」

「いくらカリン姫でも、それは過ぎませんか？」

「失礼。入れ違つたのなら戻りますよ。そんな番犬のように吠えな
くても」

イツキ中尉も、立ち去る彼女のあとは追わなかつた。これ以上関
わりたくないがつた、と言つのがホントの所だらう。

「何で、南？」

「アイハラさんが、この国の人じゃないでしょ？？？ことよ。な
んて言つたかしら。この間シユウジさんがあの人のあの妙な力のこ
と、何とか言つてたのよね。ホント、めんどくさい女。アイハラさ
ん、私は謁見の間の裏に回つてますから、ちゃんと自室で待機して
いてくださいね？」

オレは黙つて頷いたが、言つとおりにあるつもりは全くなかつた。

イツキ中尉を見送つた後、一旦部屋に戻るつと思つてエレベータ
ーで5階へ下りた。そこはびっくりするほど、一氣に人がいなくな
つていた。あんなにばたばたしていたのに、廊下は静かなもんだっ
た。確かに、このフロアは客人用に用意されているらしいので、通
行するだけなのだろうが。

部屋で、以前借りた軍服に着替え、エレベーターに向かつ。

最上階に行くには、エレベーターに暗証番号を入れないといけないけれど、それも実は知っている。将官クラスの軍人とたまたま乗り合わせたときに、こいつぞり盗み見といた。このバッジの効力のすごさも思い知つた。

知つてることをあいつらに黙つて正解だったのかも。もしかしたらイツキ中尉も、あんなにあつさりオレを置いていかなかつたかもしれないし。

壁を作られているのも知つてゐる。彼らの中に入つていけない、入らせてもられないのも知つてゐる。だけど何も知らないまま、ここまでいたいとも思わない。

「ここ」でこのまま、戻る「こと」の出来ないまま、ただ無為に時間を過ごしていくのは嫌だつた。

特に、こそそしてゐあの一人を、微妙な距離感を持つてゐるティアスを、見てゐるのは辛い。

最上階はフロア全てを使つたような広い廊下が広がり（しかもレッドカーペット）、その先には唯一謁見の間がある。エレベーターの出口に守護の兵が立つていたが、オレのバッジを見たら簡単に通してくれた。そもそも、許可がなければ、ある程度許されているものでなければ、この階までは入れないのでから、つてことだらう。しかし、ここまで来たのは良いけれど、どうしたものか。

謁見の間には扉一枚。その前には同じく門番のように兵が立つてゐる。廊下には誰もいない。どこから中が覗けないものかと思つてたけど、難しそうだな。

でも、イツキ中尉もこの部屋の裏に回るつて言つてたし、どこかあるんじやないかと思つたんだけど……。

とりあえず長い廊下を歩いて、少しずつ扉に近づいていくことに

した。扉の前に立っていた人に咎められるかと思つたけれど、ちょうど窓際から軍人が現れ、敬礼をして交代していった。

交代は良いけど……どこから現れたんだ？壁しかないのに。

どうやら隠し扉があるらしく、交代した軍人が壁の一部を扉のようにして開け、中に入つていった。オレもその後をおつて、窓際の壁に向かう。もちろん、扉の前に立つ軍人にはきちんと敬礼をして何もないかのように壁紙を貼られているのに、よく見るとうつすらと溝があつた。頻繁に使われているからなのか、最近作られたからかは知らないけれど、壁紙は真新しかつた。ほとんど違和感はなかつたけれど、よく見ないと、知らないと判らなかつた。

先に入つた軍人に倣つて、溝の部分に触ると、奥の方に押すことが出来た。どうやらこの部分がノブになつてゐるらしい。開けにくくて一回失敗してしまつたけど、何とか2回目には開けることが出来、先に続く梯子段を登り、前に進む。梯子段とはいえ、作りはしつかりしていた上に絨毯が敷いてあり、足音は響くことなく静かだつた。

暗くて狭いけど、どこに行くんだろう。隣は謁見の間のはずだよなあ。声も聞こえないし。

しばらく登つていたら、暗くてよく判らなかつたけれど踊り場が現れた。ここにもご丁寧に絨毯が敷いてあつた。左手の、謁見の間があるはずの壁側から、微かに光が漏れていた。近付いてみると、そこからあちら側が覗けるスリットが空いていた。

もしかしてこいつら側つて、軍が王様を守るために用意した隠し部屋つてことか？（部屋つて言つには狭すぎるけど）軍服着てきて良かった……。バッジつけて、軍服着てなかつたら、多分、入るときに止められてたかも。

スリットから向こう側を覗くと、まだ赤い絨毯が続いていた。扉も見えるけれど、奥と、入つてきた側にそれぞれ一つずつ。どうやら、謁見の間はさらに先らしい。暗かつたので気付かなかつたが、

ここにも一人、軍人が立つており、見張っていた。敬礼をしてそそくさと先に向かうことにした。

梯子段を登りきると、急に眩しくなり思わず目を閉じた。梯子段と同様、絨毯の敷き詰めてあるフロアは、やはり狭かつた。だけど、全面ガラスになつてゐる壁を一枚挟んで、その先には謁見の間が広がつていた。ちょうどロフトから見下ろすような形だつた。

奥に玉座が見え、そこにミハマのお父さんであるオワリ王が座つていた。その前にミハマとサワダ父が並んで立ち、サワダ父の横にティアスとサワダがいた。ミハマの横にはショウジさんが立つていた。

室にはカリン姫も見える。距離は離れ、謁見の間の中心にいたけれど、彼女は真つ直ぐにミハマを見ていた。

謁見の間と言うから、もつと狭いかと思つたけど、バスケットボールが3つくらい入りそうな程度には広かつた。今いる監視部屋と同じ高さには、オペラを見るためのホールのような、階段状の座席や、個室も見えたし、そこから下に降りられる、レッドカーペットを敷き詰めた広い階段もあつた。

入口も、監視部屋側にあつたものとは別に、豪華に飾り付けられたものが玉座の右手側にあつた。客人用のエントランスからつながつているのは、こちらの扉のようだつた。

それにしても……このガラス、向こうからも丸見えなんじやないのか？ここにも見張りの人人が立つてゐるけど、大丈夫？

「こら。何してんだお前は。いつの間に忍び込んだ？」

「うわ！でた！やつぱり出た！」

オレの首根っこを引摑んでいたのは、案の定イズミだつた。

一応周りを見渡したはずなのに、一体どこに潜んでいたんだ、コイツは。

「姿を見なかつたから、少しだけ安心してたのに……」

「ずっとお前らの側にいたけどね。ミハマの客室にいたときとか」

もしかして、あの時グラスが一つあつたのって……！？怖い、怖すぎる。忍者がコイツはーでも、イツキ中尉やミハマの態度から察するに、いつものことなんだろうな……。「いつもの」とで、ホントにすんでしまってどうなコイツが怖い。

「まあいいか。あんまり騒ぐなよ？今日はカリン姫がいらっしゃる

イズミが下を指さす。よく見たら壁際には親衛隊のキヅ大佐と力グラ、王の親衛隊も2名、それから元老院派のソノダ中佐、さらに見たことのない軍服を着た人が一人立っていた。多分、カリン姫について来たカントウの軍人なんだろう。実戦には向かなさそうな、真っ白な軍服だった。お出かけ用か？

「どうやつてここに来たか、聞かないんだ」

「めんどくせえし。聞いても仕方ないし」

「いつも五月蠅いくせに」

「オレの業務と、あいつらに害がなければ、どっちでも良いんだよ、本当は。だって、ここに来たのは、お前の意志なのに。オレには関係ないし」

下を見たまま、オレの首から手を離した。気のせいいか、やっぱりイズミの態度は随分柔らかくなっているような気がした。

まあ、以前もそう思い違つてしまつて、トライ田に遭つてゐるんだけど。

「イツキ中尉には、自室で待つてろって言われたけど

「それは、コノちゃんの意見だ。あの子、優しいからや」

「それって、オレがここに来ると、オレに何かあるみたいな言い方なんですか。怖いな、ホントに。」

「……このガラス、大丈夫なのか？」

「ああ。向こうからはただの壁にしか見えないわ。こっち側は明らかに作りがみすぼらしいのに、見せられるわけないし？」

いや、けつこうちゃんとしますけどね。どういう構造なのか知らないけど、マジックミラーのようなものだろうか。何か、怪物以外で、やつと未来っぽいものに遭遇したな。

「これ、中央とオワリしか使ってない、特殊技術。オレが確認した限りでは」

「……確認つて？！オワリつて特別待遇つてこと？」

「違う違う。中央もオワリも、別々に開発してる。もちろん、報告は出来ないし。ただ、オレがいろんな国の裏側を見た限り、これに類似した技術は見あたらないね」

「隠密か！？お前は！」

「今さら何を」

そこには突っ込み返してくれよ……。お前の技術の方が恐ろしいよ、オレは。

「ただ、ちょっと静かにしてろよ？カリン姫は手強いから」「何だよ、向こうの声も聞こえないのに、こっちの声が……」

「向こうの声は、あつちにヘッドホンがあるから、そこから聞ける。こっちの声は確かに聞こえない程度の厚みはあるけど、相手はあのお姫様だしね」

「どんな超人なんだよ。聞こえるのか？あの人には」

「聞こえてるかもね。足音とか、歩き方とかで、どんな人か大体判断しちゃうような人だし。アイハラなんか、軍人じゃないことビックリか、やたら寒がりつてここまでばれる気がする」

それで南の方とか言つてたのか？つーか、寒がりじゃないっての。この世界が寒すぎるの、オレがいた時代に比べて。

でも、イズミの言うとおりだ。しつかりばれてるよ。一体何者なんだよ、あの人。お姫様なのか？

イズミはオレを置いて、ヘッドフォンが設置してある個室に向かつたので、それについていった。不思議と、彼は文句も言わず、オレを自由にさせてくれた。

何か、イズミとの力加減つて良く判らないと言うか、難しいんだけど……判らないなりに、何となくだけど、機嫌のいいときは判るようになってきた。

今日のイズミは、決して機嫌は良くないだろう。なんと言つてもミナミさんがいない。あの人ガ側にいるときといないときでは、コイツの機嫌は驚くほど違う。

だけどそんな状況でも、オレがする行動一つで、機嫌が良くなることもある。

不思議だけど、オレが「こうしたい」って言つて動くと、イズミは驚くほどあっさりと受け入れてくれる。でも、同じようにオレが意志を見せて動いていても、イズミのカコンに触ることもある。そこにはなにか、彼なりの明確な基準があるように最近は思ってきた。

個室の中からも、謁見の間を見下ろすことが出来た。まるでミキサー室のようなその部屋には、王の親衛隊らしき軍人が一人、ヘッドフォンを耳に当て座っていた。

「緊急事態があつたら、あの人警報を鳴らす」と、珍しくイズミが自分から教えてくれた。

イズミに倣つて、何に使うか判らない、たくさんのスイッチがついた機材の上に放置してあつた5個のヘッドフォンから適当に一つ選び、耳に当てると、カリン姫の声が聞こえてきた。見下ろしていふ人から、顔が見えないのに声が聞こえるのは、何とも不思議な感覚だった。

「イズミ、あれは誰？いま入ってきた人。元老院の人みたいだけど」

サワダ父と同じ制服を着た、初老の人物が監視部屋側の入口から入ってきた。サワダ父には親しげに声をかけ、王やカリン姫には跪いてみせるが、ミハマには目もくれない。

逆に、カリン姫は相手にもしていよいよ見えたけど……。

「元老院のナカタ議員。名前くらいは聞いたことがあるだろ？まあ、オレ達のような下つ端じや、お会いすることもないしな」

ちらりと、同じ部屋にいる親衛隊員の目を気にしながら、イズミは嫌味っぽくそつ言つた。

03

イツキ中尉を見送った後、一旦部屋に戻るうと思ってエレベーターで5階へ下りた。そこはびっくりするほど、一氣に人がいなくなつていた。あんなにばたばたしていたのに、廊下は静かなもんだつた。確かに、このフロアは客人用に用意されているらしいので、通行するだけなのだろうが。

部屋で、以前借りた軍服に着替え、エレベーターに向かう。

最上階に行くには、エレベーターに暗証番号を入れないといけな

いけれど、それも実は知っている。将官クラスの軍人とたまたま乗り合わせたときに、こつそり盗み見といた。このバッジの効力のすごさも思い知った。

知つてることをあいつらに黙つて正解だったのかも。もしかしたらイツキ中尉も、あんなにあつさりオレを置いていかなかつたかもしれないし。

壁を作られているのも知つてゐる。彼らの中に入つていけない、入らせてもらえないのも知つてゐる。だけど何も知らないまま、このままでいたいとも思わない。

ここでのまま、戻ることの出来ないまま、ただ無為に時間を過ごしていくのは嫌だつた。

特に、こそそしてゐの二人を、微妙な距離感を持つてゐるティアスを、見てゐるのは辛い。

最上階はフロア全てを使つたような広い廊下が広がり（しかもレッドカーペット）、その先には唯一謁見の間がある。エレベーターの出口に守護の兵が立つていたが、オレのバッジを見たら簡単に通してくれた。そもそも、許可がなければ、ある程度許されているものでなければ、この階までは入れないのでから、つてことだらう。

しかし、ここまで来たのは良いけれど、どうしたものか。

謁見の間には扉一枚。その前には同じく門番のように兵が立つてゐる。廊下には誰もいない。どこから中が覗けないものかと思つてたけど、難しそうだな。

でも、イツキ中尉もこの部屋の裏に回るつて言つてたし、どこかあるんじやないかと思つたんだけど……。

とりあえず長い廊下を歩いて、少しずつ扉に近づいていくことにした。扉の前に立つていた人に咎められるかと思つたけれど、ちょうど窓際から軍人が現れ、敬礼をして交代していった。

交代は良いけど……どこから現れたんだ？ 壁しかないのに。

どうやら隠し扉があるらしく、交代した軍人が壁の一部を扉のようにして開け、中に入つていった。オレもその後をおつて、窓際の壁に向かう。もちろん、扉の前に立つ軍人にはきちんと敬礼をして。何もないかのように壁紙を貼られているのに、よく見るとうつすらと溝があつた。頻繁に使われているからなのか、最近作られたからかは知らないけれど、壁紙は真新しかつた。ほとんど違和感はなかつたけれど、よく見ないと、知らないと判らなかつた。

先に入った軍人に倣つて、溝の部分に触ると、奥の方に押すことが出来た。どうやらこの部分がノブになつてゐるらしい。開けにくくて一回失敗してしまつたけど、何とか2回目には開けることが出来、先に続く梯子段を登り、前に進む。梯子段とはいえ、作りはしっかりしていた上に絨毯が敷いてあり、足音は響くことなく静かだつた。

暗くて狭いけど、どこに行くんだろう。隣は謁見の間のはずだよなあ。声も聞こえないし。

しばらく登つていたら、暗くてよく判らなかつたけれど踊り場が現れた。ここにも「丁寧に絨毯が敷いてあつた。左手の、謁見の間があるはずの壁側から、微かに光が漏れていた。近付いてみると、そこからあちら側が覗けるスリットが空いていた。

もしかしてこっち側つて、軍が王様を守るために用意した隠し部屋つてことか？（部屋つて言うには狭すぎるけど）軍服着てきて良かった……。バッジつけて、軍服着てなかつたら、多分、入るときに止められてたかも。

スリットから向こう側を覗くと、まだ赤い絨毯が続いていた。扉も見えるけれど、奥と、入ってきた側にそれぞれ一つずつ。どうやら、謁見の間はさらに先らしい。暗かつたので気付かなかつたが、ここにも一人、軍人が立つており、見張つていた。敬礼をしてそそくさと先に向かうこととした。

梯子段を登りきると、急に眩しくなり思わず目を閉じた。梯子段と同様、絨毯の敷き詰めてあるフロアは、やはり狭かつた。だけど、全面ガラスになっている壁を一枚挟んで、その先には謁見の間が広がっていた。ちょうどビロフトから見下ろすような形だつた。

奥に玉座が見え、そこにミハマのお父さんであるオワリ王が座っていた。その前にミハマとサワダ父が並んで立ち、サワダ父の横にティアスとサワダがいた。ミハマの横にはショウジさんが立つていた。

室にはカリン姫も見える。距離は離れ、謁見の間の中心にいたけれど、彼女は真っ直ぐにミハマを見ていた。

謁見の間と言うから、もっと狭いかと思つたけど、バスケットコートが3つくらい入りそうな程度には広かつた。今いる監視部屋と同じ高さには、オペラを見るためのホールのような、階段状の座席や、個室も見えたし、そこから下に降りられる、レッドカーペットを敷き詰めた広い階段もあつた。

入口も、監視部屋側にあつたものとは別に、豪華に飾り付けられたものが玉座の右手側にあつた。客人用のエントランスからつながつているのは、こちらの扉のようだつた。

それにしても……このガラス、向こうからも丸見えなんじゃないのか？ここにも見張りの人人が立つてゐるけど、大丈夫？

「こら。何してんだお前は。いつの間に忍び込んだ？」
「うわ！でた！やつぱり出た！」

オレの首根っこを引摑んでいたのは、案の定イズミだつた。

一応周りを見渡したはずなのに、一体どこに潜んでいたんだ、コイツは。

「姿を見なかつたから、少しだけ安心してたのに……」

「ずっとお前らの側にいたけどね。ミハマの客室にいたときとか

もしかして、あの時グラスが一つあったのって……！？怖い、怖すぎる。忍者かコイツは！でも、イツキ中尉やミハマの態度から察するに、いつものことなんだろうな……。「いつものこと」と、ホントにすんでしまいそうな「コイツ」が怖い。

「まあいいか。あんまり騒ぐなよ？今日はカリン姫がいらっしゃる

イズミが下を指さす。よく見たら壁際には親衛隊のキヅ大佐と力グラ、王の親衛隊も2名、それから元老院派のソノダ中佐、さらに見たことのない軍服を着た人が一人立っていた。多分、カリン姫について来たカントウの軍人なんだろう。実戦には向かなさそうな、真っ白な軍服だった。お出かけ用か？

「どうやつてここに来たか、聞かないんだ」

「めんどくせえし。聞いても仕方ないし」

「いつも五月蠅いくせに」

「オレの業務と、あいつらに害がなければ、どうちでも良いんだよ、本当は。だって、ここに来たのは、お前の意志なのに。オレには関係ないし」

下を見たまま、オレの首から手を離した。気のせいいか、やっぱりイズミの態度は随分柔らかくなっているような気がした。

まあ、以前もそう思い違つてしまつて、エライ目に遭つてゐるんだけど。

「イツキ中尉には、自室で待つてろつて言われたけど」

「それは、コノちゃんの意見だ。あの子、優しいからね」

それつて、オレがここに来ると、オレに何があるみたいな言い

方なんですけど。怖いな、ホントに。

「……このガラス、大丈夫なのか？」

「ああ。向こうからはただの壁にしか見えないわ。こっち側は明らかに作りがみすぼらしいのに、見せられるわけないし？」

いや、けつこいつちゃんとしてますけどね。どうこう構造のか知らないけど、マジックミラーのようなものだろ？ 何か、怪物以外で、やつと未来っぽいものに遭遇したな。

「これ、中央とオワリしか使ってない、特殊技術。オレが確認した限りでは」

「……確認つて？！ オワリつて特別待遇つてこと？」

「違う違う。中央もオワリも、別々に開発してる。もちろん、報告は出来ないし。ただ、オレがいろんな国の裏側を見た限り、これに類似した技術は見あたらないね」

「隠密か！？ お前は！」

「今さら何を」

そこは突っ込み返してくれよ……。お前の技術の方が恐ろしいよ、オレは。

「ただ、ちょっと静かにしてろよ？ カリン姫は手強いから」

「何だよ、向こうの声も聞こえないのに、こっちの声が……」

「向こうの声は、あっちにヘッドホンがあるから、そこから聞ける。こっちの声は確かに聞こえない程度の厚みはあるけど、相手はあのお姫様だしね」

「どんな超人なんだよ。聞こえるのか？ あの人には」

「聞こえてるかもね。足音とか、歩き方とかで、どんな人か大体判断しちゃうような人だし。アイハラなんか、軍人じゃないことどこ

ろか、やたら寒がりつてことまでばれる気がする」

それで南の方とか言つてたのか？つーか、寒がりじやないっての。この世界が寒すぎるの、オレがいた時代に比べて。

でも、イズミの言ひとおりだ。しつかりばれてるよ。一体何者なんだよ、あの人。お姫様なのか？

イズミはオレを置いて、ヘッドフォンが設置してある個室に向かつたので、それについていつた。不思議と、彼は文句も言わず、オレを自由にさせてくれた。

何か、イズミとの力加減つて良く判らないと言うか、難しいんだけど……判らないなりに、何となくだけ、機嫌のいいときは判るよづになつてきた。

今日のイズミは、決して機嫌は良くないだろつ。なんと言つてもミナミさんがいない。あの人ガ側にいるときといないときでは、口イツの機嫌は驚くほど違う。

だけどそんな状況でも、オレがする行動一つで、機嫌が良くなることもある。

不思議だけど、オレが「こうしたい」とて言つて動くと、イズミは驚くほどあつさりと受け入れてくれる。でも、同じようにオレが意志を見せて動いていても、イズミのカンに触ることもある。そこにはなにか、彼なりの明確な基準があるように最近は思ってきた。

個室の中からも、謁見の間を見下ろすことが出来た。まるでミキサー室のようなその部屋には、王の親衛隊らしき軍人が一人、ヘッドフォンを耳に当て座つていた。

「緊急事態があつたら、あの人ガ警報を鳴らす」と、珍しくイズミが自分から教えてくれた。

イズミに倣つて、何に使うか判らない、たくさんスイッチがついた機材の上に放置してあつた5個のヘッドフォンから適当に一つ選び、耳に当てるど、カリン姫の声が聞こえてきた。見下ろしてい

る人から、顔が見えないのに声が聞こえるのは、何とも不思議な感覚だった。

「イズミ、あれは誰？いま入ってきた人。元老院の人みたいだけど」
サワダ父と同じ制服を着た、初老の人物が監視部屋側の入口から入ってきた。サワダ父には親しげに声をかけ、王やカリン姫には跪いてみせるが、ミハマには目もくれない。
逆に、カリン姫は相手にもしていよいよ見えたけど……。

「元老院のナカタ議員。名前くらいは聞いたことがあるだろ？まあ、オレ達のような下っ端じゃ、お会いすることもないしな」

ちらりと、同じ部屋にいる親衛隊員の目を気にしながら、イズミは嫌味っぽくそう言つた。

明らかにイズミの機嫌が変わったのは判つた。あの初老の男が、「ミハマに敵対している派閥」の重要な人物であろうことは明確だつた。あんなにあからさまに良いのかって言つくらい。

そのわりにはサワダ父はいつも通りつて言つたが、様子が変わらないと言うか……。ナカタ議員の態度から察するに、サワダ父とは友好関係にあるはずだ。

「ナカタ議員つて、エライ人？元老院の中でつーか、そもそも元老院で？そんなにエライの？おかしくない？」

室内にいる親衛隊員の様子を伺いながら、イズミに耳打ちをした。

「いや、元老院でスゴイだろ？」「みうよ」

「まさそこのよく判らん。王子様のがエライし。元老院があるなら代議院とかもあるんじゃないの？」

「何じゃそりや？ そう言つ話はシユウジさんとしろよな。元老院がエライのは決まってんだろうが。名田上にの国では『王の助言機関』であり、事實上、『統治機関』なんだからさ。独立してるしね」

何か、子供に諭すような口調のくせに、嫌味たっぷりにそんなこと言わてもなあ。それにしたって、ミハマの方がエライはずなんだが。まあ、サワダ親子問題はあつたにしても。

「ちなみに、そこで一番力持つてる人」

……他にもつとエライ人はいそんなんだけどな。大体、サワダ父と友好的な関係なのが妙に引っかかる。

おかしな話じやないか。立場的には微妙な仲のはずだ。サワダ父は王の義弟に当たるわけだし、王の信頼も厚いって言つし、息子も國を背負つて立つような戦士なわけだし。この王宮内での政治的な話で言えば、サワダ父がナカタ議員にとつては一番敵として認識されそうなもんだ。年だつて若いし、叩いたらいろいろ埃の出できそうな人だし。

どつちも別に、國王になれるわけじやない。繼承権はないのに。なのに、少なくとも階下から聞こえるナカタ議員の声からは、サワダ議員への嫌味とかそねみのようなものは聞き取れなかつた。ティアスのことなんか真つ先に突つ込みそうなのに、彼女の存在などいないかのように話をしていた。

上から見ると、誰が誰のことを見ていて、誰を視界に入れてないのかが、ものすごくよく判る。吐き気がしそうだった。

「こつもこつなコトしてんだ？」

軽く嫌味の混じった声で、イズミに突っ込んでみたけど、下の会話に集中してるので、ちょっと気の抜けた声で返事が返ってきた。

「お仕事ですから」

「いつもそういうけど、どんな仕事だよ？」

「うちの王太子様を守り、彼の望む方へ進むための土台作り」

「これが？」

「何かあつたら困るだらうが？」

「そうだけじゃ……。何かストーカーみたいだし、いろんなこと知りすぎて怖い。それに、ホントにそれ関係あるのかって言つといろに必死だし。」

サワダとティアスのこともどこまでホントは知ってるんだらう。その情報の出し方も隠し方も、全て「ミハマのため」なんだらうか。「ま、こんだけ役者が揃つても、王もサワダ議員もいらっしゃるし、面白いことは何もないけどね」

笑いながらさう言つたイズミを、ちらりと同じ室にいた親衛隊の人々が睨んだように見えた。多分、イズミは判つて言つてるだらうけど。自分が嫌味を言つるのは良いのか！？

「なんでサワダ議員？」

「の方には王もナカタ議員も、シユウジさんですら一皿置いてるからさ。ミハマがこんな場で余計なことを喋るとも思えないし、テツもティアちゃんも借りてきた猫みたいで可愛いもんだし？」

確かにそう言わされてから謁見の間の様子を伺つてみると、そう言う風に見えなくもないかも。カリん姫にいたつてはアウェーなわけだし。

サワダやティアスよりも、ミハマの方がよっぽど借りてきた猫みたいだよ。普段は黙つていたとしてもものすごい存在感があるので、それすら消し去ろうとしてるようになつた。

確かにこんな場に「王子不在」なんてことは、政治的に不利になることばかりだらうけど、ミハマがただ存在してるだけって判つてるなら、何でシユウジさんはわざわざこんな場に引っ張り出すんだよ。端から見てるからこそ、ミハマがいたたまれなくなつてくるよ。

「何かあつたら困る、何つつといて、何か起きて欲しそうに聞こえたのは氣のせいか？」

「氣のせいだろ？」

顔が、悪戯を考へてる最中の小学生だらうがよ。説得力ゼロだ。

「いや、何も無いだなんて絶対思つてない！」

「カリん姫がいらつしやるからね」

何を彼女に期待してんだ？別に、この国の政治に口が出せるわけでもないのに。いくら大国のお姫様だからって、所詮は別の国の話だ。中王が口を出すのとは、また違うし……。

サワダ議員が王に断りを入れた上で、ティアスをカリん姫に紹介した。その様子を、後ろからサワダがじつと伺つているよつに見えた。

オレの隣では、同じような表情でイズミがその様子を伺つていた。

「随分遠いところから来ているのですね？」

北方から来ているということと、天から来た魔物に対する力を持つているというサワダ議員の説明を受けてか、自身で判断したのかは判らないが、カリン姫はティアスにそう言つた。彼女は姫に笑顔で応える。

「そうですね……ここからですと……」

「随分、『苦労もされたようだ』

「そんなことは」

まあ、ものすつゝく苦労はしてるんだろうけど。否定するしかないよな、ここは。

ティアスの笑顔は完璧だった。知つてるオレですから騙されそうだった。だけど。

「どこかでお会いしたことがあるような気がしますが……」

そう言つことか！

中央に出入りしてるなら（しかもオワリから行くより数段近いところの人だし）、「中央の楽師」とも面識があるはずだ。

もしかして、イズミはカリン姫にティアスのことを判断させるつもりで？それが面白いって？

サワダもそれを期待していたのか知らないけれど、少しだけ表情が緩んだ。すぐに元に戻つたけれど。

「申し訳ありません。人違いではないでしょうか？お会いしていましたら、あなたのような方を忘れるはずもありませんし」

その様子を知つてか知らずか、それでもティアスは完璧だった。カリン姫はまだ何か突つ込みたそうだが、監視部屋側から入ってきた伝令の兵の存在に、身を引いた。

ヘッドフォンから、階下の声とは別の所から緊急連絡として、『中央の監査の方がいらっしゃった』と言ふ声が聞こえた。どうやら、下に現れた兵もそれを伝えに来たようだ。

「急ですね。監査の方は別日だとお伺いしていましたが」

「ええ。今朝連絡があつて、今日に変更になつたと。よろしければテラスに行きませんか？私に用があつて、と聞いておりますけれど」

様子を伺つてから初めて、ミハマの言葉を聞いた。でも、まるで彼の言葉ではなく、用意された台本を読んでいたように聞こえた。

「よひこんで」

そう笑顔で応えたカリン姫が可愛く見えてしまつた。ちょっとすごいな。

「……サワダ中佐も一緒に。良いですよね、サワダ議員。良かつたら、ティアス殿も是非。監査の方にはサワダ議員からじ紹介していただければ結構ですけど」

笑顔でサワダ議員のそう言つたミハマの様子を見ながら、オレの隣でイズミが声を殺して泣きながら笑つっていた。

当然のことだが、ティアスはちりつとサワダ議員の顔色を伺つた。何故かサワダも一緒に。

「行つておいで。王子をお守りするのがお前の役目だらう」

表情を崩すことなく、穏やかな声でサワダ議員は息子にさう言つた。息子の方はと言えば、目を伏せ、まるで頃垂れるようて会釈をして、ミハマのそばに歩み寄つた。

「……私は……」

「好きにすればいい。年の近いものと一緒にの方が、君も気楽だらう？挨拶はあとですればいい。テツもな」

「……そうですね」

ティアスはミハマとサワダ議員の様子を、視線だけで交互に伺いながらも、静かに頷いた。サワダも、父の言葉を受けて頷いたが、彼の視線はティアスを見ていた。

「テラスつて……？」

どこのことをいつてるのか判らなかつたので、イズミに聞こいつと思つたら、既に立ち上がつっていた。

「つて、待てよーもづー。」

といつたところで、連れてつてくれるわけもないし。どうせイズミの行くところはミハマの行くところなんだから、ついていくしかない。

ミハマ達がシュウジさんを置いて表口の方から連れ立つて出でいつたことを確認してから、イズミは個室を出た。オレも小走りでそれについていく。イズミはオレが入ってきた方とは逆の、監視部屋の奥に向かっていた。

オレが入ってきた入口と同じような梯子段があり、そこを降りていぐ。位置的には階下の表玄関の横辺りになる。

「イズミー。」

梯子段を降りきつたところで叫んだら、睨まれた。壁を指さすので従つて覗くと、微かに光が漏れていた場所から向こう側を確認できた。

「……ごめん」

カリン姫がこちら側をじっと見ていた。壁しか見えないはずなのに、まるでオレ達が見えているかのように。

「ついてくるなら、黙つてついてこいで」

イズミーからぬ台詞を吐いて、僅かな光が差すだけの、床も見えないような暗く細い裏道を、迷いもせずに歩いていく。壁一枚挟んだ向こう側を歩く、ミハママ達と同じ速度でゆっくりと。

壁にある覗き穴には先ほどの監視部屋と同じようなガラスが仕込んであつた。もう、カリン姫は、こちら側にいるオレ達を見てはいなかつた。隣を歩くミハママだけを、乙女の顔で見つめながら、笑顔で話をしていた。その二人の後ろをサワダとティアスがついていく。あの夜の彼らから考へると、不自然なくらい、距離をあけながら。にも続いているようなので、かなりの広さだろう。

突然立ち止まつたイズミを責めたら、再び睨まれてしまった。彼は黙つて、目の前の壁を指さす。同じように空いた微かな隙間から向こう側を覗くと、そこにはこの王宮の一面全てを渡つた、ベランダが広がっていた。しかも一面だけではなく、角を渡つて向こう側にも続いているようなので、かなりの広さだろう。

「……なんだよ？」

ただ、外側に面した部分は、天井まで全て、まるで鉄格子のようになっていた。なんだか鳥かごのようだった。安全のためなのだろうけど。

でも、このテラスは初めてみたな……。こりこり、外部からの客を迎えるために用意されてるってことなのか？明らかに逆側にある、王族の居住区や、軍部側とは違っていた。オレやティアスのいる客間のある側でも、ここまで厳重ではない。ただ、この檻のようなテラスを見てしまうと、客間側にあるベランダのフーンスも、天井まで囲つていなしにしひ、檻のように見えてきた。

オレ達のいる客間は、ちょうどあの角を渡つた向こう側に面している。このホテルそのままの、四角い王宮は、面している側で全く表情が違うのだろう。

そう言えば、初めてシュウジさんの私室に入ったときもベランダがあつたことを思い出した。似合わない真っ白いテーブルと椅子がおいてあつた。だけど、フェンスは高くなかった。

このテラスにあつた調度品は、さすがに来客用なのか、シュウジさんの部屋にあつたものより遙かに凝つた作りのものだった。でも、やつぱり色は白かった。

ミハマはオレ達が覗いている場所から一番近いテーブルを選び、カリン姫に座るように促した。彼女の横顔が、オレ達に見える席に。その両隣にミハマとサワダが座り、カリン姫の向いにはティアスが座つた。サワダの背中が、オレ達の真正面にある。

もしかしたら、座り方も、ここに來ることさえも、「いつも通りつてヤツなのかも。

だって、ここから様子を伺つてくださいと言わんばかりの並び方だ。こんなに近くで、イズミはいつも覗いている……。
背筋が寒くなってきた……。

「え？」

隣にいたイズミは、ミハマ達を見ているのかと思ったら、オレを見ていた。怖すぎる……。

「声、そこにあるイヤホンで聽けるから。黙つていろよ？」

監視部屋にあつた個室には5つもヘッドフォンがあつたのに、ここにはどこからつながつてゐるのか判らない、小さなイヤホンが一つぶら下がつてゐるだけだった。しかも、イズミが指さなければ判らないくらい壁に溶け込んでいたといつが、暗くて見えないと呟つた。

「イズミは……」

「少し聞こえてるし、唇を読むから」

「……ああ、やつ」

ますます隱密だよ、それじゃ。怖すぎるよ。どんなスパイだお前は。何かもう、これ以上イズミのこと知りたくないかも。声なんかほとんど聞こえないのに。

イヤホンを渡してくれたのも、オレに静かにしてろと強制するための餌なんだろう。この状況ではそれに従うしかない。彼が文句も言わず、オレをこんな風に自由にしてくれていることですら奇跡的だ。

イヤホンを耳に付けると、ミハマ達の声が聞こえてきた。やつこの部屋に比べると設備が悪いのか鮮明には聞こえなかつた。

ミハマとカリン姫は仲がよいように見えた。サワダの話によると、彼らは（サワダも含めて）幼馴染みらしいから、当たり前と言えば当たり前だろう。先ほどの謁見の間での様子とは違つてタメ口だし、呼び捨てだし。

いつも一人がいつも通りなのだとしたら、あの謁見の間での一

人が少しだけ哀れだつた。

ミハマは、ティアスとも随分近い距離にいるように見えた。彼が彼女に好意を持っていることは知っていたけれど、オレの前で見る一人の姿とは違うように見えた。考え方かもしれないけど。彼はきっと、オレが彼女を好きだと思つてる。明確にそう思つてなくても、少なくとも気にかけてる、程度には思つてるだろう。だから……もしかしたら氣を使つてるなんて思つてたんだけど。

「ねえミハマ、何で連れ出したの？」

「え？ だつて、随分疲れてたみたいだから」

ミハマの彼女への気遣いは、いろんな意味にとれた。

彼女はもともと体調も万全ではないし、何よりあんな緊張感あふれるところに連れ込まれて責められるし。責めた人は目の前にいるわけだけど。まあ、あのエライ人たちがたくさんいる場所よりはマシかもしれない。ミハマは、何だか全部判つているみたいだな。

「……うん、まあ。ありがと」

カリン姫の横顔と同様、ティアスの横顔もよく見えた。儂げに微笑む彼女は、日の光に晒されているのも相まって、本当に綺麗だつた。その様子を見て、ミハマも微笑む。端から見ると、二人はまるで美しい恋愛映画の1シーンか何かのようで、嫉妬するよりも見入つてしまつていた。サワダと彼女が仲良さそうにしているところを見たときは、あんなに苦しかったのに。

「サワダ議員が後見になつておられると聞きましたけど？ ティアス殿。名字は……」

二人の間に割り込むように入つてきたカリン姫の目は、完全に敵

を見るものだつた。

そう言えば、ティアスって名字で呼ばれてるのを聞いたことがないな。オレの知ってるティアスには、日本での名字を聞いたけど。元々、ベルギーに住む前は横浜に住んでたわけだし。

「魔と戦うものならば、名を知らぬものがいることは」存じではありますか? イイヌマ様。あなたも、戦われるのでしょうか?」

カリン姫はそんなこと一言も言つてないのに、ティアスはそう言った。まるで、彼女がティアスを見透かしたのに対抗するように。

「カリンで結構。それは父の……カントウの家の名ですから」

微妙な緊張感だなあ。さつきの会話もそうだけど、お互に警戒してゐて言づか。警戒してゐるのが表立つてゐるというか。

「天からくる魔と戦える力を持つてゐるからこそ、サワダ議員は後見として立つてくださつてゐるのです」

「では、元々はどこの方とお知り合いに?」

カリン姫がこっちを見た。と思つたら、オレ達に背を向けているサワダの様子を伺つていた。

サワダの表情は見えない。しかし、声を聞く限り、彼は突き放していくように思えた。カリン姫を、そしてティアスを。

「さあ。オレに父のことを聞かれても？」

「ああ、そう。相変わらずだな」

本当に『相変わらず』なのだろう。カリン姫のサワダのあしらい方は、慣れたものだつた。

「知人が、サワダ議員と知り合いだつたので、そこで知り合つたんです。ね？」

カリン姫の思いに気付いているのかいなかが、ティアスはあって、ミハマに同意を求めた。確かに、彼女とサワダ議員の繋がりは、そのようにここでは言われてるし、一人ともそう言つてはいる。だけど、カリン姫が気にしてるのは、何もティアス自身のことだけじゃないはずだ。

彼女は、ミハマに会いにこの国に来ているのだから。
案の定、目配せをする一人に、カリン姫はあからさまに不愉快な顔をして見せた。

「鈍いなあ、ティアちゃん。天然かな？」

隣で同じように様子を伺つていたイズミの咳きに、オレは黙つて頷いた。

「わりと、女子に嫌われるタイプかもね、ティアスつて」「ああ、かもね。女友達少なうだし。良い子なんだけどね。サトウアイリとは違う意味で、女子の反感買いつるだな」

確かに……オレの知つてる佐藤さんも、綺麗だし、男にはいい顔するけど、女から見たらどうかなあつて人だつたしな。女友達と一緒にいるの、見たことないし。大概、違う男を連れてた。

ティアスは、そう言つて女ではなかつたけど。

「テツは何で、ああいうタイプばかり……」

「佐藤さんは綺麗だし、オレも好みの顔だつたけど?」

「中身の軸も似てるよ。テツはドMだからな。あんな女が良いんだ」

酷いよな、自分で佐藤さんの名前を出したくせに、不機嫌になつた。

「……アイハラって、テツと好みかぶつてゐるよな」

「かぶつてない!」

オレの知つてゐる泉と同じ」と言つたー最低だ!!なんでサワダと好みがかぶつてないといけないんだよ。ティアスも佐藤さんも、普通に考えて可愛い顔の部類だらうが!?

あの一人の中身の軸が似てるつて?そつは思えないけど……。

「ティアスも佐藤さんも、サワダの好みなんだな」

「ま、見るからにね。もつちよつとましな女を選べばいいのに」

否定して欲しかつたかも。

何か、喋つてるときにカリン姫にこつちを向かれると、聞こえてるんじやないかつて心配になるよな……。話を聞いている限りでは、ミハマの氣を引くのに必死みたいだから大丈夫そうだけど。

「いつ頃から一緒に……」

直接的な台詞を吐いてしまいそうになつていたカリン姫が、ちらつとサワダの方を見て、小さく舌打ちをしていた。多分、彼は嫌味な顔をしていたに違ひない。

「いつ頃からこちらに滞在を？」

「ちょうど先回の中王の招集の後からです。中央にいたこともありますたし」

ティアスが先手を打った形だった。何か言われる前に、先に言つてしまおうといつところか。ミハマやサワダ達にもそのことは言つてあるだろうし。

サワダ議員が、中王とその臣下であるサカキ将軍と懇意にしていることは、おそらくミハマ達が知るよう、カントウの姫である彼女も知つているだろうから。

「カリソ。そんな風に質問責めにしなくとも……」

「質問責めにしているわけじゃないよ。ただ、君だって、サワダ議員の手の……」

カリソ姫はサワダ父の存在を責めながら、再び、サワダの様子を伺つた。ミハマの視線が、彼女を責めていたからかもしれない。

「……ティアスが父を後見に持つたのは、知人を通してだというのは本当だと思う」

そう言つたのはミハマではなく、サワダだった。当然だが、ミハマ以外の誰もが驚いていた。ミハマだけが、笑顔を崩さないまま、嬉しそうに彼を見ていた。

「別に、庇つたわけじゃない」

バツが悪そでござつサワダに、ティアスがにじり寄る。

「でも……」

図らりすも彼を見つめるティアスの瞳を、初めて真正面から見ることが出来た。

彼女は、オレが知る彼女と同じ瞳で、彼を見つめていた。

「嬉しいよ」

礼を言ひわけではなく、彼女は自身の思いを彼に告げ、他の誰の目を見ることがなく、正面をむき直した。その彼女の様子を、一瞬だつたけれどミハマが伺つた。その程度ですますことが出来るミハマは、一体何を考えているのか。

あれは、ない。本氣でへこむ。オレなんか、こちらの様子を伺えるわけもないと判つてゐるのに、サワダを睨んでしまつ。

「何がおかしいんだよ？」

隣で同じように様子を伺つていたイズミが、声を殺して笑つた。その毒のある笑みが、カンに触つた。

「別に。ティアちゃん、完全にカリン姫に『敵』として認識されちゃつたな、と思って」
「そうか？ だつて、カリン姫って、ミハマ狙いだし。ティアスは明らかにサワダのこと……」

「それを気にしてんのはアイハラだろ？ ティアちゃんが誰に色目を使つてようが、あの方には関係ない。彼女にとつては、ミハマの意志の方が大事だろ？」

「いや、オレは気にしてないし。大体、ミハマもそんな、気にしてるようになんか……」

「充分だよ」

あれだけのこと？

でも、イズミの言う通りかもしない。疑っていただけのはずのカリン姫の敵意が、ティアスに向けられ始めていた。

「カリン姫は、よく見てるよ。いろんなことをね。ミハマに関することなら、特に」

「なら、今この状況は、お前の思惑通りってヤツ？」

「そういうこと」

悪びれず、彼は笑う。何だかバカにされた気分だった。

少しだけ、彼がオレをこんなに自由にしてくれてるのか、その理由が判った気がする。

彼のたぐみが、オレなんかにばれたところで、大したことがないって思われてるってことなんだ。

だけど、それだけじゃないって思いたい。

もう、見ると胸が痛くなつてくる。どう考へても、ティアスつてサワダに氣があるし、サワダも彼女の前では照れたようにして気持ち悪いし、ミハマはティアスを気に入つたって宣言してるし、何よりそんなミハマしか見てないカリン姫がそう判断してるし。めんどうくさいなあ、もう。首突っ込みたくないんだけどな、こういうの。判つてるんだけど、……だけど、オレは既にそう言つわけにも行かない状態なんだよなあ……。

こつちのティアスは、明らかにオレの知つてゐる彼女とは違つて、判つてゐる。オレは彼女の怖い部分も知つてゐる。この世界に生きるのにふさわしい女だつて判つてゐる。オレは早く戻らない

と行けないのに。

戻りたいはずなのに。

「そんなに力入れてんなよ

イズミが苦笑いを見せた。毒を含んだ表情のまま。彼にそんなことを言わせてしまつほど、オレはまずい顔をしてたつてことか？

「別に？」

「オレは、ミハマの手伝いしかしないけどね」

「別に手伝ってくれとも思わないし」

「邪魔するなら、排除するつてことか。それ以外は、ミハマの言うとおりにするけど」

……ミハマが欲しがってるモノを横取りしようとするとヤツは、排除するつてこと？ だけど、ミハマがオレを拾つたから、ミハマがサワダを大事にしてるから、ミハマの言うとおりにそれなりの扱いをするつてこと？

『誤解の無いように言つとくけど、オレ、テツのことは敵だと思つてるから』

あれだけ気を使つてるサワダのことを、コイツは「敵だ」と言った。なら、それ以上に酷い扱いを受けてるオレは？

「……アイハラ、ここを動くなよ。騒ぎがある程度収まつたら、元来た道を戻つて部屋に戻れ」

「え？ 何だよ、急に……」

イズミは、いなくなつていた。こんな狭い通路なのに、いつの間に

にいなくなつたのか判らないくらい突然。

それに今確かに「騒ぎが」って言つた。ビijoで騒ぎなんか……。

「殿下！」

テラスに駆け込んできた伝令の声に、オレは食い入るよつに外の様子を伺つた。

「……こつちに来る。殿下！」

普段持ち歩いていた大剣の代わりに、腰に下げていた小剣を抜き、いち早くミハマの横に立つたのは、もちろんサワダだった。でも、来るつて一体何が？！

「空から、魔物が！」

伝令がそう言つたとほぼ同時に、一つ目の黒いプロテラノドンのような魔物が、羽を広げテラスへと向かってきた。

「……何で？！」

ティアスが何に対しても疑問を抱いたのかは判らなかつた。けれど彼女は魔物が仰ぎ起こす風を受けながら、立ち上がり、空を、魔物を、睨み付けていた。

「姫様ー、ご無事ですか！」
「無事だ。それより槍を

黒ブテラノドンがもう一体空から現れたのとほぼ同時に、カントウの従者が1mくらいありそうな槍を2本持つて、テラスに現れた。

どうやら片方はカリン姫のものらしい、彼女に一つ手渡すと、一人揃つて魔物に槍を構えた。

ティアスは……未だテーブルの横で立ちつくし、空と魔物を睨んでいた。

「ティアス！」

半ばサワダに引っ張られるようにして廊下に連れ込まれていたミハマが、動かない彼女を案じ、叫んだ。その声にティアスは身動き一つしなかったのに、カリン姫が彼女を睨み付けていた。

「……何やってんだ、あの女は」

舌打ちするサワダに、ミハマがすがるよう訴える。

「オレも……剣を」

「ダメだ。……ダメだ」

何故だか、ミハマを説得しようとするサワダは、彼の目を見れずに、ただただ否定をしていた。

「近すぎる。それより、オレの剣を……」

「テツちゃん、剣を持ってきた！」

初めて会ったときに彼が持っていた大剣を、イズミが手渡す。いつの間にかいなくなつたと思ったら、サワダの剣を取りに行つてたんだ。

今度は一人してミハマを引っ込めようと、両脇を一人で抱えて廊下に投げ込む。

「オレ、行けるつて。テツは引っ込んでるつて、ティアス連れて。シン！オレの言いたいこと判つてるだろ？！」

港に魔物が来たときの、あの冷静なミハマは見る影もなかつた。何が違う？あの時と？

「……カリン姫、下がつていた方がいいですよ？」

空を睨み続けていたティアスは、魔物に注目したまま、彼女に忠告した。それが、カリン姫の機嫌を損ねたのは、火を見るより明らかだった。

「ティアス殿。あなたこそケガをなさつてゐるのでは？」

ケガ？そうだ。あの時と違うのは、ケガだ。ティアスもサワダもケガをしてる。だからミハマはあんなに心配して。それをイズミもサワダも、彼に戦わせないようにしているだけなんだ。

「シン、お前援護しろ。オレがあの女を引っ張つてくる。ついでにカリンも。『広がる前に』かたを付ける！」

広がるつて？被害がつてこと？それより、オレはどうしたら良いんだ？イズミの言つとおりにこじいて良いのか？

「いや、姫はほつといて良いんぢやないか……？邪魔したら怒りそうだし」

外に出ようと暴れるミハマを抱えて押さえながら、イズミは嫌そな顔でカリン姫のいる方を見ていた。彼女の護衛が頑張っているのだとばかり思つてゐたが、彼はむしろ姫の背後から援護をして

いて、姫が槍を片手に、空飛ぶ魔物に奮戦しているように見えた。

立ちつくすティアスの横を、掠めるように飛び回りながら。カリン姫は異常なほど彼女を気にしているのに、ティアスは相変わらず、彼女の存在など無視していた。

「それより、テツちゃんんーそー！」

イズミはサワダの肩を掴み、ハマの後ろへ突き飛ばしたあと、再びハマも突き飛ばし、ガラスの扉を閉めた。

「シン！バカ！」

「良いから、オレが行くからさ。テツちゃんが援護にまわりなよ？」

そう言つたイズミの笑顔が、妙に怖かつた。何か、オレに見せたあの企んだ笑顔と一緒にような……。

「シン？」

多分、それにハマも気付いたんだと思つ。怪訝そうな顔で彼を見ていた。

イズミがテラスに出て魔物を睨み付ける。そのまま行動に移すのかと思ったら、彼もまた様子を伺うように、距離をとりながら歩くばかりだった。ティアスがちらつと彼の様子を伺つたが、構わず、魔物を見ていた。

それに不快感を表したのはもちろん、カリン姫だった。その不快感を煽るよつに、彼女の部下が進言する。

「姫様。お下がりください。」リリはこのイヅチがおさめますので…

…

「ふざけたことを…あにつらはれてにならん…お前だけで何とかするでモ?！」

「しかし、姫をお守りするのが…」

「そんなことを言つてはいる状況ではない…」
「…の國の軍が来ないと思つてこる? ! お前はよく判つてこるだらう」

「しかし…」

カリン姫の言つとおりだ。どうして他に誰も来ないんだ? ここは仮にも王子がいる。来賓であるカリン姫もいる。なのに。

「シン。あなたは、広がる前には叩かないの?」

イヅミに問い合わせながら、ティアスが動いた。ゆっくりと魔物から目を逸らせぬよう、空を見ながらオレが潜む壁際に近付いてきた。オレがいることを懸念してかどうか知らないが、イヅミが少しだけ嫌な顔をした。

つーか、この状況で、カリン姫の前でそんな言い方……仲が良いのか悪いのか判らないけど、距離は近いんだよな。イヅミのヤツ、するいよな。ちゃつかりしてるとこか。

「ティアちゃん! わつわといのヤツ叩かないと、被害が広がるし?」

「特殊部隊がいるでしょ?」

「役に立たないよ。だから早く始末したいんだよね」

被害が広がるって……。ここ以外にも出でるつてことか? オレ、

ここにいても良いのか? 大丈夫か?

「口ばかりね」

オレの視界を塞ぐように、ティアスはオレの目の前の壁にもたれ
た。

「ここまでいるつもり？」

彼女は軽く壁を蹴つて、囁いた。もしかして、オレに向かつて？
だけど、彼女の視線は空を支配する魔物に注がれたまま、首を傾げ
ていた。

「…………う…………動くなつて、言われて」

なんて答えて良いか判らず、思わずイズミのせいにした。眞実で
はあるけれど、聞こえているかどうかも判らないけれど。

「そう」

ティアスがイズミの方を見たらしく、彼がちらりとこちら側を見
た。

「このおーー」

カリン姫の叫び声に、オレは一瞬目を奪われた。その様子をイズ
ミやティアスが見ていたかは判らなかつたけれど。壁越しの、ティ
アスの背中越しに姫を確認する。

彼女の掴んでいた長槍が、鈍く光を放つたまま、黒ブテラノドン
のたつた一つの目玉に向かつて飛んでいき、見事に命中した。

お姫様だなんて言うから心配してたけど、カリン姫もかなりの手

練れだ。

「……広がる」

ティアスの言葉を受け、イズミが、そして廊下に追い出されたサワダが動き出す。

ただし、サワダはミハマに止められていたけれど。

カリン姫の槍をきつかけに、刺さった目玉から黒い霧が吹き出す。その霧は瞬く間に黒い雲になつて空を覆い尽くす。

広がるつて、こうこうとか。以前、オレとミナミさんを襲つた、空から来た魔物は、既に「広がった」後だつたんだ。

だけど、カリン姫達は「広がる前にかたを付ける」つて言つてた。てことは、この状態つて、ホントはやばいんじゃないのか?何でティアスもイズミも、動かなかつた?ティアスだつて、イズミにそうしないのか聞いてたし。

「シン、動かないの?」

「残念ながら。王子様に危害が及ばない限りは、ティアちゃんこそ」

彼女はゆつくり壁から離れ、黒い雲に向かつて歩く。だけどイズミは動かない。

「もう、広がっちゃつたよ?」

「……」

「戦う義理はない、だなんて言えないよね。あんなご大層なこと言つてるんだから」

「どういう意味?そんなことを言つつもりは……」

「さつき、カリン姫にもそう紹介されていただじやない?サワダ議員にさ。だからあの人は後見についてるつて、『国が北に近いから、脅威にさらされていた』なんてね」

彼女がここにいるとしている、おそらく建前の理由を彼は今、出してきた。

「昨夜……抜け出たくらいだものね」

「戦うよ?」

オレを助けてくれたときに持っていたジャックナイフを手に持っていた。おそらくどこか、服の中にでも隠していたのだろう。

「そんな武器じゃなくて」

彼女の横に、人の悪い笑みを浮かべながら立つ。よく見たら、イズミは腰に下げられるほど小さなボウガン（改造？）以外、武器らしいものを携帯していない。以前、港で戦ったとき、イズミは何を持ってた？隠し持てるような武器だったか？サワダに武器を持つてきたくせに、自分は戦う気はないのか？無いくせに、サワダを後ろに追いやつて？

「どうちが良いかな。君の手駒を使うか、君自身の武器を見せてくれるか」

轟音と共に、テラスを囲んでいた檻が吹っ飛んだ。檻を構成していた鉄柵が、テラスに降り注ぎ、そこに立つ人々の脇を掠める。そして、オレが隠れるこの壁にも突き刺さった。当たらなかつたから良かつたものの、あまりに突然の出来事で、動くことすら出来なかつた。腰が抜けた……。ここにいるのはやっぱり危険な気がする。イズミのヤツ……。

そう言えば、あの魔物はどうやって入ってきたんだ？雲になつた後ならいざ知らず、あのブテラノドン様の形態の時に檻を壊さずには

入ってくるなんて真似、出来ないはずだ。

「カリンが！それに、ティアスも。テツ！オレが……」

鉄柵がカリン姫と彼女の臣下にも降り注いでいた。臣下の足を掠めたらしく、カリン姫が彼を担ぎ、移動していた。

「良いからお前は引っ込んでろ！ オレが行くから……ユノ、コイツ押さえてろ！」

いつの間にか謁見の間から廊下まで来ていたイツキ中尉に、サワダはそう頼むと、剣を構え、飛び出す。

「シンつてば……。殿下、ご存じでした？」

ティアスを（そしておそらくはサワダをも）釣るための行為であることを、イツキさんは白々しくミハマに問うた。彼を押さえながら。

「いや。でも、何か考えがあるんだろ？……あ、いや違うな」「違う？」

彼女の疑問に、彼は笑顔で答えた。

「面倒くさくなつたんじゃない？ ユノと一緒にで

「一緒にしないでください。人には時期を見ろつて言づくせに、自分が真っ先に飛び出るような人たちと」

隠れていて良かつたと、このとき心底思つた。今、オレは本氣でへこんだ顔をしてる。この人達、確信してんじゃないのか？ ティ

アスの正体を。必死に隠してたオレが、これじゃバカみたいじゃないか。

オレの知らないところで、一体何が起きてたんだよ。

大体、何でイズミはあんな行動に出た？サワダの前では、彼が彼女に手を出すなんて『あり得ない』と言うくせに、充分すぎるくらい疑つてたわけだし。ミハマに気を使つてるよう見えたくせに、ミハマの前でティアスに決断を迫つて見せたり。そしてサワダにも、武器を持ってきたくせに、あえて引っ込ませて自分は何もしなかつたり。

何となく、イズミの目的も、極端故の行動であることも判るけど。判るけど、いつの間にこんなコトに？オレはなんでこんな、蚊帳の外で見てるだけだ？関係ないことに振り回されないといけないんだ？

「まあ、大丈夫だとは思つけど……大丈夫かな？無茶しそうだけど」「殿下が大切だとおっしゃるなら、大丈夫だつて、殿下がおっしゃつたんですよ？」

唇をとがらせ、意地悪く言つイッキ中尉に、彼は再び笑顔を見せた。

「だから、おとなしく見ててください」

ミハマが窘められたよ……。ある意味、護衛部隊最強はこの人かもしぬれない。言われたミハマは苦笑いしながら正座をしていた。

「……テツちゃん。出来ちゃったね」

イズミは振り返ることなく、彼の後方から歩んでくるサワダに声をかけた。サワダは不愉快きわまりない顔をしていたけど。

暗雲が人の形を成して、カリン姫、ティアスとイズミ、テラスに

現れたサワダを囮む。カリン姫に向かつていった、コールタールの塊のような人型に向かつて、サワダが手に持っていた小さなナイフを投げた。ナイフの当たった箇所からゆっくりと溶け始め、動かなくなってしまった。

「何してる。お前がさつさと潰さないからだろうが。もう広がった。2体とも広がつたら面倒だろ？」「

もしかして、イズミ達は「広がる」の待つてたつてことか？サワダも含め。カリン姫達とは戦い方が違うってことか？今のサワダのナイフと言い、「イツらにはなにか方法があるのかも。

「カリン姫に対抗策は？」

ティアスの言葉は、サワダに向けられたものらしい。イズミは嫌味な笑顔のまま黙つていたし、答えたのは彼の後ろから歩み寄つてくるサワダだった。

「オレが知る限り『広がつた後』ではないはずだ。シンはどう思う？」

「オレの知る限りでも、残念ながら。さつきも「広がる前」に何か片づけようとしてたしね。人間のことは判つても、魔物のことはよく判らないみたいだしね」

その言葉が聞こえてないか思わず不安になつて、カリン姫が逃げた方を確認したが、案の定、聞こえていたみたいだ。不愉快になつて当たり前だけど、どうしようもできないといった感じだった。その思いが、オレには痛いほどよく判る。腰抜かしながら考えることじゃないけど。

「オレは、ティアちゃんが動くのを見たいんだよ。だって、テツちゃんしか見てないんだろ？彼女が戦うところ。テツちゃんは、何か最近はぐらかしたような言い方をするし」

本気で、イズミって言つ男がわからねえ。確かにあいつはサワダのことを「敵」と言つたけど。だけど、なんでこんな、子供が駄々こねてるような印象すら受けるのか。

「カリン！大丈夫？」

カリン姫は、何とかミハマ達がいる場所までイヅチさんを連れてきていた。ミハマの心配に一瞬、彼女は喜びの笑みを見せた。けれど、唇をぎゅっと結び、空を、そしてイズミ達を睨んだ。

「……私は平氣だ。それより、イヅチを頼む。私は戻る！」
「カリン！」

ミハマの制止も聞かず、彼女は再びテラスに戻るために立ち上がった。

「戻つてきちゃうね、カリン姫。サワダ議員を後見につけてる君がこの場にいながら、彼女に何かあつたら、立つ瀬がないよね」

「それは……あなた達も一緒だと思うけど」

「オレはそう言うの、どうでも良いや。言つたら？うちの王子様に危害が加わらなければ、どうでも良いんだ。今は、はつきりさせるこの方が大事だし。ねえ、テツちゃん？」

サワダはどういうつもりだったのか判らないけれど、ティアスを見るのも、イズミを見るのもなく、目も伏せていた。

「別に、戦つよ。そのためにはいるし。そうしてきたい」「だから、そんな武器じゃなくてさ。それとも、隠れてる君の手駒に出てきてもいいっ?」

わざとらしく、ティアスを指さし、その手を屋上に向かってゆっくりと持ち上げた。

09

イズミがわざとらしく指したその先に誰がいるかは、オレには大体予想がついた。多分、イズミもサワダもその存在を知つていて、ああいう態度なのだろう。ティアスはその指の先を見なかつた。

「そんな小さなナイフなんかで戦つてるから、ケガしちゃうんでしょ? 君の部下が心配してるよ?」

どっちだ? 二イジマか? セリ少佐か? どっちが姿を見られてるんだ? いや、もしかしたら、ホントは誰もその場にはいないけど、港で見かけたセリ少佐の姿から察して、カマかけてんのか? 彼が「楽師寄り」の人物だつて、ここに連中ならよく知つてる。特に、楽師と交流のあるサワダやミハマなら。それをイズミが聞いてつてことだつて考えられる。

何でオレ、こんな時に見てるだけしかできないんだ。ティアスが困つてゐるのに。

いつしてゐ間にも、昨日の魔物がティアス達のまわりに迫つてゐるのに。

「カリン! 戻つてろ!」

駆け寄つてきたカリン姫を、サワダが制した。再び、彼女を黒い

人型の魔物が襲おうとしていたが、やはりサワダの投げたナイフによって溶けていった。それが、彼女には気に入らないようだつた。

「五月蠅い！私も戦う！」

「相手見てから言えよ。引っ込んでろ！分析出来てんのか？！」

サワダ……それ、どう考へても逆効果。何でわざわざカリン姫の氣を逆撫でるような言い方しかできないかな。帰らせるなら、もつと他に言い方があるだろうが。邪魔なら「邪魔」としか言えないのか……。氣を使つてくれてるのは判るんだけど、口が悪すぎると仲が悪いのもあるかもしれないけど。

「……カリン姫、本当に下がつていた方が……。ヤツら、あなたに狙いを定めたから」

「え？」

ティアスの言葉に、その場にいた全員が疑問を投げた。まるで魔物の考へが判つたかのような彼女の発言にはオレも疑問を持つたけど。

そして、その言葉を証明するかのように一体、また一体と、増えていく人型の魔物が、次々とカリン姫のまわりに集まり始める。もしかしてコイツら、対抗力のないものを判別して襲つてることか？だから昨日も、オレは狙われたってこと？

「……なんで？！」

姫は槍を振り回し、魔物を蹴散らしていくが、べしゃつと音を立てて床に散らばつた魔物は、そこからさらに増えるばかりだつた。サワダが近付きながらナイフで一體ずつ倒していくが、埒があかない。彼は手に持つていた大剣を構え、振り回し、敵を蹴散らしていく

く。

けれど、空を覆う暗雲は、徐々に濃さを増していく。

「本当に戦う気がないのね」

「だって、オレの役目ミハマを守ることだし。その役目の一貫として……」

腰に下げていた、片手で持てるくらい小さなボウガンを掴み、彼女に向けた。その先端からは刃が現れた。その刃を、ティアスの喉元に近付ける。それでも彼女は、イズミを見ずに、空を見ていた。イズミのヤツ、何つ一ことを……。ティアスに当たつたらどうする？ちくしょう、どうしたら良いんだ。ここから戻つてたら間に合わないし……。

さつき、暗雲が飛ばした鉄柵は、驚くほど綺麗に目の前の透明な壁を貫いていた。けれど、所詮監視用のガラスが壁のように見えるだけのものだ、そこからひびが入っていた。これを割った方が早いかも……。オレは鉄柵を掴み、体重をかけて穴を広げようと動いた。

「外敵になりそうなものには、警戒しないと」「シン！」

叫んだのはサワダだった。ミハマも飛び出してくるかと思つたけど、出てこなかつた。何でだ？ティアスのこと、心配じゃないのか？

「……シン、こんなの……」

ティアスがイズミに何か言いかけていた。だけど、その間に割つて入つたのは、どこからか現れたニイジマだった。さすがに制服を着てはいなかつたけど。背中に一本大鎌を担ぎ、自身も一本手に持

つて、イズミの手からボウガンをはじき飛ばした。
いや、偉いけど、なに考えてんだ？！

「……茶番だわ」

「オレが相手になろううじやないの？」

ティアスの前に立ち、イズミに向かって鎌を向け、すうんと見せていた。ティアスを守るモノが現れたことに、オレは胸をなで下ろしていたけれど、肝心な彼女は頭を抱えて溜息をついていた。

「バカ」

眩ぐティアスの態度に、イズミもまた、鎌を向けられてるくせに苦笑いをしていた。

「……ニイジマ中尉！？」

いつの間にかカリン姫の周りにいた魔物を蹴散らしたらしく、彼女を廊下の方へ逃がしたサワダが彼らに近寄ってきていた。

「あんたが出てきてどうすんのよ！意味のない！！」

助けに来たはずのニイジマを、ティアスは後ろからケンカキック。意味が判らない。てか、乱暴だよ……ティアス……。

オレの落胆と共に、体重をかけていた鉄柵が不意に軽くなつたかと思うと、壁が壊れた。だけど、誰も壁から出てきたオレのことを気にしてはいなかつた。

「だつて……この状況は出てこないとまずいだろ？いくらなんでも。この人、本気だつたし！魔物だつて迫ってきてるし…つーか、こん

な状況で何やつてんだよ！もつと自分の身の安全を考えろー。」

「大丈夫よ、これくらいーそれに、シンは本気だつたけど、手を出さわないのよ。ホントに手を出すなら、ミハマが出て、止めに来るわよ。」

「そんなこと言われたって、判るかよ、もつ……」

ティアスって、もしかしてあんな目に遭つてたのに、イズミが自分を刺すわけないって思つてたのか？それも、イズミではなく、ミハマが出てこなかつたからって言うだけの理由で？しかも、こんな魔物に囮まれた状況で？

「……そつか。 そうだよな……」

「何？ テツちゃん、心配した？」

大きく息を吐き、イズミの横に立つたサワダに、イズミはいつも嫌味な笑顔で彼をつづいた。その二人を、黒い魔物が少し離れて様子を伺うようにして囮んでいた。カリン姫に対する態度とは随分違う。

やつぱり、コイツらは人を見て判断してる。ティアスが空を見込んでいても、あまり襲われなかつたことも、そう言う意味なのか？

そう言えば、コイツらは何でテラスより中には入つてこないんだ？こつちにはそれこそ戦闘力のないオレもいるし、未知数のミハマやイツキさんがいるのに。もしかして何かしてあるのかな、この王宮に。

「何を！？ 誰を！？」

顔を真つ赤にして囁みつくサワダを、イズミは笑い飛ばす。

「別に？それより、正体もはっきりしたんで……」

いつの間にか、月のない夜と間違つてしまい、空は真っ黒だった。未だ夕方だし、今は白夜の季節だからそんなことがあるわけないのに。

「被害の広がらないうちに、叩かないよね？」

ボウガンを構えながら、ちらりと二イジマの方を伺つた。彼が自分のミスを悔いているのを見るために。

「せつせと戻りなさい。カントウの姫君もいるのよー。？」

「……でも、あんたはケガしてるし……オレが怒られる」
いや、今も充分怒られてるし。情けないぞ二イジマ！
へこんでいる二イジマの背中から、鎌を受け取ろうとしたティアスを、止めるものがいた。

「……ちょっと…サワダ中佐！？」

サワダは剣をその場に置いて、彼女を抱きかかえ、鎌を二イジマに突き返した。もちろん、彼女は暴れていたけどお構いなしだ。

「シン、あと頼むぞ。2匹くらい、何とかなるよな
「……ありや。テツちゃん、もしかしてめっちゃ怒つてる？」

怒つてるとと思うな。あの様子だと、サワダはイズミがティアスを刺すもんだと思ってたっぽいし。大体、既に顔が不機嫌だし。

「怒ってる。それにこいつらは怪我人だし。そこの忠犬と一緒に何とかしろよ？」

「えー。この人は帰っちゃうでしょ。飼い主に怒られてるし。元気

「やうじやなこ? その子、置いててよ」

「イズミはさつぱりテイアスを捕らえずが、サワダに一撃され、苦笑ひを浮かべた。

「……サワダ中佐、その……」

「ティアスを抱えて歩き出したサワダに、言葉を詰まらせる「イジマ。」

「『イシ』は戦わないか?」

その言葉をびっくり受け取ったのか、ニヤリと微笑んでいた。

10

「ちよつと……離して……」

か弱い声で逆らつティアスを抱え、サワダが連れてきたのは、オレの空けた壁の穴だつた。穴を空けたは良いものの、結局危険すぎてテラスにも出られず、ミハマ達のいる廊下側にも行けず、じつはよもなく立ちすくんでいたところだった。

「アイハア、『イシ』をここから出すなよ?」

そう言って、彼は彼女を静かに床におろし、オレ達を囲む透明な壁を指さした。

「お前も、動くなよ? オレはシンのフォローハー行くから。出てこい

れたら守れる保証はないし。さっきは全員でにらみを利かせてたから、カリンのまわりもあの程度ですんだけど」

「何か、かつこよくて妙にむかつくんですけど。ティアスも立ち上がり、何だか女の子の顔してサワダのこと見てる。オレの後ろに座り込んでたくせに。

「でも、ここも危ないんじゃ……？」

「大丈夫だ。この建物の中には入って来れない程度のヤツだから。大丈夫だつたろ？」

確かに鉄柵は予想外だつたけど、魔物自体はオレに気づきもしなかつた。もしかして、イズミもオレが下手に外に出ないよう、「これから動くな」なんて言つてくれたのか？

「サワダ中佐……」

ティアスの制止も聞かず、サワダは即座にイズミの側に走つていった。もしかして、こっちの方が近かつたからなのか？ 彼女をここに連れてきたのって。

「あれ、テツちゃん。オレに任せてくれるんじゃなかつたの？」
「忠犬が帰つたからな。仕方なく手伝つてやるよ。ただし、オレは怪我人だかんな。フォローしかしねえ」

偉そうなサワダの物言いに、イズミは何故か嬉しそうに笑う。

二人しかいないテラスに、あの人型を成していたコールタール様の物体が、雨のように降り注いだ。刃のように固い黒い物体はイズミ達の体を掠めるようにして彼らの皮膚を削る。床にぶつかると液体のように飛び散つて、再び集まり人型を成し、警戒しながら一人

に近付いてきた。

「……私も、出なくちゃ」

「ティアス！武器もないのに。そんな小さなナイフで？数多いだろ、昨日より」

「イジマが持ってきたあの大鎌が「死神」とも称される「中王の楽師」の本来の武器なのだろう。イズミはあの武器を見たがっていたのだ。彼女の正体を確信出来るものを。

だから、昨日は余計に戦いにくくて、またケガをさせてしまつていたのかもしれない。どんな状態か、オレには判らないけれど。イツキ中尉や、ミハマ達の話を聞く限り。オレだけが、何も判らない。

「でも、サワダ中佐もケガしてるし。正体ばれたなんぢ……」「ばれたって、サワダはここから出すなつて言つてたから、戦うなつてことだろ？」

そう言つたら、やつとティアスは溜息をつきながら、壁にもたれ、思ひどじまつてくれた。ずるずると音を立て、そのまま滑り落ちるように、壁際に座り込んだ。ホントは、疲れてたはずなんだ。

「……姫

「うわー！何、突然？！」

音も立てず、気配も感じさせず、ティアスの前に跪いていたのは、全身黒ずくめのセリ少佐だった。驚き、倒れ込んだオレなどいないかのよう、元気、彼は真っ直ぐに彼女だけを見ていた。

「戻りなさい」

「姫、さつきのトージの行動……オレは……」

「判つてゐるから。でも、ああでもしないと、あいつは引っ込まないでしょ？責められるのは私だけで良い」

そう吐き捨てるど、大きく溜息をついて、小さく縮こまるよう自分の膝に顔を埋めた。

「姫は、イズミ中佐が本氣ではなかつたとおっしゃつていましたが、あなたこそ、本氣でそつだと？」

「ええ。あの状況で、私を斬るわけがないのよ。ミハマが見てるんだから」

それを理由にしてゐたり言つのが、判らないよ。確かに、あいつはちょっと異常にくらい、ミハマと、護衛部隊と、それ以外、つて言つ線の引き方をしてゐるといふはあるけれど。だけど、その極端さは納得は出来ない。

「だつたら、そつだと言つてくださいね」

「この人も！？セリ少佐も、ちょっとおかしくない？ティアスがそいつ言つたら、そつだつてこと？納得できるのか？」

「伝える時間なんて、無かつたでしょう、今まで……」

彼女もまた、彼の台詞を当たり前のよう受け取るが、少し困った顔もしていた。

「イジマがオレに、彼女とのつなぎを頼みに來たくらいだ。一時期、何のために？」と、イジマを疑つていたけれど、なんだかんだ言って彼らはコンセンサスをとれていなかつたわけだ。そう思つと、彼女がセリ少佐の言葉に頭を抱える理由も判るかも。優秀な人かも

しれないけど、ちょっとずれてんのかな。

「しかし姫、あの方とはきちんと話されているのですか？時期が早すぎる」

彼は外をちらつと確認した。つられてオレも外を見ると、空は暗いまだつたが、未だ雲になつていない方のプロラノドンがいくなつていた。

「コウ」「ア」

突然、彼女がオレに手を伸ばしてきた。壁を向きつつ、座り込んだままのオレの腕に、そつと触れた。

「コウトは、私のこと、判つてくれるよね？だって、優しくしてくれたから」

やばい。彼女との距離はこんなに離れてるのに、微かに触れただけの部分が酷く熱い。その熱が、オレから思考能力を奪っていく。オレは、何も判らない、何も知らないはずなのに、何を判つてあげられる？これから判つてあげられる？

「……オレ、何か出来るかな？」

「どうして？コウトは優しいじゃない。一緒にいると安心するわ」

彼女のその妖艶な微笑みに、思わず手を伸ばしてしまった。やつたけれど、セリ少佐に睨まれてしまつたので引つ込めた。

「コウトは、私の味方でいてくれるよね」「もちろん

「良かった、そう言つてくれると思つた。嬉しいよ」

笑顔から一転、彼女はセリ少佐に上司の顔を見せる。

「時期の話は、後で私からあの人にするから。あの人ガ、決して味方ではないってことくらい、判つてしたことなのに」

「先手を打たれた形ですかね」

「悔しいけど、そう言うことになるわ。でも、あの程度の魔物ならケガをしててもサワダ中佐の敵じゃない」

外を見るティアスと、外を、セリ少佐は交互に見た。その視線に気付いたティアスが、再び彼に困ったような、照れたような顔を見せた。

「イズミ中佐も中央では表には出でこないけど、相当な使い手だから。彼も、この国の守護の一翼を担つてているわけだし」

言い訳のような台詞に、彼女の手を取り、問いつめてやりたくなつた。

第5話 【続・穴一いつ】

01

セリ少佐は、ティアスの言葉をびつ受け取ったのか、再び外を見つめていた。

「なんで、彼ほどの人が表に出でこないんでしょうね？この間、港に出てきたヤツの時も彼の動きはめざましかった。欲を出してもいい気がしますけど」

「……サワダ中佐のようだ、ってこと？」

「どうやら彼が高く評価しているのは、サワダではなくイズミのようだ。そう言えば、港での二人が人間離れした戦いを見せていたときも、セリ少佐は見ていたんだつたな。」

「そうですね。逆に、サワダ中佐は目立つのを嫌がるタイプに見えたけど。立場上仕方なく、と言つた風に見えます」

「でしょうね」

「逆に、イズミ中佐は上層部からの自身の扱いに対して、不満を持つているように見えましたけれど」

「それは間違つてないかもね。だけど、表に出てくる必要がないってことを、彼は何より理解してる。だから、今の状態に彼は自ら収まっている」

彼と彼女の言葉を受けたからかもしれない。それに、サワダがケガをしているからかもしれない。だけど、港での戦いの時より、イズミの強さを感じることが出来た。

カリン姫が捌ききれなかつただけの数より多い、液体のような、人型のような、不定形故のスピードの速さの魔物達を、改造した小

型のボウガンで次々に打づけていく。

「武器の改造も、彼が行っているのですか？」

「ほんとだね。ただ、スズオ力准将の力も大きいみたいよ？」

「ああ。あの……。でもあれ、見つかったらまずいですよね？」

よく見ると、イズミの持つボウガンは、ただ「ボウガン」の形をしている拳銃のようでもあった。この世界で歴史の研究が禁止されているのは知つてたけど、もしかして武器も制限されてるのか？

『本当の理由は？』

『抑制のため』

なんでセリ少佐は「まずい」って言つたのか。この人達は、監査に来る立場のはずなのに。

中止の目的を、吐き捨てる彼女は。

『ゴウトは、私の味方でいてくれるよね』

彼女は一体、何を考えてる？ オレはどうしたらいい？

『ごめんな。多分、振り回されると困ります』

それに、ミハマ……は……？

今、オレ、結構とんでもない会話を聞いていて、とんでもない立場に立たされてる気がする。

オレも振り回されてるけど、でも、ミハマも振り回されてないか？ オレはこんなに話を聞いてるけど、あいつは知らないんじゃないのか？

それに、ミハマが信用してるイズミやサワダだって……。仮に、

あいつらが本当にそりゃうように、ミハマのために全て行っていたとしても、それが全て彼のためになるとは限らないんじゃ？

「……コウタ、心配しないで。大丈夫よ？」

「え？」

「あなたを世話をしてくれる、ミハマに恩を感じているんでしょう？だから、彼が心配なんでしょう？」

また彼女は座り込んだまま、オレの腕に触れた。

「……うん。でも」

「大丈夫よ、悪いようにはしないわ」

なんか、引っかかる言い方だけど。大丈夫なのかな。でも、彼女の味方でいるつて、オレは言った。

「白か黒かなんて、はっきり割り切れるものじゃないでしょ？」

「うん」

「だから、みんなたつた一つ、拠り所を求めてるの。それが、例えば神様だつたり、お金だつたり、他の人だつたり、自分だつたりね」

「……拠り所？」

「そう。例えば、サワダ中佐やシンの拠り所は、ミハマよね。私もそう言う存在はあるし、そこにいるコウタにも、拠り所はある」「ティアスじやなくて？」

その問いに、彼女は黙っているだけだった。

「でも、姫も今は、オレの拠り所ですけどね」

「そう？」

彼の台詞が気遣いなのか本音なのか、オレには判らなかつたけれど。ティアスは少しだけ嬉しそうにしていた。

「「ウタ、良いから
「え？でも？」

僅かに体を動かしたセリ少佐を、ティアスが制した。彼の疑問の言葉とほぼ同時に、中にサワダが入ってきた。オレ達と距離を保ち、入口近くに立つたまま、こちらを見ていた。

「……セリ少佐
「「Jの方を責めるおつもりですか？」

この人、直球だな……。突然そんなこと言われたら、戸惑つか、反射的に怒るか。サワダはどうちだ？

「……責めるしかないだろう。ただ、判断はオレがするわけじゃない

サワダはサワダで、直球で攻撃してきたセリ少佐を無視して、ティアスを見ていた。

「「ウタ、この人、判つてたのよ？」
「え？」

思わず、声を漏らしてしまった。だけど、誰もオレの方を向くことはなかつた。だって、ティアスは今、サワダが彼女のことを知ってるつて、そう言つたんだぞ？それつて気付いてたつてことなのか？それとも……

「だけど、確実な証拠があるわけではなかった。そうでしょうか?」

サワダは、彼女の言葉に頷きもせず、ただ彼女を見つめていた。

「……シンのことは……」

「シンはシンで、あなたが疑う以上のことを言わなかつたから、痺れを切らした。そうじゃないの?」

「それは……拡大解釈以外の何者でもない。オレは、そんなつまじやないし、そんな綺麗なことを言つつもりもない」

彼女から田を逸らし、吐き捨てるように走った彼を、彼女は真っ直ぐに見つめる。

なんだよ、これ。ティアスのこの態度。なんなんだよ。

「もうすぐ、ミハマ達が来る。どうせお前はカリンにも疑われてた。ただ、何者かはつきりしただけだ」

「……はつきり?」

彼女の苦笑いに、サワダは溜息をつく。彼が、空いた壁の入口から、じりじり近付いてくることはなかつたけど。

「はつきりしてる。お前が、あの中央の薬師だつてことは」「名前も、顔もない女の、何がはつきりしたというの?」

「ここに、お前という存在がいれば充分だ。名前なんかあらつて無かるつと。顔すら必要ないかもな、ミハマことつてみたら」

「いや、顔は……見えるし。なんかもう、サワダはミハマの」とばっかり言つてて気持ちが悪いな。依存しそぎだつての。

「ミハマも、最初から気付いてた?あなたが気付いていたころから

「いや……しばらくしてからだと思つ。多分」

「なんで、私だって思ったの、あなただけは最初から。私は楽師としては、あなたの前では戦つたことはなかつたのに」

彼女がここに来たとき。魔物に襲われ、サワダが彼女を助けたとき。彼は彼女のことを「戦える」からこそ「疑わしい」と言つていた。けれど、それが直接楽師へつながつていたわけではないってことか？

「……何となく。だけど、カリンはお前の動きで疑つていた。『誰かに似てる』って。ミハマも……」

「他の人のことは聞いてないよ」

サワダはただ、黙つてこちらを見ていた。

02

「君の言葉を聞きたい」

座り込んだまま、彼女は真っ直ぐ彼を見つめた。その緊張感が、オレを潰す。

やつぱり、何もなかつたつて言われても、彼のことなどをどうとも思つてないと言われても、それは信じられなかつた。オレに触れたはずの彼女は、どうしてこんなに真っ直ぐ彼を見つめるのか。

「姫。オレはこれで。あなたも人が悪い……」

「そうね」

今度は、ティアスも彼が立ち去るのを止めなかつた。彼が音もなく消えたと同時に、ミハマとイズミが、サワダの後ろから現れた。それにしたつて、「人が悪い」つて。セリ少佐には似合わない言葉だな。

「テツちゃん、こんな所に突つ立つてると邪魔なんですけど。途中でいなくなるし」

憎まれ口を叩くイズミに、隣にいたミハマも苦笑いをしていた。その様子をティアスは見ているかとも思つたが、大きく溜息をついて、膝に顔を埋めていた。

真つ直ぐサワダに何かを求めるようこ、強い目をしていた彼女とは、まるで別人のようだった

「五月蠅い。元々オレはフォローだけだつて言つただろうが。処理はしてきたのか？」

ティアスに駆け寄るひつとすみミハマの後ろから、イズミに促される形で一人もゆっくりこちらへ寄つてきた。ミハマは彼女の側に跪き、繕する声を掛けた。

「親衛隊が來たし、カントウの護衛の人達も來たから。今じろ、警備隊も來たけど、中庭に行つてもらつた」

「中庭つて？」

思わず突つ込んだオレの言葉に、珍しくイズミが応えてくれた。

「あの魔物は、三位一体で行動するんだよ。こっちに一体来て、中庭に一体いた。だからこそ、そんなに脅威もなかつたわけだけど」

「妙だな。バラで行動するなんて。こないだも一体しかいなかつたし」

疑問を述べたサワダが一瞬、彼女を見たような気がした。気のせいなら良いけど。

おかしいだろ？。なんで魔物の行動のこと、彼女を見る必要がある？

「ティアス。悪いけど、オレ達は見てたんだ」

彼女に確認をせんようと、ミハマはそう言った。真っ直ぐ見つめて。彼女もまた、彼を真っ直ぐ見つめ返していた。

「……ごめん。言えなかつた」

「言えなかつた？」

まるで子供のような彼女の言葉を彼も繰り返す。彼女の謝罪の言葉に、彼は一体何を思ったのか。

ミハマに任せているのか、突っ込むかと思ったイズミもサワダも、後ろから見守るだけだった。

「君たちが、少しずつ感じてきてたこと、判つてた」

ティアスもまた、オレと同じ不安に似たものを持っていたのだと。だけど彼女は、オレにも、もちろん彼らにも、彼女の部下にも言えなかつたんだ。

ミハマはただ黙つて彼女を見つめていた。だけどその皿には、不思議と威圧感のようなものはなかつた。

「そのために、影で動いていることも知つてた」

彼女の視線の先には、イズミとサワダ。影で動いていたのはもちろんイズミだろう。でも、もしかしたら、サワダもかもしれない。影で動いていたからこそ、二人がこっそり会っているように見えたのかかもしれない。

いや、それがオレの妄想でしかないことを、オレはよく判つてゐるはずだ。イズミがいる。

『テツが、ホントの所どう考へてゐるか判らないし。彼女も何? テツちゃん、心配した?』

イズミの台詞が、オレの不安を、心配を、現実化していく。目の前の彼女の行動と台詞の意味が、もうそこしか指し示さなくなつてきていふ。

なんでオレは判つてゐんやせに、それを必死に否定しようとしてるんだ?

『コウトは、私の味方でいてくれるよね』

オレだけは彼女の味方でいる。彼女が言つことを信じたい。
きっかけはオレのいた時代の彼女かもしれないけど。だけど、オレと秘密を共有している、オレに味方でいて欲しいと言つてくれた、目の前にいる彼女を……。

多分、どうしようもないくらい好きになつてるんだ、オレは。

「ティアス。良かつたら事情を話してくれる? もしかしたら、オレ達は力になれるかもしないよ?」

「……力になる? 私の?」

「力になる」と言つたミハマの真意は判らない。だけど、思いは

判る。オレと同じなんだ。彼もきっと。

ミハマはフラットで、生々しさもなくて、妙に綺麗だから判らなかつたけれど。だけど、彼の一言一言に籠められた思いが、今ならよく理解できる。

「バカなこと言わないで。敵か味方かも判らないのに? むしろ……」

彼女は中王の手のものだ。中王の支配下であるオワリ国の中王が、突然、笑い始めた。

それにつられたわけではないのだろうが、何故かイズミとサワダも笑っていた。

「なんでみんなして笑うかな」

「別に……ミハマらしいなって思つただけよ。怒らないで」

むつとした顔のミハマをフォローしたのは、ティアスだった。まるで、彼のことをよく知っているイズミが詎つような台詞だったことに、オレは驚いていた。

ついさっき、テラスで並ぶ二人を見たときに感じた綺麗なものを、再び見せつけられているようだった。

彼が彼女を思いやり、彼女が彼を理解している。まるで理想的なカップルのようだった。綺麗な映画のようだと思つていたけれど、今は綺麗すぎて不愉快になつた。

「でも、甘えられないよ」

「甘えろって言つてるわけじゃないよ。君に力を貸すこと」と、オレ達にもメリットがあるなら、それは対等な関係だと思つけど」

「そうだね。」とティアスはまた笑う。今度は悲しげに。

「君の後ろに立つ人たちには、その台詞を受け入れられるの?..」「愚問だな、ティアちゃん。こんな予想の範囲内でしょう。うちの王子様の台詞としちゃ」

座り込む二人の側に寄り、同じ目線になるよう屈んで笑つて見せたのはイズミだった。サワダは彼らから距離をとったまま動かなかつたけど、大きく溜息をつきながら頷いていた。イズミが笑つてることは何とも思わないのに、サワダが微笑んでいたことは妙に腹が立つた。胸を撫で下ろしているような、その態度が。

「いいんじゃない? ユノちゃんも、めんどくさがつてたし。だからこそ、テツちゃんが一旦出した『疑問』を、押し込めたことを不審がつてたけど……」

押し始めた?

思わず聞き返すとこだつたけど、判りやすくティアスとサワダが動搖した表情を見せたので、成り行きを見守ることにした。

「……オレは別にそんな
「そう言つて、後でやつてよ」

ミハマは特に強く言ったわけではなかつたのだが、視線は真つ直ぐ一人を射抜いてた。意志のある強い瞳に、サワダもイズミも小さ

くなってしまった。最初のころは、この怪獣のような連中が、言ひ方は悪いけど、ミハマのような綺麗なだけの男に従つてゐるのか判らなかつたけれど、今は少しだけ判る。

彼は再び、ティアスを正面から見つめる。こじろなしか、彼女が一瞬震えたように思えた。

「ティアス、オレはお互に様だと思つてゐるよ。君はオレ達に隠し事をしてた、暗躍もしてたかもしれない、敵として動いていたかもしない。だけど君の立場の微妙さは判つてゐるつもりだし、手をさしひべてくれたことも知つてゐる。オレは、誰がどう思おうと中央の楽師に感謝してゐる。この間のバスの件もそうだ。それに、中央に行つたときの君の話、ピアノと歌。それから、テツのことも」

「オレは……」

とサワダは言ひ掛けたくは、元は一警されただけで黙つてしまつた。

「別に、サワダ中佐のことば……」

樂師がサワダに優しかったことは、オレだって知つてゐる。なのにどうして、あえて否定する言葉を出す？

「感謝しているよ」

ミハマの言葉に、彼女は目を逸らしてしまつた。

その後、不思議なことに、ミハマは彼女に猶予を与えた。明日の昼、話をしたいと告げた後、サワダとイズミを伴ってカリン姫の元へ向かった。オレにもお咎め無し（イズミ）が何か言ったかも知れないけど）。

彼は一体、彼女をどうしたいんだろう。

オレと二人、取り残された彼女の元へ、今度はニイジマがセリ少佐を連れて現れた。階級的にはニイジマの方が下のはずなんだけど、どうしてそう言う構図になるのか。

ちょうどサワダとイズミが立っていた場所に一人は立っていた。座り込んだままのオレ達と少し距離をとっている形で。

「もしかして、話し合いの時間をくれたってことか？あの王子様は」

どこかで、一部始終を見ていたのだろう。ニイジマが、オレとティアスを交互に眺めながら、ぼやいた。

「でしょう……ホント

ティアスの苦笑いには悪意が感じられなかつた。

「変わつてるつて？そんな一言ですますまれるのか、これ。なに考え

てんだ？」

「なに怒つてんの？」

「どうして良いか判らんからー。」「

「でしょう。私も判らないわ」

一人して溜息をついた。

「どうすんだ？カナさんも来てるし。さつき、応接の方を見に行つたら、待たされてイライラしてた」

「心配してくれてるのはありがたいけど、わざわざ一人で前乗りしてくることはないでしょう。いつものことだけど、どんな手を使ったんだか」

「イジマの後ろで、セリ少佐は『ノーノット』いるだけだった。なに考へてるんだろ。

それに、オレがどうしたらい?」

「あの王子が味方かどつかって言つのは、ビックリだよ」

「2割……」

「少な!」

「違うわよ。敵である確率よ。あの子は信用しても良ことと思つ。サワダ中佐も……」

そこまで言つて、バツが悪そうな顔して俯いた。そつまつ顔されると、オレは口出しできないんですけど。

まあ、オレは嫌われたくないから出来ないけど、『イジマは口を出せるみたいだた。

「その、サワダ中佐だけど。お前、何、出来てんの?」

「もつと他の聞き方はないわけ?」

「ないな。つーか、他の聞き方つてなんだ。めんどくせー」

彼女は『イジマを睨み付けたまま、黙ってしまった。

「姫。どうなんですか?」

「どう、って何よ。『ウタまで……。大丈夫よ、何もない

なんでセリ少佐に対して、そんな風に弁解する?』——イジマと違うだろ、その態度は。一人は同じようにティアスの部下じゃないの

か？！

こんな所に伏兵が……。サワダやミハマにばかり気を取られていたけど、この人もか？しかも、ティアスに近い分タチが悪い。

「コウトまで。しつこいわよ」

オレの視線を不愉快に思つたのか、怒られてしまった。

「はつきりしないよ、めんどくさいな。それでどう行動するかが変わつてくるだらうが？あんたがどうしたいかも」

怒られるることにも、むつとされることにも慣れているのか、ニイジマは彼女の態度を気にする風でもなく、続けた。

「関係ないでしょ？が、そんなことば」

「じゃあ、とりえず、あの王子様とその護衛部隊はどうする気だ？敵か？味方か？どうこうつもりでオレ達は動くんだ？」

「そんなのは、転んでみなければ判らないよ。私の味方は、あんた達しかいないんだから」

彼女の世界の狭さに、狭くせざるえない彼女に、言いようのない焦燥感を覚えた。もしかしたら、ニイジマも同じ気持ちだったかもしれない。

「……2割……減らす？増やす？」

少しだけ柔らかい態度で、彼女に決断を迫る。

「その価値はある？」

柔らかくはなつたけれど、その内容は、酷いものだつた。

「減らしましょ。その価値は未知数だけれど。この国があいつにとつて、何か大きな価値を持つてるのは確かだもの。取引材料になるかもしない」

「だろうな。ここ最近の執着は、ちょっと異常だもんな。意味が判らん」

ティアス達が警戒してゐる相手つて……

「……あいつって? もしかして……」

オレの質問には答えず、彼女は黙つて、壁の隙間から東の空を見つめた。

「だけど、氣をつけて。あの子達も決して、一枚岩ではないから。ミハマだけで良い」

「みたいだな。さつきの様子からすると。氣をつけとくわ。理解した? コウタ?」

「何を?」と言つた顔でニイジマに微笑み返すセリ少佐。この人、ホントに優秀なのが、ますます疑問は大きくなる……。

「明日は、そのつもりで話を進めるから。そろそろ戻るわ。カナにも姿を見せておかないとい、心配してゐるでしょ?」

立ち上がり、オレにも立つよう促す彼女の表情には、いつもの自信が戻つていた。気が強く、真っ直ぐな彼女が。

いや……、「いつも」の?

オレは久しく、彼女のこんな顔を見たことがあつたか? 最近の彼

女は、こんな風だったか？

でもあの覆面の中は、いつもこういつ顔をしていたのだろう。それは容易に予想できた。

それが怖くもあり、嬉しくもあった。彼女の強さと弱さが、良くも悪くもオレを動かしたことを実感する。

04

「ティアス……。君は一体、何者なの？なんで、中央に……」

オレの持つた当然の疑問を、彼女は笑顔で流した。答えてくれる気はないらしい。

だつて、何となくの想像しかできないだろ？」「イジマやセリ少佐が彼女のこと姫と呼ぶことも、中央正規軍に属しながら、あの態度なのも。オレは何も知らないから、それ以上想像することすら出来ない。

だからなのか？今となつては、サワダが彼女の正体を知つていたのは明白だ。知つていて、彼は、彼の仲間であるはずの護衛部隊の前で、それを言うことを途中からやめたと、彼らはそう言つていた。その理由はどうしてなんだ？サワダと、ティアスの間に何かあつたと考えるイズミの方が、自然じゃないか。

おそらくイズミは、オレ以上に何かを見ているはずだ。

「ゴウトはもう、部屋に戻つた方がいいわ？疲れたでしょ？」

「姫は、どうなさいます？」

「サワダ議員が迎えに来るわ。……きっとね」

その言葉を受け、二イジマとセリ少佐はどこへともなく消えた。

それと入れ替えで、彼女の言葉通り、サワダ議員が現れた。テラスから歩いて。

「こんな所で何をしている？挨拶をしに戻つてくれないか。息子も待つてるのでね」

「……白々しいわ」

「え」

思わず出でしまった言葉を飲み込むしかなかつた。彼女は隠し持つていたあのジャックナイフを、サワダ議員に向けていたのだから。

「彼は、元々知つていた？君のこと」

ナイフを眼前に突きつけられているにも関わらず、彼は顔色一つ変えずにオレのことを彼女に聞いた。見ているオレの方がどきどきしてゐんじやないだらうか。動くことが出来なかつた。

「顔を……知られていたから」

「へえ……」

ちらつと、サワダ議員がオレを見た。見たつて言うより、值踏みされているというか。飲まれそうな雰囲気を醸し出す彼が怖かつた。

「別に、この子が何かを知つているというわけではないけれどね。残念ながら。さつと行きましょ」

ナイフをおさめ、彼女はテラスに出て、サワダ議員に謁見室の方へ戻るよう促すが、彼の視線はオレに注がれたままだつた。

「ユウト。戻りなさい」

「イジマ達にほしても、オレに対してはしなかつた強めの態度で、彼女はオレに動くよう命令した。オレはサワダ議員に飲まれそうなまま、動けなくなつていた体を無理矢理動かし、彼女の後へついていく。

「戻る必要はないだらう。君とももう少し話がしてみたいものだ。一緒に来たまえ」

「必要ないわ」

「それは君にとつてだらう。私にとつて、王の御前は、重要な場所だ。君にとつてオトナシの前がそうであるようにね」

彼女が彼を睨み続けているにも関わらず、彼はそれを無視してテラスの入口から廊下へ戻った。渋々ついていく彼女の後ろに、オレもついていった。なんかよく判らないけど、目を付けられてしまつたようだし……。

「……なあ、ティアス。オトナシって？誰？」

「中王よ」

呼び捨てかよ……。だからサカキって言うあの酔っぱらいみたいなおっさんとも仲良かつたのかな。

でもおかしな話だ。同じように仲の良いといふか、知り合いつぱいあの酔っぱらいは、中王正規軍で元帥なんて地位についているのに、サワダの父親は地方で元老院議員だなんて。いくら王の妹と結婚したからって中央に入れればいい話だ。

実は、仲が悪いとか？でも、それならサカキ元帥とも仲が悪いかな？

「……ユウト、『めんね。巻き込んでしまつて。疲れてるでしょ？』

「え? いや…… オレは別に。大丈夫だけ?」

さつきは壁の向こうから見ていた、初めて歩く長い廊下を並んで歩きながら、彼女はオレを気遣ってくれた。その優しさに、やつぱりオレは期待をしてしまつ。誰にでも、そつだと判つても。

「……アイハウヘビツヒト?」

謁見の間の前にある小部屋には、サワダが待つていた。汚れていった上着だけ着替えたらしく、妙に綺麗だつた。

「オレが連れてきたんだ。王子はビツヒト?」

「中にはいます。…… オレは……」

「お前は、そういうればいい。オレにも、あの王子にもついていれば」

サワダが沈んだ顔を見せる。もうすっかり見慣れてしまつたけれど。

オレの知つてる沢田は、もっと偉そつだつたし、もっと不羨だつた。纖細な部分もあつたけれど。バカみたいなことしか喋つてなかつた氣がするし、ティアスのことを除けば、オレはあいつのことが嫌いじやなかつた。

だけど、今オレの目の前にいるサワダは、嫌いじやないけど、むしろ好きかもしないけど、ちょっと重くてめんどくさい。しかも、それを口にすることも適わないといった感じだ。重すぎて。

「……王子にも、あなたにも?」
「どうして、何かおかしいか?」

ティアスの疑問に、サワダ議員は疑問で返した。

「おかしいから言われても……。おかしいことだらけじゃない。意味が判らない。そんなこと言われたら、困るのは……」

彼女の示すとおり、サワダだ。自分の息子を困らせて、何が樂しいんだか。ちょっとかわいそうな気がする。

だけど彼女の言葉に、サワダもその父親も答えなかつた。

謁見の間には、王が玉座に座り、その横にミハマが立ち、一段下がつてシュウジさんが控え、それと対称の位置に元老院のナカタ議員が立つていた。彼らの前には中央正規軍のサエキ大尉が一人で立つていた。

オレ、とんでもない位置に立つてないか？さつきまで、あの壁に向こうでイズミと一緒にこちらを覗いていたのに。きっと今も、あいつはこっちを見てるのに。

「ミハマ。彼はお前の客人ではなかつたか？」

オレのことを一言、そつ息子に聞いた王の言葉に、ミハマは表情一つ変えず、沈黙を通した。

その後、どんなすごいことが起こるかと思つたら、本当にただ王の前で、サエキ大尉と挨拶を交わしただけだった。拍子抜けするほどあつとこう聞だつた。

だけど、オレのことをミハマに聞いたあの王の台詞。多分あれが、全てなんだろう。誰が誰の味方で、誰が誰の影響を受けるのか。オレがここに立つていることは、もしかしたらミハマに対して、オレが思つてている以上に悪い影響を及ぼすことになつてしまつんじやないのか？今は、何も判らないけれど。

きつとこを出たら、もうすぐにでも終わつてしまいそうだけれど、イズミにまたオレは怒られるのだろう。いや、怒られるどころ

が、無視されるかもしれない。少しだけ態度が柔らかくなつたと思つてたのに、怖すぎる。オレはあいつが怖い。

あつとこづ間に終わつた挨拶の後、サワダ父がオレ達に外に出るように促す。それと同じく、別の入口からミハマとシユウジさんも出ていった。サワダ父も一緒に立ち去ろうとしているのに、ナカタ議員が王に話している言葉の中に、サワダ父の名が何度も出てきていたのが聞こえた。良く聞き取れなかつたが、サワダ父のことを誓めているのは判つた。

ものすごく遠回しではあつたけれど、ミハマが気が利かないから、サワダ父が気を使つたとかなんとか。おつさん、いい年してんだから、陰口叩いてんじやねえよつて、叫んでやりたかつた。ミハマはそんなんじやない……と思つのに。

一緒に出てきたティアスにも、そしてサワダにも、聞こえているはずだつた。オレに聞こえてるんだから。だけど、彼らは何も言わなかつた。

特にサワダは、彼の前では借りてきた猫のようだつた。いや、普段もなんかそんな感じの時はあるんだけど、気持ちが悪い。

「……私はこれで。コウトも一緒に戻りましょ? 疲れたでしょ?」

オレに声をかけてくれた彼女の気遣いに、どうしようもなく心が動く。やっぱりティアスは優しいし、オレのことを考えてくれてる。だけどティアス自身も一刻も早く、この場を離れたかつたのかもしない。謁見の間の前の小部屋を出すぐとに、呴くよじにそう告げると、サワダ父に挨拶もせずに立ち去りうとした。

「いや、アイハラくんと言つたつけ? 君は残つて。城を案内しよう。どうせ客室付近と王子の領域くらいしか知らないだろ? スズオくんの考えそなことだ」

「父上。アイハラは……」

「こんなバッジ一つじゃ、動きにくいんじやないかね？」

何か後ろ暗いことでもあるのか、止めに入ってくれたはずのサワダまで黙ってしまった。結局、このバッジつて、なんのかはよく知らないんだよな。結構自由に動けるけど。サワダ父の言つてることも、ちょっと氣になるかも。

「サワダ議員。殿下が、彼を呼んでおりますので。今日せび遠慮いただけますか?」

出た！…恐怖の大王！

多分、またあの壁の向こうから覗いていたんだろう。しれっとした顔で窓際にある壁の方からやってきたイズミが、オレとサワダ議員の間に立ちふさがる。怖すぎる…！

サワダ父は、苦笑いを見せると、無言で引き下がり、廊下を歩いて立ち去った。

なんでだ？ミハマが呼んでるからってこと、無理強いしても仕方がないってこと？つーか、なんでオレが彼と話をする機会を、イズミまで止めに来た？

サワダだけなら……オレに氣を使つてくれたと思えたけれど。オレの胸で鈍く光るバッジも、言葉も行動も判らないイズミのことも、結局何も教えてくれないシユウジさんのこと、オレは人の一言で、全てを疑つてしまいそうだった。

夜になつたといつのに、相変わらず空は、ただただ薄暗かつた。

飲み込まれそうで気持ちが悪かった。気持ち悪いと判つていてのに、一人で部屋にいることが耐えられなくなつて、ベランダに出た。

そう言つたのはサワダだつた。イズミはそれを見ながら、また彼を笑つた。仏頂面のくせに親切なサワダと、笑顔のくせに人を突き放すイズミ。随分慣れてきたけど、いや、慣れてきたからこそ、彼らの秘めているものを感じ取れるようになつてきた。

最初のころより、彼らを信用してゐるし、疑つてもいる。

このバッジが何を意味するのか、オレは何も知らない。あいつらは悪いヤツらじゃないのも知つてゐるけど、オレが彼らにとつて荷物にはなつても、利益をもたらす存在じゃないのも判つてゐる。だからこその距離感だと言つことも。だけど、あんな言われかたをしたら、氣になるだろう。

オレに知られたくないこともたくさんあるだらう。オレだつてあいつらの中に入つていけるとも思えないし、行こうとも思わない。だけど、分厚い壁を感じてるのも確かだし、それが怖いのも確かだ。ティアスは、どうだらう。彼女だけは、オレを受け入れてくれてる氣がしたけれど。だけど、触ることも適わないのに？

中庭の様子なんてほとんど分からぬことは承知で、下を覗き込んだ。高くて足がすくみそうになつていたのは、最初だけだつた。こんなコトはどうでも良いことなんだ、今のオレには。

一瞬、あの中庭の広場に人影が見えた気がした。不愉快で、吐き気がして、悔しくて震えているのに、オレは部屋を飛び出してエレベーターに乗つていた。この日で見ないと、現場を押さえないといけない気がしていた。

2階の窓から、一人いることを確認して中庭に向かつた。出られるかどうかは判らなかつた。だけど、通用口に立つ警備員にバッジ

を見せたら、案外あつさり通してくれた。

絶対、あれはサワダとティアスだった。だけど、違っていたら？ オレはそれを望んでいるんじゃないのか？だから、確証が欲しいのか？

「夜中は魔物が出るだ？」

広場へ向かうオレを止めたのは、ニイジマだった。風が強く吹いて、木々を揺らす。その揺れで、彼の姿を一瞬見失ったと思つたら、オレの横に立つていた。

「……お前じい。じいをじいだと思つてるんだよ。お前は客人じゃないだろ？」

早く行かないといなくなつちやうかもしれないだろ？

「いや。明日辺りにでも、カナさんの部下としてこようかと思つてたんだが。オレ、じいじの隠密のこと苦手なんだよな、本来」

「出できたしな」

「言つなよ、もう。せんせん怒られたし。そもそも、じいじの仕事は「ウタ向きなんだよ」

「つーか、部下としてって、そんな簡単なもんか？予定になかったのに。何とか言う別の人があるんだろ？」

「西二ホン管理部のカツラ少尉相当官だよ。ほとんど研修生扱いだし、カナさんなら何とかするだろ」

なんとかつてなあ。やつ言つ問題か？

「てか、なんでこんな所にいるんだよ。部下として来るのは明日以降だろ？急にいろいろ変わりすぎたら、またこここの城の人たちが振

り回されるし?」

「姫の護衛だよ。夜中に出歩くからね。こないだもいたよ?」

そうなんだ。立派に隠密してゐる氣がするけど。

「……ティアスは?」

「何、姫に用だった? あつちの広場にいるや。一緒に行く?」

邪魔しに来たのかと思ったら、そう言つわけでもないのかな。

「いや。用があるわけじゃないけど……。あの子、一人?」

「一人だけど」

見間違えか……もしかして一緒にいたのは「イジマつてオチとか? いや、それはないか。今日はそうかもしぬないけど、昨夜は明らかにサワダだった。

「イズミ中佐とかに、見つかるだら~」んな風に出歩いてたら「いや、もう開き直るしかないだらうよ。今まであの人気がいたから見つからないようにって思つとホントに動きづらかったけど、もうばれてんなら、逆に気が楽だ。さつきなんか屋上で挨拶までしたつーの」

「なんか、イズミの顔が思い浮かぶ……あいつホント、そう言つときは超笑顔で人の悪いこと言いそつ」

「だよなあ。食えないよな。ただ……」

ちらりと、空を見上げた。その先には木が揺れていただけだったのだが。

「ただ?」

「『敵か味方が判らないから、仕方ないですよね』なんつってたけどな。まあ、その通りだと思うよ。今の状態では、オレもそうすることしかできないし」

「ティアスは、味方にしたがってたんだから、そう言えれば良かつたのに」

「いや、どうだろうな。必要ないし、必要なら姫が言つし。イズミ中佐自体は気にしてそうだけど、あそこの王子はそんなこと気にしないさそうだったからな。『敵か味方が判らない』つづーのは、王子の受け売りだつて言つてたからな」

他に誰もいない中庭を、ニイジマと二人で進む。

ニイジマがイズミに抱いた感想と、オレが彼に抱いた感想は、似て非なるものだった。オレは、あのイズミの考え方が不思議で、酷くミハマに依存しているようにしか見えなかつた。だけど、ニイジマはそんなことは当たり前のこととして受け取つていてるように見えた。立場の違ひなんだろうか。

広場のベンチに、ティアスは一人で座つていた。隣に誰か座つていたようなスペースを空けて。

「コウト、どうしたのこんな夜中に？」
「あ、うん……。隣、座つて良い?」

彼女は一瞬戸惑つた表情を見せたが、すぐに笑顔を見せてくれ、頷いた。だけど、彼女に触れられる距離までは近付かせてもらえないかった。ニイジマもいるし仕方ないかと思つたけど。

「あの後、サワダ議員に何が言われた?」

「え?あの後つて?会つてないよ。すぐに部屋に戻つたし」

誰とも会いたくなかったつて言つた。何も考えたくなくて、その

まま寝ちゃったんだよな。なんかここにいると、時間の感覚が狂うし。

「そうなんだ。田を付けられてたみたいだから、何か言われてないかと思って、ちょっと心配してたのよ。シンが間に入っていたみたいだけだ」「いだけだ」

良かつた。やつぱりティアスは、オレのことを心配してくれたんだ。立ち去ったと思ったけど、どこかでニイジマカセリ少佐が見えてくれたんだ。

「氣をつけてね。あの人のこと、全面的に信用するのは、なしだから……」
「……ナイフ、向けてたから? あれって、オレが思うに、ティアスとあの人って……」

裏で手を組んでたって考える方が妥当だらう。それはおそれく、あの魔物の襲撃に関するとか、ティアスの正体に関すること。彼女はそのオレの心を読みとったかのように、大きく溜息をついた後、少しだけオレに近付いて囁いた。

「今日の襲撃は、仕組まれたものよ。あの人と、私の手でね」「なんで?」「それが、オトナシの意志だからよ。判る? 猫がネズミを翻るようにな、様子を伺っている」

最後にとつて食つてしまおうと囁つことか。

「なんでそんなことに、彼も君も、加担をする羽目に?」「私は、ヤツの言うことを聞かざるをえない状況なのよ。私は捕ら

われてる」

「無理矢理協力させられてるってこと、中王に？何でそんなこと」「……国を、墓にすると脅されてる。それと引き替えに私はあそこにいる」

「それで、姫つて……。だけど、それつて」

少しおかしくないか？脅されてるって言つても、他にも方法があつたんじゃないのか？それに、彼女の周りにいるのは、皆中央でそれなりの地位についてる軍人ばかりだ。

「正確には、もう半分握られてるんだけどね」「握られてる？よく判らなーよ。この国を墓にしようとする」と、ティアスの国は違つてこと？

「そうね。少し違うかもね。中央と、この国と、私の国との関係のせいかな。私の国は、二ホンはないの。人がもういなくなつたと言われている大陸にあるのよ。北の話は聞いたでしょう？中央が北を封鎖してるのは、ここから人が外に出ていかないようにするため。だけど、あの先には国も人も存在している」

彼女の悲しい瞳が、強い意志に光る。淡淡と、抑揚もなく話をしてくれているけれど、彼女の背負つているものが重いのは充分すぎるくらい伝わった。

「なんでオレにその話をしてくれたの？」

「どうしてかな？」

「……オレが、サワダ議員に目を付けられたからだろ？」

彼女は黙つて微笑んだ。うそがつけない彼女に、オレは胸をなで下ろした。

彼女の国はあの大陸にあるといつ。一時期、それを疑つたこともあつた。

『空から来る魔物を統率する力を持つた一族が住んでると言われてますね。その昔、中王正規軍によつて追放され、奥地に追いやられたそうですよ。ですから、危険なため、現在はこの北の門という場所から先は許可がなければいけません』

あの、シュウジさんの言葉が、知識が本当なら、彼女はあの魔物達を統率する一族だと言つことになる。魔物の襲撃に関わつてはと言つたのは、彼女自身だ。

でも、それにはサワダ父も関わつてゐるし、中王の手引きもあつた（と思ひつ）。彼女が襲撃の実行犯ではないと信じたい。

『じつちの砂漠は？』

『かつては生き残りがいて、二ホンとも国交がありました。しかし、その国の跡地は中王に支配され、閉鎖されています』

……たぶん、じつちだ。じつちの国ならじつまが合ひついで！ ティアスが襲撃の実行犯の可能性も低くて、中王に協力をせざるを得ない、悲劇の姫君的シナリオの…！

だつて、あんなに優しくて良い子なのに。あんな悲しそうな顔をさせてるのには、絶対そう言つ理由があるはずだ。

オレのその思いに答えるように、彼女はオレを気遣い、「疲れるみたいだから早く寝たら？」と声をかけてくれる。確かにオレは

すごく疲れていたし、辛かつた。それを彼女が見ていてくれたと思ったら、それが嬉しくて仕方なかつた。だからオレは、彼女の言うとおり、部屋に戻ることにした。

疑問が残つていらないわけじゃない。どうして彼女はわざわざいじにいるのか。ニイジマと話をするためだとしても、不自然だろ？オレは確かに一人いるのを見てる。

どうしても腑に落ちなくて、オレは彼女たちに中庭を廻つてから戻ると告げ、その場を離れた。

遠ざかっていく彼女たちを、振り向いて確認したが、ニイジマは座ることなく、彼女のそばに立つたままだつた。それが、彼のあり方だと思ったら、ますますオレの不信感は募つていった。

広場を抜け、表玄関につながる、木々の生い茂る遊歩道を歩いていく。きちんと整備されていて、美しい庭だとは思う。

一手に分かれた一方の道の先には、温室らしきものもあつた。オレのいた時代のティアスが、植物園の話をしてくれたことを思い出していた。沢田は一緒だつたらしいけど、一人じゃないって言つていた。でも、そんなことは、どうでも良いことなんぢやないかと、その時もそう思つていたし、今もそう思つ。

この時代のあの二人が一緒にいる、あの姿の衝撃に比べたら。

温室の入り口付近に、人影が見えた気がした。オレ、うろうろしていたら、もしかして怒られるかな。守衛には止められなかつたけど、見ないフリして通り過ぎよつと……。もう一方の道を進み、玄関の方へ向かう。あつちから宮殿に戻ることつて出来るのかな？でも、なんかティアスのいた方に戻りにくいしな。

「くおらー！何してやがる、こんな時間に」

「うわ！でた！」

温室の前の人影が消えたと思ったら、イズミがオレの横に立っていた。コイツ、ホント怖い……。

「てか、イズミ何してんだよ！」

そう聞いてから、コイツがいるときは、ろくなコトはないってことを思いだして嫌な気分になった。

「仕事だよ。わざと戻るぞ。ついひりしてゐんじゃねえよ」

イズミがオレの背中を突き飛ばす。そのくせ、彼の視線はオレではなく、温室の方に注がれていた。

「サワ……」

「静かにしろ」

思わず声を出したオレの口を、イズミが無理矢理塞ぐ。オレも彼も同じモノを見ていた。

温室から出てきたのはサワダと、サトウアイリ。木々にかすみそつな距離から見ているにも関わらず、存在感のある彼女と、消えてしまったようなサワダが、妙に印象的だった。

「……あれも、内緒？」

「うーん……」

仲睦まじいとは言いがたい二人の様子を伺いながら、イズミは悪巧みをしているときの顔を見せた。

「本人以外はみんな知ってるからね」

「本人。あの本人？」

サワダが消えてしまつんじゃないかと、本気で心配してしまつくらい、彼の存在感はなくなつていった。サトウさんとの力関係によるものだろうか？

でも、オレの知ってる沢田は、佐藤さんに頭が上がらなかつたし、その理由もわかりやすいものだつた。先生だつたし、惚れてたし。それ自体は本人含めて周知の事実だつた。ティアスでさえもそう言つていたから。

「良いから、行くぞ。うつかり見つかっちゃつたらバツが悪いだろ？」

イズミに押され、その場から逃げるよつに立ち去る。

でも、本人以外みんな知つてゐるつて言つのは、どうこうことだ？あの一人がこそそこ会つてゐるつてコトをか？それにしても、護衛部隊のサトウアイリに対するあの嫌悪感と言つたら無いだろ？いや、それ以前に矛盾だらけだし。

ティアスも、これを知つてゐのか？だつてこんな時間に（明るいけど）わざわざ中庭で危険を冒して会つ必要のある関係なんて言つたら……。

「そう言えども、中庭つて、魔物が来るつてこと？今日だつて、來たんだろ？」

「え？ああ。今日くらいのレベルのヤツだつたら入つてこれるかな。でも、この辺りには来れないよ。結界の張られている範囲が決まつてるんだ」

その言葉を指し示すかのよつて、イズミは玄関の方へ向かうのこ、あえて遠回りの道を選んだ。

「じゃ、危ないんじゃんよー」こんな所で齧念とかしてるとナビ。なんで全体に張らない?!

「地形とか、形とかで決まってるんだよ。あと、あえて隙を作つてある部分もあるし。テツは知ってるから、そんなところにはわざわざ行かないって。それにしてもお前ね……」

「なんだよ?」

なんか文句があるつてか、これ以上!?

「方言、酷いよね。だからとりあえず、中王関係ではないと判断されたんだけどさ」

「酷いって!?」

いや、なんかプラスの方向に働いたみたいだけれど、だけどなんか失礼!

「そうでもないって! イズミも酷い… 分。しかも今、関係ないし!?

「いや、じゃんだらりん、うつさいからな」

「つーか、方言残つてんの?」

「残つてるだろうよ。中王が現れてしづらぐの間、各地は隔絶された状況だつたらしいから。まあ、何百年も前のことだし、オレにはよく判らないけど。妙な反作用みたいなもんだと理解してるけど」

「反作用……? 中王が、昔のものを排除しようとすることに対すること?」

あからさまに「喋りすぎた」と言つた顔をした。だけど、オレに對してではなかつたらしい。彼は辺りを見渡し、オレに顔を近付け囁く。

「だつておかしいだろ？何でこの国は、わざわざ昔のものを残そうとするのか。だつて、中身はきちんと進化してるので、外側だけ。

文化としておかしいだろ？あの地殻変動以前とは、環境そのものが変わつてゐるに」

「……どつちが、反作用だよ。中王が古いものを排除しようとすること？それとも……」

判らなくなつてきた。この時代、この世界で何があるのか。あの地殻変動以来、何があつたんだ。

オレは、あの地殻変動以前の人間だ。地殻変動も知らない。

どんなに地殻変動で、未来が判つていても、それでも、少しの時間でも、オレは元の時代の方がいい。

だけど、彼女の存在が、オレの心をここに残す。

「どつちだらうね。オレには、あんな風に人の上に立つて、人民の頭を踏んづけようとしてる奴の気持ちなんかわからんねえさ」「つーか、中王って幾つなんだよ。おかしいだろ？」

「今の中王は多分、サワダテッキと変わらんはずだけど？まあ、あの人は侵略者だからな。本来の中王とは違つて言われてるけど……オレには一緒にしか思えねえな」

もしかしてオレ、結構重い話をイズミから聞いてる？

「なんだよ。にやにやするなよ、気持ち悪い」

「いや、イズミのくせに、親切だな、と思って」

「……話しそぎたな。何か哀れだつたからな」

哀れつて……。オレのどつちが？！哀れつて言つなら、今さらどううが！オレがここに拾われたときに、もっと大事にしりよ、もう！

「そういや、お前、最初から二イジマ中尉を知つてたよな
え？まあ、知つてたつづーか……」

「そつくりさん。お前曰くの『お友達』の中にいたつてことだろ？」

「写真持つてたし」

「でも、違う人なんだろ？」

「もちろん。だけど、そつちのそつくりさんなら判るんだけどさ、
二イジマ中尉も方言きつついよな」

そういうえば、何かやつぱりオレの知つてる新島と混同してしまう
から、気にならなかつたけど、確かにこつちの二イジマがそうだと
したら、おかしいかも。気にしたことがなかつただけかもしれない
けど。

「カントウの人じやないつてこと？」

いや、そもそも、ティアスの側の人でもないつてことだ。ティア
スはだつて、あの大陸から來たつて言つてたんだから。

「まあ、出身はそつかもね。しかも結構長いことオワリにいたんじ
やねえのかな。そうなると、ティアちゃんの出身も怪しくなつてく
るな。明日になれば判ることだけ」

ティアスはどこまで、『トイシラ』を信用してゐんだろう。敵である
可能性を8割だと言つた、『トイシラ』を。

オレは、彼らよりは信用されてゐる。それで良い。

結局、眠れないままミハマの元へ行き、いつものように護衛部隊のみんなで一緒に朝食をとるための部屋に入った。ただミナミさんは未だ調子が悪いらしく、いなかつた。彼女を見舞っていたであろうイズミの到着を待つて、朝食が始まった。

さすがに2晩続けて徹夜はきついはずなのに、不思議と眠気はなかつた。

だけど頭はぼんやりとしてもやがかかっていた。ミハマを囲む姿が最後の晚餐だとしたら、一体誰が裏切り者なのか等とバカなことを考えてしまふ程度には、徹夜明けってやつは、ろくなことを考えない。

「どうですか?」
「どうです?」
「どうですか?」

『いつも、この時代を満喫してみたらどうですか?』

シコウジさんがいつものように新聞を読みながらも、珍しくオレに気を使ってくれたのに。どうして、裏があると考えてしまうのか。そしてその台詞は、最初からずっと一貫していたことにも、何で今さら気付いてしまうのか。

彼はすっとオレに対し、「帰ることへの希望」より、「この時代への希望」へ目を向けさせようとしていたじゃないか?
オレの朦朧とした頭が、そう思わせているのか?

「……オレの」と、何か判ったんですか?何でこんなことになつたのか、とか……」

「現在調査中です。私もあまりおおっぴらに動けないんで、勘弁してくださいよ」

何か誤魔化された気がするな……。

「シユウジのヤツ、ああ見えてちゃんと動いてるからや。あんまり突っ込んでやるなよ」

『「滅びる」ことが判つてゐる時代』に戻つてどつする?』

シユウジさんのフォローをするサワダの言葉にすら、別の意図を感じてしまう。実は何もしないんじやないかとか、何もしないのをサワダも知つていて、あんなフォローなのか、とか……。

大体、ティアスとのことをあんなに隠してゐんだから。それは、彼女もそつかもしれないけど、意図が判らないし。

「シユウジさん、そんな安請け合いでたわけ? もう少し、自分の力量を計つた方が……」

「安請け合いしたわけではありませんよ。流れでそうなつたんです。失礼な」と言つんじやありません。そんなこと、判らないでしが?』

『「なんでも。平和のためさ。何事も、タイミングが肝心なわけよ』

「コイツだ。この男が究極にわざとらしい。ぐらぐらして、だけど全てを影で覗いてる。

「でも、怖いけど、嫌いになれやしない。どうしてだ? この男がずるいから?」

隣に座る、笑顔のイツキさんだけが、懇いのオアシスだよな……。敵に回したら本気で怖そつたけど。つーか。敵に回してゐのかどうかもよく判らないし。

ミナミさんも敵か味方かつづーたら、中立ではいてくれるけど、オレの優先順位はかなり低そうだしな。ミハマがいてサワダがいて

…・つてなるだらうし。

「あ、そうだ。アイハラ」

「……なに?」

ミハマは……どうなんだろう。彼は綺麗だ。だけど、ここでは誰よりも強い。その強さなんてオレには判らないけれど。だけど、彼がこの中で、唯一オレをフリットに見てくれているような気はしている。

『2割……敵である確率よ。あの子は信用しても良いと思つ』

ティアスの評価も高かつたし。

「今日、3時からティアスと話をしようと思つたけど。君も来る?』

『オレは君の味方でいるつもりだけど、オレの味方が君の味方とは限らないし、オレ達の敵が、君の敵とは限らない。それは、オワリの国にいようと、中央にいようとね。だって、オレだって、そんなだから』

「え? いいの?』

彼の意図は判らないけれど。だけどオレは、彼の発した「味方でいる」という言葉を嘘だとは思えない。

「ミハマ~』

当然だが、抗議するような口調で主を責めたのはサワダだった。シウジさんは苦笑い。何故かイズミは何も言わなかつた。こうい

「……」とは、真っ先にミハマに文句を言こううだつたの。元。

「どうして？ オレは良いと思うけど。彼女に対して感情的にはともかく、中立の立場の人間がいた方がいいと思うし。むしろ、ニイジマ中尉とかで周りを固められても困るけど。今、監査に来てるサエキ大尉も実質上、彼女の部下だろ？ オワリにこれだけ彼女の手のものが集まっているこの状況で、余計に警戒心を強めるように追い込んだりどうするんだよ」

「……そりや、お前が考えた『良い方』の理由だろ？」
「何がそんなに心配かな？」

ミハマの笑顔の圧力に、サワダ」ときが敵うわけもなく、彼は黙ってしまった。

でも、確かにミハマの言うとおりだ。ミハマは彼女の味方になると語ったんだ。その言葉を信じるなら、彼女に頑なな態度に出られても、戦う姿勢を見せられても、良い方向に話はいかない。彼女とミハマの距離が縮まる結果になつたとしても、そっちの方がいい氣もある。

「お前は、あの女のためにビームである氣だ？」

「……どこまでって？」

「話を聞いて、味方になりたいつづいて、どうやって味方でいるつもりかつて聞いてるんだ」

そこまでサワダが話したタイミングで、イズミが席を立つた。しかし、その様子を気にする者は誰もいなかつた。彼は窓を開け、ベルンダへ出ると、小さな拳銃を取り出した。その先は考えたくもなかつたし、見たくもなかつた。

「面倒なことに首を突っ込む羽目にならないか？ あんな、魔王の子

飼いの女なんか

イズミがその台詞を言ったのなら、オレは納得できたかも知れない。だけど、その台詞を吐いたのはサワダだった。

「うーん。テツが言つ面倒なことって言つのが、どの程度のことなのか、オレにはよく判らないけど」

「判らないフリしてるだけだろうが。……判りたくないと言つが」「だって、テツもそう思つてないのに、何を持つて面倒だと言つてるのか判らないや」

「オレに面倒じゃなくても、お前には面倒なこともあるだろ?」「それはテツの考えであつて、オレはそつとは思わないけど。話してみないと判らないし、どんな状況になるかも判らないし。アイハラがいることが嫌つてわけじゃないなら、別に良いんじゃない?ビーブラブかなんて、誰にも判らないよ」

そう言われて、サワダは黙るしかなかつた。彼らは一人とも、何か含んだ物言いをする。けれどもそれが、お互ひを思つてのことだと、端から見ていってもはつきりと判るからこそ、彼らの言い争いは険悪にならないのだろう。少しだけ、羨ましい関係だつた。

この城の中で言われるような、派閥争いなんて、彼らには関係ないのかもしれない。だけど、関係ないからこそ、辛いのかもしれない。この城について、彼らと話をしても、やつとそれが分かつてき

た。

「……で、アイハラはどうする?彼女がここちに来てから、仲良くしてゐみたいだし」

何か、釘を差された気分だけど、ここは聞こえなかつた振りをしておこう。さりげなさ過ぎて怖いってば。もしかしなくとも、ミハ

「マツテ結構、嫉妬深いんじや……。

「いてもいいなら」

「よかつた」

「話はまとまつた?」

爽やかな笑顔を見せながら戻ってきたイズミが聞いたのは、サワダだつた。元通り彼の横に座り、食事を再開する。何をしてきたのかあんまり考えたくないけど、よく平然と飯が食えるもんだ。

「まとめられた」

「ま、そりだらうな。 テツちゃんがミハマに勝とうなんて、そんな図々しい」

「お前なら勝てるとも?」

「そこはそれ、交渉術でしょ? テツちゃん、真っ正面からぶつかるから。口は時として、剣よりも強じよ?」

田の前で噂話みたいなこと喋つてんなよ。ミハマが気にするとか、考えないのか?

「じゃあ、3時に呼びに行くから

気にしてないみたいだった。判つててあの態度か、コイツらは。イツキさんもシユウジさんも平然としてるじ。

でも、3時か……。今が8時半だから、未だ結構時間がある。

『お前、誰の味方なの?』

オレはティアスの味方でいたい。今なら、あのトーベジマの言葉こそ即座に答えられる。

彼女だけが、本当の意味でオレの味方だ。

08

朝食のあと、ティアスの部屋に向かった。少し心配していたけど、彼女はオレを快く中に入れてくれた。

黒いレースをあしらったコンパクトなワンピースに、ベロアのジャケット。それに太めのヒールのブーツを身につけていた。普段も柔らかい印象の服は着ない娘だけど、ケガをしていたせいか、もう少しラフな服装だった気がする。オレが心配しすぎるから、そう見えるだけかもしれないけど。

「どうしたの、急に？」

オレに、部屋の片隅にあるソファセットの横にある椅子を勧め、彼女自身はオレに断りを入れてからソファに座った。未だ、体が辛いのだらう。

「いや、今日、どうするのかと思って。ミハマ達に、どんな話するんだろうと思つて。オレにも何か出来ることがあるなら、オレは協力するよ」

「そう」

笑顔で頷いた彼女は、その表情を崩すことなく、続けた。

「でも、いいわ。あなたにも迷惑がかかる。自分だって大変なんでしょう？シユウジさんに聞いたわ」

「何を？」

「あなたの話。私に教えてくれたでしょう？それで、私のことを知ったシユウジさんが、昨夜……というか早朝、私の所に来たの。その時、あなたのことも聞かれたわ。彼から何か話を聞いてるかつて……オレが楽師のことを知ってるつて……」

「そう言つ風には聞かれなかつたけれど。ここに来てから仲が良いみたいだけれど？つて。その時、彼の仮説を聞いた。あなたが元の時代に戻れるように、調べてくれているみたいね」

シユウジさん、ホントに動いてくれていたんだな。疑つたようなこと言つちゃつて悪かつたな……。

「それはまた別だよ。オレは……多分大丈夫だから」「ホントに？心配だな」

やつぱりティアスは優しい。

「大丈夫だつて。今日、オレも話を聞いていて良いつて、ミハマに言われてる。だから」

「……ミハマが、私に味方を付けようとしてくれてるのも判る。だけど、それはあなたが感情的に私の味方をしてくれていても、立場は中立だから。あなたが私のために動いてしまつたら、あなたまで彼らの敵になりかねない」

そう言つて彼女は立ち上がり、オレを部屋から出るよう促した。彼女も一緒に部屋を出たかと思うと、廊下をオレと反対方向へ歩いていった。元老院のある方へ。

元老院といえば、サワダの父親であるサワダテツキがいる。ミハマがあからさまに敵視をする、政治的にも感情的にも彼の敵。だけど、彼女にとつてはここにいるための大変な後見人であり、中王

を介してつながっている男。

『云えて。』「しばらく動けないから、2週間後に彼の合図で動く」と。「それまでに連絡を取れる体制を整備して」『

彼女にさうとはっきり確認したわけではないけど。だけどおそらく、あの時一イジマ達に伝えようとしていた、あの伝言が示す「彼」って言うのは、サワダ議員のことだろう。

『あの方とはきちんと話されているのですか? 時期が早すぎない?』

だけど、彼と彼女たちは、連携がとれていない。だからこそティアスのあの態度だったわけだ。

彼を探れば、何か判るかもしないって思うけど……正直怖い。オレは彼に目を付けられるわけだし、そこを利用すればって思うけど。思つけど、オレには無理だ。あいつらですら、あんな態度なのに。出来れば、関わりたくない。だけど、彼女のためには何かしたいのに。

「アイハラくん……だったね? どうしたの?」こんな所で

出た! この人も神出鬼没! ……オレの名前すらひっ覚えのくせに、親しげに彼は話しかけてきた。オレと微妙な距離を保つたまま、廊下を挟んで壁際から。

「……………え……」

「こんな所と言えば、こんな所だ。ティアスの部屋の前だなんて。彼も、彼女に用でもあったのだろうか。それとも……。」

「ちよつじよかつた。君と話をしたいと思つた」

やつぱり。そんなに彼はオレに近付いているわけでもないのに、なのに逃げられない。蛇に睨まれた蛙つて、多分こんな気持ちなんだろう。イズミ対サワダのケンカよりも、この人一人分の威圧感の方がはある気がする。種類は全然違つけど。すこく怖いわけでもないけど。

いや、いいタイミングじゃないか。オレしかできないぞ? この人に突っ込むのは。

「あの、オレ……ちよつと……」

「君、あの子のこと最初から知つてたみたいだけど?」

オレ、断るつとしてたのに! 有無を言わばず話を始めるか?! しかも直球! いきなり!

「どうして?」

「えつと……知り合いに似てて……その……」

なんて説明したら良いんだよ。楽師のことを知つてゐて、この人にもばれたらまずいだろうし。ホントのこと言って、信じるとも思えないし。

「彼女は顔を隠していたのに? 似てるも何もないだろう? 王子が拾つたつて言うのも、おかしな話だし」

「いえ、あの、オレをここに連れてきたのは、サワダ……あの、息子さんでつ!」

変な汗が止まらない。

落ち着け、落ち着け! 別にそんな怖くないはずだらうが。口調

も穏やかだし。彼はしゃべり方も冷静だし。怖い顔してないし。見かけだつて、細っこいし、小綺麗な顔だし。別にオレには後ろ暗いことなんてないし。むしろこの人の方がそう言つのはいろいろ持つていそぐじゃないか。何でオレがこんなに怖がらないといけないんだよ。

でも、彼の穏やかな表情からは判らない、何かがオレにプレッシャーをかける。

「どうしたんですか？」

オレと彼の間に入つてくれたのは、反対方向へと歩いていったはずのティアスだった。

「元老院の方に伺つたら、こちらだと」

「君に用があつてね。たまたまアイハラくんがいたから、少し話を聞いていただけだよ」

彼女はオレに苦笑いをして見せ、盾にでもなるようにオレの前に立つた。オレのこと、心配してくれたんだ。

「何のお話？」
「聞こえていたろう？気になつただけだよ。それとも、言えないようなこと？後見である私に」

脅迫めいた彼の台詞に、彼女は溜息をつく。

「この子は、500年前の世界からタイムリープして、ここに来たんですつて。その世界に私や私の部下や、オワリ王子の護衛部隊の名前も同じそつくりさんがいたんですけど」

突然の彼女の台詞に、さすがのサワダ父も呆気にとられたような顔でオレ達を見ていた。

「それで？」

「私や彼らのそつくりさんの写真を、この子は持っていたの。驚くほど似てるんですって。それで、私が顔を隠していても判つたって言うの。だけどそんな話、あなたは本気で出来る？」

そう言われるとそれはそれでショックですけど。けど、ティアスがオレをサワダ父の目から遠ざけるために、やつらしているのは判る。だつて、彼女はオレの話を（正確にはシコウジさんの力で）信じてくれたから。だから今の彼女とオレの関係も、秘密を共有していた期間もあつたわけだから。

「するよ。ただ、君の言葉では信用できないかもしねないけど」

彼は、ティアスを見ることなく、笑顔でオレに近付いてきた。

「本当?」

念を押す彼の笑顔に、オレは黙つて頷くことしかできなかつた。

「驚いた。オトナシと同じ口を言つてるんだ、君」

「……どういうこと? オトナシが? ノウトと同じ口つて?」

「おつと。余計なことを言つたかな? ああ、でも、オトナシと会わせてみるのも面白いかもね。君たちの話が一致したら、お互いの話に信憑性が出てくるわけだから。聞いてみたい。オレ達は、タイムトラベラーを目の前にしてゐるわけだ。SFだな」

邪氣だらけの笑顔で言われても、不愉快なだけですけどね。余計

なこと言つたかな、なんて嘯くべしに、どうでも良いつて顔してゐる。いや、事態を引っかき回して楽しんでるようにも見えるかな。

ティアスの2度目の溜息が、事態を悪化させてしまつたことを物語つていた。

09

中王である「オトナシ」と、オレが同じ口トを言つてゐると、サワダ議員は言つた。しかもこの人、それを楽しんでる。

いやいや、そんなことより、この人が言つてゐることが本当なら。仮に、中王がオレと同じく「五百年前の世界」の話をするというのなら。

この世界を支配している男は、この時代の人間じゃないことだ。何があつてこんなことに……。

「おもしろいな。あいつ、人が変わつただけかと思つてたけど。一人ではなく、二人なら。その話を信じてみても良いかもね」

また一步、彼はオレに近付く。多分、野生動物に目を付けられたら、こんな気分なんだろう。この人にそれを感じるなんて、おかしな話だけど。元傭兵だって言つサカキ元帥とかなら、判らないでもないけど。

オレに手が届きそうなところまで近付いたとき、ティアスが再びオレ達の間に割つて入つた。

「変わつた？」

「そう、変わつたんだ。あの中王の座で、退屈そうにしていただけのあの男がね」

「いつ？判らなかつた……」

「君では判らないよ。君は、所詮あいつに拾われただけの女だ。鳥かごに閉じこめてる小鳥が泣き叫んでるくらいにしか思つてない。最初に気付いたのは、カズキだつたかな。オレの所に相談に来た」

また、知らない名前が出てきたぞ？それより、この隙にオレは逃げた方がいいんだろうか。ティアスの部屋の前とはいえ、ここはオワリの王宮だ。この人達、何つー怖い会話をしてるんだよ。それに、中王のスパイとかだつて、そんなこと知つてるのか？聞いてたらどうするんだよ？

オレの不安を察知してくれたのか、ティアスがちらりとオレに目配せする。それをオレに立ち去れ、と言つていると判断して、そつと後ずさりする。

いや、無理。それ以上の存在が、影から見てる。オレにだけ判るように、壁の隙間から、よく知つてる視線がオレを突き刺してきた。ここにいろいろつてこと？オレなんかいなくたつて、イズミがこつそり覗いてるなら、良いじやんかよ。何でオレにここにいることを強制するんだよ。

「オレ達とすら、関わりを持とつとしなくなつてきた。その代わり、酷く自分勝手になつた。そして、人に妙な期待をするようになつた」「期待？」

「例えば、あひるが成長して、白鳥にでもなつてしまつよつな。そんな期待をね」

ティアスが唇を噛みしめ、次の台詞を必死に考えているのがよく判つた。彼女のプライドの高さは、彼の台詞を許さなかつただろうことも。

「……だから、あなたはオワリにいるのね。中央にいればいいようなものを。その方が、あなたの息子さんも、いまよりずっと幸せなんじゃない?」

何を思つて、ティアスはサワダのことを口にしたのか、彼女の背中からは判らなかつた。

「どうだろうね。あの子は、いまの状態を望んでいるし、それによつて付随してくる不幸に甘んじている。君が気にすることではない」「以前は、中央によく出入りしてたんだしょ? サカキ元帥に聞いたわ。それがここ何年かはちつとも出入りしなくなつたつて。私があそこには捕らわれてからは、サカキ元帥達とだけ会つて、オトナシの元へは顔も出さなくなつた。随分久しぶりだつて聞いたけど」「だから?」

「自分勝手になつたオトナシに、見切りをつけたんじゃないかつて」「そんなことはないさ。ただ、それよりも大事なものが、オレにはずつと昔からあるだけだ。期待されなくなつた分、彼との関係は随分楽になつたよ」

サワダ議員の言つてゐることだが、オレには全くもつて判らん。彼は一体何を目的に、彼女を、そしてオワリを振り回すのか。彼女の言うとおり、中央にいた方が自然だ。何しろ、彼の昔の仲間とやらが、いまの中央の支配者達なのに。何が楽しくて、こんな支配国の政治戦争を、自ら行つてるのか。

「……何で、この国にいるの? あなたがこの国について、良いとは思えないわ」

「ずいぶんな言い方だね。どこにいようと、オレの自由だ」「あなたにはね。子供は、生まれる場所も、親も選べない」

生まれる場所を選べなかつたのは、サワダだけじゃないはずだ。ミハマも、イズミも、みんなそうだ。誰も選んでこの国にいなはずだ。

「辛辣だね。そんなに酷い親であるとは思つてないけど。君の親はそつだつたのかい？」

「知らない」

「そんなこと言われたら、親が泣くよ？」

「泣こうにも、戦争で死んでしまつたから」

彼女の声に、全く搖らぎがなかつたのが不思議だつた。そして、自分の昔の仲間がその戦争を引き起こしたんだと判つてゐくせに、顔色一つ変えないサワダ議員も。

オレは、彼女のこと知つてゐるようだ、何も知らないのかもしれない。彼女の重い過去のことを、この世界に起きたことを、オレは何も知らない。知りたくもない。

怖いよ。

「そんなところで何をしてる?」

オレの後ろに誰かを見つけたらしく、声をかけた。もしかしてイズミが見つかった? 間抜けすぎるぞ? 一つか、それつてますます修羅場じゃないか!?

「……テツ」

その名前に、ティアスも振り向いた。すぐに田の前のサワダ父の方へむき直したけど。

イズミが見つかることはましな氣がするけど、修羅場が待つていることは変わりない。つーか、何つータイミングで出てくるん

だよ、サワダのヤツ。オレは姿を見たくもなかつた。こちらを振り向いた時の彼女の泣きそうな顔を思い浮かべたまま、必死で彼女の後頭部を見つめていた。

今まで聞こえなかつた彼の足音が聞こえ始め、少しづつ近付いてきたのが判る。一体、彼はいつ頃からここにいたのか。

「いえ、たまたま通りかかっただけですから」

振り向きもしなかつたオレの背中を、彼は軽く叩き、ティアスの横に立つた。悔しいけど、少しだけ楽になつてしまつた。

「また、今度つて所だな。ぜひ頼むよ、アイハラくん」

「……せ

「一緒に、中王の元へ」

蚊の泣くようなオレの声ですら、容赦なく叩きつぶすといった感じの強い口調と視線を残し、彼は立ち去つた。息子から逃げたようにも見えたけれど。

「……いつから? なんで? いたにしても、影で見てればいいの?」

彼を責めるように、彼女は彼を睨み付け、立て続けに質問をする。彼は一瞬、オレの様子を伺つたようにも見えた。

躊躇しながら、彼は彼女に手を伸ばす。右手で彼女の肩に触れ、撫であるように首筋にも触れ、頬に手を当てた。

「そんな泣きそうな顔で強がられても、説得力ねえし

文句の一つも言つてやりたかったけど。サワダの台詞の方がよっぽど強がつてゐるよつに聞こえて、笑顔がやつぱり儂すぎて、何も言

えなかつた。

「オレのこととか、関係ないのに。生まれる場所を選べなかつたのは、お前も一緒に」

「でも、私は後悔してない」

「歯を食いしばりすぎると、血が滲むだけだ」

「それはテツちゃんのことだと思つけどねー」

突然隣に現れ、サワダの頭を軽く小突くイズミ、「彼も彼女も声が出ないくらい驚いていた。

あれ？ てつきりサワダもティアスも、イズミの存在に気付いているもんだと思ってたけど。知らなかつたってこと？ 珍しくない？

「い、いつからいた？！ お前！？」 ティアス、お前は気付いてなかつたのかよ、「イツに！」

「だつて……」

何、その反応。何でそんな恥ずかしそうにしてるかな。真っ赤になりながらおたおたする一人は、微笑ましいつづり不愉快！ あからさまに怪しいし！ なにこの一人の関係！

そして、何故か一人揃つてオレを見る。

「何だよ。……ティアスもサワダも、オレ、何か悪いコトしたか？ どつちかつつーと、お前らの方が……」

「そのためにアイハラを！？」

あれ、オレのせいみみたいな言われ方。

「テツちゃん、詳しく話そつか。オレ、ティアちゃんとテツちゃんにいろいろ聞きたいことあるんだよね。午後の話し合いまで時間も

あるし」「

「ミハヤにそう言われてるんだから、それまで待てばいいだろうが。
ちゃんということ聞くとけ」

「いや、状況把握とかないとか。ね?」

逃げようとしたティアスの肩を掴む。魔物より怖い。

「関係ないだろうが。それに、コイツの状況は父の話でだいぶ判つ
ただろうが?」

「だね。状況は……だけど」

彼女の肩を掴む手を、彼は離さなかつた。

10

彼女の肩を掴むイズミの手を、サワダが掴む。その行為が意味す
ることを、彼は理解しているのかしていないのか知らないけれど。

「別に、何もないし。関係もないし。何が聞きたいか知らないけど
「テツちゃん。しばらくくれてる状況じゃないと思うけど」

サワダが彼から手を離すと同時に、ティアスも彼から距離をとつ
た。

「違うよ、シン。何を疑ってるか知らないけど。じつはいつもりか
知らないけど」

「そう言うときって、なにを疑ってるか、十分理解してること

でしょ？」

「だから、それは違うよ。私とサワダ中佐は、何もないよ。むしろ、私のことを彼は疑っている」

彼女の皿と雰囲気に、あのイズミーでさら飲まれていた。

「ミハマや、あなた達を心配して、私に近付いてただけよ？あなたと同じように」

「だらうね」

「判つてゐるな」

飲まれたことが不愉快だったのか、他に何か意図でもあるのか、イズミーは彼女ではなくサワダを見ていた。

「最初はね。ミイラ取りがミイラつて言葉、知つてる？」

「ふざけんな。そんな話なら、後でしろよ」

怒つてみせるサワダだったが、オレには逃げてるよといきか見えなかつた。

「いいの。ミハマが私のことをどう思つて、話をする時間をくれたのかは判らないけれど、私自身がシンにとつて怪しい存在であることは変わらないし。だけど、それでも、シンが疑うようなこと、サワダ中佐は関係ない。彼は私を疑つてゐる」

「そのわりに……」

「全部きちんと話すから、安心して。ねえ、ミハマ、今からでも良いよ」

ミハマが後ろにシユウジさんを従え、こちらに歩み寄ってきた。

彼もまた、彼女にあらかじめ何かを話そうとしていたのだろうか？

この場所にこんなに人が集まるのは不自然だし。

「いや、いいよ。君も準備があるだろ?」

「あなたも、私に何か話があつたんじゃないの?」

「いや、そこでテツキさんに会つて……」

笑顔で彼女の隣に立つミハマの後ろで、ショウジさんがメチャクチヤ嫌そうな顔をしていた。要するに、あの人に会つて、彼はこっちへ様子を見に来たつてことか。

「牽制されたから」

「ああ、そうですね。あんた達の世界では、あれを牽制つて言つんですね。良いですけどね」

ショウジさんの溜息が、哀れで涙を誘う。また大人げのない会話してたんだろうな、あの一人……。

「牽制、ねえ。変なの。ミハマの前だと、の人まるで子供みたい。サワダ中佐の前ではちゃんと父親の顔してるのに」

「……ティアちゃん、それもちょっと違つ気が。サワダテツキがテツちゃんの前で父親ヅラをしたことはあつても、父親の顔をしているのは見たことがないよ」

「そんなこと無いよ?さつきだつて、そりだつたよ。見てたくせに」「あれが?」

イズミがオレに同意を求める行為に、ティアスが嫌そうな顔をして見せたが、オレも彼女とは別の意味で嫌な顔しかできなかつた。あの人に関しては、概ねイズミと同意見だつたから。あの人も、ミハマも、意味が判らない。

「何か込み入つてゐみたいだけど、君は少しでも休んで、早く傷を治してよ。テツもね。あんまりうひうひしたり、ストレス溜めたりは良くないと思うけど」

「別に溜めてないし」

「眉間の皺が跡になりそつなくらい、考え込んだ顔してるのに? 相変わらず、自分のことは見えてないよね。冷静さに欠ける守護者はいらないよ?」

突き放したようなミハマの台詞にて、サワダは歯みつきそつな顔を見せたが、すぐに引っ込んだ。

「オレにも素直に『休め』って言えばいいだろ? が、妙な気を回すな、バカ」

長い間、サワダを心配して言つて来た台詞を、ミハマなりの伝え方で彼に伝えていただけなんだ。だから、ミハマはサワダにだけ、少し違う氣の使い方をする。敢えて彼を見ないようにして、彼のことを心配していないかのように。

「だつて、テツはそう言つてもちつとも言つこと聞かないから。それより、シンに頼んで無理矢理にでも外出禁止とかにした方がいいのかな。休めつづってんのに、ピアノ室で練習してるって聞いたよ? 大体、昨日だつてケガを理由に引っこみこんでることだつて出来たのに

「ちなみに、昨日の夜、訓練場に顔出してたよ? 人がいない時間を見計らつて」

その後、温室に行つてサトウアイリと密会もしてゐるけどね。イズミは他にも色々見てるくせに、さすがにそれは言わないんだな、ミハマの手前。

「……何で知つてゐ、お前。ストーキングか？」

「だつて、お仕事ですから、隠密として」

「ちょっとはおとなしくしてることは出来ないのかな。イムラ先生にもこの間怒られてたし。昼食まで横になつてれば？」

サワダの腕を掴み、引っ張るミハマ。ショウジさんもいつそそれに加勢して、一人がかりで引っ張る。

「いや、もう、傷は埋まつて……」

「はいはい。状況はイムラ先生から聞いてるかい。富殿にいる医者じや、君の言いなりだから」

……穏やかな顔して、有無を言わせない男だな……。引きずられていいくサワダを、イズミもティアスも苦笑いしながら見送っていた。

「やられたな。完全にミハマに混ぜつ返された

部屋に戻ろうとしたティアスを、引き留めるために彼女の肩に手をまわす。

「馴れ馴れしいぞ、お前！」

オレですら、昨夜は一イジマの監視が怖くて彼女には指一本触れられなかつたのに、そんな簡単に肩を抱いて――

「五月蠅いな。大事な話の途中だつたろ？」「

「終わつたぢやない。何もない。今日、全部話すから。ちやんと。私が悲劇の姫君なんかぢやないってこともね。あの王子様が、私のことを何か誤解してるんじゃないかと思つて心配なんでしょう？それ

から、その守護者を誑かす悪い女なんじやないかつて、心配？

さつきまでのティアスとは違つ。影と毒のある女の顔を見せた。サワダと一人の時とも、ミハマの前とも、オレの前とも違う顔。

「そうだな。前半はかなり心配だな。大分掴んではいるけど、真相は君しか知らないし、現場に行かないと判らない。後半に関しては、自業自得だよ。ミハマを裏切るような真似はさせないし、するなら……いや、それはいいや」

「自己完結。何か含んでるよな、イズミのヤツ。それをティアスが見逃すはずもなく、彼女もまた含んだ笑顔で彼に問うた。

「シンは、随分我が儘なのね？ミハマがあんなにサワダ中佐のことを守っているのに、彼らの間を引き裂こうとする。知らない方が、引っかき回さない方がいいこともあると思わない？」

「そうだね。守ってるけど……」

「そうでしょう？ミハマはサワダ中佐を守ってる。サワダ中佐はそれに負い目を感じながらも、それに甘えている。でもそれに関してもあなた達も、その程度の差こそあれ、同じ状態だと思うけど」

「テツほどではないさ。けれど、…………そうだな」

「ミハマが、サワダを守ってる？逆じゃなくて？」

オレの疑問に、ティアスは笑顔で応えた。その真意は、その表情からは読めなかつた。作られた笑顔を浮かべる彼女からは。

「そうよ。ミハマはね、サワダ中佐を懐に入れることで、彼を守つていてる。その行為によつて、彼は以前にも増して攻撃を受けるだろうコトを、そのリスクを理解していながら。彼の親友は、自分の政敵である男のたつた一人の息子なのよ。しかも、彼のすぐ下にい

る、数少ない王位継承権を持つた、ね

彼女の言葉の意味を、おそらくオレなんかより、イズミは遙かに理解をしていたのだろう。見たこともないような悲痛な面持ちを見せていた。

「よく……判らないけど……」

おそらく、またイズミが怒りそうだったから、オレは小さな声でしか聞くことが出来なかつた。それに気付いたのか、イズミがオレの顔を見て苦笑いを見せた。

「サワダ中佐は、派閥争いにも、権力争いにも、残念ながら全く興味のない人だわ。閉じちゃつてるのよ、良くも悪くも。だから、ミハマはそれを理解して、彼にはあの態度だし、彼を自分の懷に入れている。ミハマは、サワダ中佐のためのシェルターになつてゐるのよ、この狭い世界で攻撃に晒されないように。サワダ中佐にだけじゃない、彼の護衛部隊全てを、彼は守つてゐる」

その言葉が、限りなく真実に近いことを、イズミの表情が物語つていた。イズミやサワダが不自由の中での、自由に考え動けるのも、彼らの主である、ミハマが彼らの盾になつていてるから。そしてその盾を守るために彼らは戦つ。

その状況を、ミハマはどう思いで作り出したのだろう。

だけど、オレの頭には、彼の笑顔しか出てこない。

こんな状況でも、「敵も味方もいるから幸せ」だと、彼は笑うのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4757b/>

Switch【モラトリアムを選ぶと言うこと】続・序章

2010年10月8日21時29分発行